

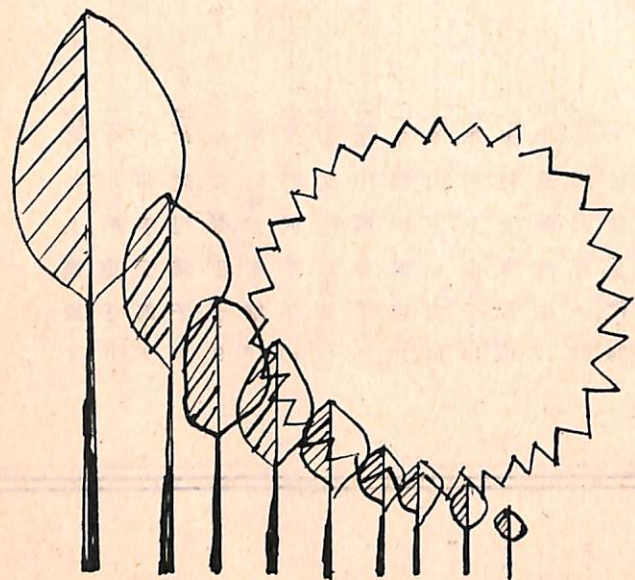


保存用
永久保存

	No. S - 64
東京都立松原高等学校図書館	

東京都立松原高等学校

ル・クール



東京都立松原高等学校生徒会

目次

詩	卷頭言	「る・くる」に寄せて……	校長井上速雄	4
	底に秘めもの……	三年	川崎恵子	6
	今年	二年	井手三郎	7
	自然	三年	渡辺雅子	7
	少女	一年	浅野正子	9
	群狼	三年	阿曾村孝雄	10
	小さな歴史	三年	野沢裕子	10
	河	三年	久慈真素美	12
	ぎつちよの字	二年	中西春美	13
	音楽	一年	岡田君恵	13
	「……」	一年	山下一夫	14
	あした	一年	村上由紀子	15
	あのこの目	一年	村上憲吾	16
随想	「日記抜粋……スキー教室」	三年	進藤尚生	17
	ヤツと俺と柔道	二年	成沢淳一	22
	秋思	三年	谷口全代	24
	Mさんのこと	三年	石塚秀実	25
	憧れの人物	二年	森田美佐子	30
雑感		一年	宇佐美純子	30

俳句	和歌	論	創作	教師	編集後記
二年	二年	二年	二年	二年	二年
九橋秀夫	茨木保行	谷口愛子	清積哲也	大島信六	大石清司
32	32	33	40	105	107
三年	三年	三年	三年	三年	三年
阿曾村孝雄	阿曾村孝雄	阿曾村孝雄	阿曾村孝雄	阿曾村孝雄	阿曾村孝雄
42	42	42	42	42	42
二年	二年	二年	二年	二年	二年
山田信和	山田信和	山田信和	山田信和	山田信和	山田信和
44	44	44	44	44	44
一年	一年	一年	一年	一年	一年
横山和可	横山和可	横山和可	横山和可	横山和可	横山和可
51	51	51	51	51	51
三年	三年	三年	三年	三年	三年
浅村益弘	浅村益弘	浅村益弘	浅村益弘	浅村益弘	浅村益弘
61	61	61	61	61	61
二年	二年	二年	二年	二年	二年
板倉俊彦	板倉俊彦	板倉俊彦	板倉俊彦	板倉俊彦	板倉俊彦
92	92	92	92	92	92
三年	三年	三年	三年	三年	三年
河田正人	河田正人	河田正人	河田正人	河田正人	河田正人
88	88	88	88	88	88
二年	二年	二年	二年	二年	二年
雪は知っていた	雪は知っていた	雪は知っていた	雪は知っていた	雪は知っていた	雪は知っていた
92	92	92	92	92	92
三年	三年	三年	三年	三年	三年
青木明節	青木明節	青木明節	青木明節	青木明節	青木明節
101	101	101	101	101	101
二年	二年	二年	二年	二年	二年
卒業生に送る	卒業生に送る	卒業生に送る	卒業生に送る	卒業生に送る	卒業生に送る
105	105	105	105	105	105
三年	三年	三年	三年	三年	三年
大和久鈴江	大和久鈴江	大和久鈴江	大和久鈴江	大和久鈴江	大和久鈴江
106	106	106	106	106	106
二年	二年	二年	二年	二年	二年
ある祝宴に列して	ある祝宴に列して	ある祝宴に列して	ある祝宴に列して	ある祝宴に列して	ある祝宴に列して
107	107	107	107	107	107
三年	三年	三年	三年	三年	三年
一人の乞食	一人の乞食	一人の乞食	一人の乞食	一人の乞食	一人の乞食
108	108	108	108	108	108
二年	二年	二年	二年	二年	二年
雪は知っていた	雪は知っていた	雪は知っていた	雪は知っていた	雪は知っていた	雪は知っていた
109	109	109	109	109	109

” 卷 頭 言 “



” る ・ く ー る に 寄 せ て “

学校長 井 上 速 雄

四月着任以来約十ヶ月校内の事務におわれたため”る・くーる”のことまでに手が及ばず、生徒会の機関誌として毎年一回発刊され、すでに十回程出ていること、はじめは文芸誌として起ったが後には、政治、経済、宗教、教育等をもめざし、綜合雑誌的な性格を持つに至った位の知識しかなかった。今年の”る・くーる”を発行するに当り巻頭言を求められて、なおよく知る必要があるというので已に出たものを急に読んで見た。”る・くーる”に対する考えは従って、にわか勉強であるために多少的はずれでないかと思うが率直に感じた事を述べて見る。第一に高校生らしい多感な情純な詩が多く載せられている。これは喜ばしいことであるがその数が多いことに驚いた。ついで随筆、創作となつて段々と量も少く質も劣つて行くように感じた。研究とか論文になると愈々少くなるようだ。 ”る・くー

る”がフランス語の「心」という意味であるならば心の活動の全てに同じく及ぶべきである。一方に集中するとか一部に限られた事は感心出来ないことである。ことに文芸に於ては和歌、俳句は全然なく、又、政治経済や時事論文は少なく、映画、演劇の評論は皆無である。これは諸君の精神活動が極く狭く限られていることを物語っている。

もっとこの方面の原稿が諸君の中から集まつてよいのではないかと思う。またスキーやスケートや陸上競技でも水泳でもよいこの種の記事も欲しい。とにかく生徒諸君が相当に研究し、思考し練習した記録や体験に関するものが誌上にぎあわすようにあつて貰いたい。編集についても見掛けた所、形式も内容も規格化しマンネリズムになっている。はじめは興味は引くが一度よめば翌年から出るものには関心がうすらぐのではないか。このへんで新機軸を出すべきである。

それにしても多くの原稿を集めねばならぬ。生徒諸君が卒業迄の間に文芸作品でも随筆でも何か一つ必ず出されたらどうだろう。自身にとつても良い体験となろう。また”る・くーる”の内容の充実にも大いに役立つであらう。こんど出る”る・くーる”の十一号はどんな体裁か内容はどんなになっているかまだ見ないので全く知らない所である。以上は九号十号を見ての私の考えであり、従つて私の今まで述べたことが巻頭言として当らず相応しくなくなるかも知れない。そうなれば”る・くーる”の進歩であり改善があつたことになる。もし当つておれば、次号から編集に大いに参考にして貰いたいと思う。

底に秘めるもの

三年 川崎 恵子

青い海 打ち寄せる波
 岩にぶつかり しぶきを上げる波
 碧く 深く 悲しみに沈む波
 微かな波を立て 立琴を奏で
 静かに去って行く海。
 白い貝 赤い貝 青い貝
 真珠の涙？ 銀色の魚の鱗？
 広く淋しく 白い砂浜に
 残されたもの。
 乙女の仄な望みに 似たもの。
 赤い太陽 ふりそそぐ光
 町を 嶺を 世界を蓋う輝き
 紅に燃え 歓びをもたらす太陽

それは 子に対する
 母のふところに似たもの。

今年

二年 井手 三郎

一びょう……
 二秒・三秒。
 ああ、今年はどう
 去って行く。

ズズズ……
 そんな感じがする。
 どうしても
 今年を終わらせたくなかった。
 しかし、時間は
 ようしやなく、
 今年を追いたてた。
 僕だけの時間があつたら、
 今年だけで、
 それを止めてしまうのだが。
 たんたんたん

激しい光を浴びせかけ

ラテンを掻鳴らし

宇宙を駆け廻る太陽

赤い光 黄い光 青い光 白い光

とびちる火花か アポロの汗か

無限に広がり そして与えるもの。

少年の明日の未来をたゞえるもの。

白い雲……

流れる雲……。 広がる雲――。

いかりを含み 陰をひそめ

おゝいかぶさる雲

広い空を ゆつたりとさまよう雲

白い道……

続く道……。 果てない道……。

ほこりを立て 水にうるおし

花を咲かせる道。

白い朝……

静かな朝……。 霞んだ朝……。

一日の始まりを示し 時を待つ朝。

やわらかく包み

あたゝかくふくらむ雲。

限りなくたどる道。

冷やかに

もの静かに落ちついた朝。

たんたんたん

今年は 去って行く

去って行く、

まっくらな闇の中へ

黙って 去って行く。

心は沈み思わず泣きたくなる。

時間よ、止まってくれ。

お願いだ、止まってくれ。

時間よ。

今年だけは

いつまでも

いつまでも

とどまらせて、おきたいんだ。

自然

三年 渡辺 雅子

とうとうと流れる川は
 その飛沫をあげ
 涼風を送り

幾重にも雲を映し
木かげから山かげに消える

岸辺の木かげに
身を横たえ
虫の音に耳を傾ける
甘い草の香が
唇にまつわる

夜明けのバラ色の陽光が
いつか彼方に消え去り
山々のふもとが白く煙る
朝露が葉の先を転がり
虫の音が静かに切れゆく
めぐり来た夏の日に
木ノ間を走る紅
緑にこぼれる百花の宴
一心に陽をあび
無心に咲き匂う
昨日を競った花は
今日の前に頭をたれ
色あせて涙する

かっと照りつける陽は

高原の強い日射が
容赦なく私の肌をせめる

なにをするのもものうい
八月の太陽の下に
小さい影を落とした私

激しい音をたてる流れは
いつかその水面を紅く染めた
しのびよる夜気の底に
ひっそりとその姿を沈め
じっと立った私を包み始めた

少女

一年 浅野正子

朝霧の湖上に揺れるボートの中に
少女はすわっていた。
「誰を待っているの、」と問うと、
「あなたの影を、」とつぶやき
少女は横を向いた。
黒曜石のひとみに涙をたゝえて

私の肌をやき
昼の日射は強く
私をせめる

断ち切られた都会への
未練が私の胸を占めた
しかし日の前の切りたった山は
私をその場にしばらくつけた

私は立っていた
まるで射すくめられたように
沈黙のまま

自然の偉大さの前に
私は負けたのであろうか
甘い夢が音をたててくずれてゆく

先刻まで私の胸にあった
もろく美しい偶像は
傷ついた鏡の中に
ひからびた情感と共に
みにくい姿をさらしていた

私は立っていた

野菊の咲き乱れる丘に、
少女はねころんでいた。

「何がうれしいの、」と問うと、
「あなたのことが、」とほゝえみ
少女は空をあおいだ。
点髪に野菊を一輪かざして

うっそうと茂った森の中に、
少女はたゞずんでいた。
「なぜここにいろの、」と問うと、
「あなたを忘れるために、」と呼び
少女は去っていった。
みどりの黒髪をなびかせて、

悪戯な妖精のように、
私の心にしのびこみ
そして音もなく去っていった少女

また私の心にもどっておいで、



群狼

三年 阿曾村 孝雄

一面の灰色に、
凍てつきし原野の、 杜絶せり。
疾走せる群狼は、
枯死せし希望の上に喘ぎ、
周囲は嘆息のみ……

群狼歩を止め、
互の青き顔を視やる。
吠へ狂へり 十八頭の若狼。
薄き大気を突き破るは、
彼等が動哭と白き牙……

群狼頭を擡げ、
赤き眼に、 地平の彼方を視やる

荒ぶ流れに耳張りたり、十八頭の若狼。
地に在るは、
昔昏の光、 群狼の陰……

疾走せり群狼、
疾く、更に疾く。
白き滾りは、凍てし野を暖め、
溶解せる氷雪は、 血となりて大地に滲む。
蘇生よ希望、復活よ希望



小さな歴史

三年 のざわひろこ

一つの世界
うごめく有る生きもの
一つは女
そして男

愛し合ったり愛されたり

騒々しい都会
静かな田園
それはどこでも良い

私は女
彼は男

緊張の続く都会の中で
美しくそれは生まれた
ささやかな喜び
華やかなひととき
答えは得られない
反応は無い
けれどそれは
汚れの無い水晶、

現われた一つの女
彼の目は輝く
青春の喜びに
果てしない秋空の下
私は傷つく
私は進む

暗やみの中
行くえも知れぬ
彷徨の発路
絶望
悲しみ
ヒタ／＼と押し寄せる
憂うつ
総にそれは始まった。

現われた一人の男
頭をもたげる
悲しみという一かたまりの私
私は輝く
目はうるむ
青春の喜びに。

愛し愛され
そして傷つく……。
限り無く永遠に続く
此の小さな歴史
そんな中にも何かが有る。

河

三年 久慈 真素美

あなたに恋をしました。

灰色の水を

塵埃の流れの

そのあなたに

恋をしました。

美しい星空の下に

夜の光に

あなたの面がキラ／＼と

何よりも輝いている

そんな夜でした。

絶える事なく

ただ流れつづけて

あなたは

何を考えているのでしょうか。

凍るような星空の下に

夜の光に

あなたの面がキラ／＼と

何よりも輝いている

そんな夜でした。

太陽があなたを見つめます。

ほこりにまみれた体で

灰色に染まった心で

冷たい微笑を浮かべて

あなたは去っていきます。

月があなたを見つめます。

美しい輝きを残して

静かなさやきを残して

あなたは去っていきます。

去る……

そう！

あなたは進んでいるのです。

歩んでいるのですね。

灰色の水のかけで

塵埃の流れのかけで

私にもわからないように……

あなたに恋をしました。

灰色の水を

塵埃の流れの

そのあなたに恋をしました。

美しい星空の下に

夜の光に

あなたの面がキラ／＼と

何よりも輝いている

そんな夜でした。

ぎゅちよの字

二年 中西 春美

ぎゅちよでエンピツもってごらん

もったら紙に書いてごらん

心がね、幼なくなつたのしいよ

でっこばっこの字がね

しかめっつらして笑ってる

音楽

一年 岡田 君恵

音楽はいつ聞いても楽しい

友達に仲間はうれされた時

父母にしかられた時

私達を慰めてくれる音楽

歌いたくない時も

つい口ずさみたくなる

今まで暗かった心の中や
今あったいやなことが
遠い昔のように思われる

「.....」

一年 山下 一夫

青白い輪郭のない男が
私を誘惑する。
小さな私には大き過ぎる程の
オフィスは暗く青い。
わずかに消えそうな赤い光と
固い四面の壁。
何もかも
包み込んでしまいたいような
その薄らやみの中で、
気味の悪いその男は
私を惑わす、
実に巧妙な手段を持って
やってくる。
背中から
じみじみとしみ込んでくる
どろどろの靈気は

毒液のような強烈さで
反発のすべてをまひさせる。
いえぬ不安を感じて
逃げようとしても
ドアの鍵は丈夫で
絶対に開かない。
おしても動かぬ壁を背にして
なま熱い汗をべっとりかき、
青白い男の追及をうける。
その顔は
神秘なくらい無表情。
まひは
いよいよ広がってくる。
盲滅法
かけずり回って
その無駄を知る。
ああ
あんな気味の悪い男に
抱擁されるのはいやだ。
つつ立って
今一度部屋を見回す。
震える足。
天窓だ。
三寸じほどの光の矢が

私の目を射った。
窓だ。

あの外に出る。

男は「くっ」とも言えず
昇華する。

と同時に男の影から

鮮かな緑の水滴が
したたれおちる。

全く鮮やかな。

高い

いすがある、

机がある

ロッカーもある。

なぜ気が付かなかった。

(余りに近すぎて)

これを積んでいけば.....

カチカチカチカチカチカチ

青暗い中で

私は仕事を始めた。

少しも衰えず

未だ続いている。

あのいまわしい男の

あるいは律気な男の誘惑は。

あした

一年 村上 由紀子

あしたはどんな日だろう

そしてどんな事が起こるだろう

早くあしたになりたい

でも少し心配だ

固い固い約束をしたきのう

私はとてもうれしかった

幸せだった

味のある生活を送ろう

そのことばに私達は指きりした

私の人生がこれから始まる

スタート場所 それがあしただ

もう絶対後悔しない

心配もしない

空想の中に生きた私は終った

これからは現実に生きるのだ

もし夢が破れたとしても

その時だけの事だ

あのこの目

一年 村上憲吾

みんなが私と遊んでくれる
勉強してくれる、
苦しみも
楽しみも
あしたからは
私のものではなくなる
なぜって
それはみんな平等にわけあうから
それこそ本当の人生よ

さあ みんな手をつなぎ
かたをくんで
足をそろえて
ほらほらその人
よそ見をしないで
あすへの道を進もうよ
現実の道を歩こうよ

そこで夢と過去の戸びらは、
しまった
そして未来の戸びらが
しづしづと開いた

茶色の目で半ば開きかけた
しずくに包まれるその目で
その目はずかしそうに
白い指がかくしていた。

かんがえていた
あのこは
あの清いかわいらしい
茶色の目で遠くを見る
おぼろげにもとめるその目で
その目を淡い苦悶が
ふんわりと包んでいた。

随筆



「日記拔萃」

——スキー教室——

三年 進藤 尚生

二月二十六日

十時五十分、新宿の開札口を出て真直ぐ集合場所へ行く。これか

わらっていた

あのこは

あの深く澄んだ茶色の目で

ばっちり開いた

あたたく輝くその目で

その目を漆黒に光る

まつげがおおっていた。

おこっていた

あのこは

あのきびしくすぎとおった

茶色の目で大きく開いた

するどく光るその目で

その目を熱い興奮が

とりまいていた。

なっていた

あのこは

あのさびしく弱々しい

らのスキー教室への期待で、誰もが幾分興奮しているように見える。女子の参加者は、三年が一名、二年が四名、一年が八名。一年は七名までが、一Aからの参加者で、点呼までの時間を持て余した私達は、集合所をあらこちらと歩きまわって、寝ていた浮浪者の安眠を妨げてしまった。

バスに乗ると、ものの十分もたないうちに酔ってしまい、胸がむかむかしてきた。夜の新宿のネオンサインでも見て、気を紛らそうとしたが、ひっきりなしに流れる自動車の排出するガスが、肺へと侵入して、更に悪いものにしてしまう。一端酔ってしまうとバスが止まらない限り、おさまらない。そのうちに、窓の外は真暗になって、一寸先は何も見えない。時計は二時を指している。バスの中は、豆ランプだけが燈され、先程までの騒ぎは止み、シーンとしている。寒さで目の醒めた私は、長靴の中の爪先が冷たくなっているのに気がついた。スチームが入っているというが、それらしい感じは全然しない。胸のむかつきと、寒さで再び眠る事が出来ない。バスは軽井沢の駅前で一時停止。降りると町はひっそりとして、静かに雪が降っている。一台の列車が入って来た。誰も降りない。そして切符切りの姿も見えない。冬の軽井沢、何とも言い難い情緒を感じる。

再びバスに乗るとすぐにむかつきがきた。窓の外に首を出して、氷のように冷たい空気をすう。余りの冷たさで鼻につんとくる。目と鼻の先に、雪で所々白く化粧をした岩肌が見える。バスは細いくねくねとした山道を、どんどん登って行く。一步誤ればそれこ

そ干尋の谷へ真逆さま。

家を出る時、兄が「夜の山道を自動車で行くのは、危険なんだよ。なぜならどんなに熟達した運転手でも、夜は「感」で走らせるからだ。人間である以上、感違いをしないとはいえないからね。」といったのを思い出して、背筋が冷たくなった。

顔がごわごわしてきたので、首をひっ込め、マフラーでしっかり顔を包んで横になる。とりとめない心配をしているうちに、いつか眠ってしまった。囲りのざわめきで眼が醒め、時計を見ると七時を指している。三十分で山田寮に着くと聞かれ、ほっとした。昨夜はひっきりなしのむかつきで、全く悪夢に包まれた夜だった。辺りは一面雪、雪、雪。

十二月二十七日

山田寮は二十四日から来ているワンゲルの人達が、まだ寝ていた。初滑りは午後からになり、私達は始めて用いるスキーをかついで、山道をゲレンデへと登って行った。途中スキーが何度も肩から滑り落ちそうになったが、それでもやとゲレンデまであける事が出来た。スキーを足につけていざ動こうとすると、足に根が生えたかの様に、一歩も踏み出せない。ウンウン言っているうちに、どうにか動ける様になった。その時、佐藤先生が私から百メートル位離れた傾斜三十度位の所に、旗を立てて集合を合図した。おちちらおちちらと方向をかえて旗の方へ行こうとした。が一歩進むとすぐに一歩後の水平の面に、もどされてしまう。何度やっても同じだ。見るに見かねてか、側を滑って行く人が「エッジを立てて、エッジを立て

今までさして心よく思っていなかった人などもこのスキー教室という一つの枠の中に、共に入って生活をする姉妹のように感じられ、深い愛情をおぼえる。小学校以来の数々の夏期施設や修学旅行に於て、こんな感じをもった事は、かつて一度もなかった。

十二月二十八日

朝、雨戸を開けて、まず目に入ったのは、雪におもわれた連山：何て美しいのだろう。何て神秘的なのだ。しばらく無感覚状態が続いた。

行ってみたい。死ぬまでに一度。……あそこで死ねたら何て素晴らしいだろう。……雪の重みでしななかった枝が、私に何か話しかけている。雪化粧された大木が、安らかな死を私に与えようとしている。そして、日頃は無慈悲でも今は、私の死の為に幾らかの安らぎを、与えようとしている岩もある。……あゝ本当にあそこで死ぬ人は、人一倍の幸福ものだ。例その為に一家の軒が傾こうとも……この強い感動は、激しい山への目覚めなのだろうか。もしそうだとしたら、私も世界一の幸福ものになれる。

昼すぎにはリフトに乗ってずっと上まであがり、ちょっと右の足首をへんにしたが、無数の穴をあけながらも斜滑降、方向転換とジグザグに下降して、無事『ベルガ』に到着出来た。がこれはたゞ単に降りただけで、滑走を楽しむなどというものではなかった。「その場所からの下降に充分の力がついてからも、なかなか降りれなくなり上達への逆効果になる。」という叔父の忠告など、すっかり忘

てて」といって行く。が私はそのエッジたるものが何であるかもわからない。二年生のSさんが来て、お手本を見せてくれたが、思うように立てられない。やっと目的の旗の所へたどり着き、そこで基本を習った。夕方にはスノーボードに乗り、穴一つあけずに休憩所『ベルガ』まで、降りてこられた。半制動も上々である。

晩には皆が乾燥室のストーブを囲んで、種々雑多な話をし、スキー教室ならでの楽しい時を過ごした。私の横で二年の酔いどれ紳士が、ウィスキーをチビリチビリとやっている。私の啞然とした顔を見ても、動揺の気配も見せず、慣れた手つきで、キャップへと注いで飲んでいる。その囲りを取りかこむいかさま紳士は、「俺の分も残しておけよな。」「全部飲むと、夜中に寂しくなるぞ。」「ちえっ、あと少ししかないぜ。」などといって、自分も一口御馳走になろうとしている。

しかし大人の世界へ背のびしているこの人達を見ていて、少しも不愉快な気持が起きなかった。なぜだろう……。

女の子だつて決して背のびをしてはいえないとはいえない。それこそタバコを吸ったり、お酒を飲んだり、パチンコ、マージャン等と遊んだりはいないが、マニキアを塗ったり、薄化粧に懸命になったり、ちっともかわりのないことをしている。そして、全部が全部悪いとはいえない。お酒は疲れに一杯、寒さに一杯、となかなか役に立つ。

室へ引っ込んでからは、一Aの教室気分で、一しきり食べたり、しゃべったり……食べすぎてMさんから胃腸薬をもらう程。

れて、持ち前の冒険心と無鉄砲さで、何度もリフトに乗り……全く懸命であった。が最後の最後まで直滑降の段階になると起る恐しさは、抜けきらなかった。

夕方近く私は大失敗をしてしまった。スノーボードであがり、いざ直滑降でと方向転換をしたとき、どうしたはずみか片方のスキーが靴から外れて、あ、あ、あ、といっている間に、スーと真しぐらに下へ滑っていつてしまった。さあ、大変、片足で滑ることが出来ない私は、おろおろとスキーの行き先をみつめるばかり。その時、佐藤先生が滑って来て助けて下さった。私は空の足を先生のスキーに乗せ、片方のスキーを先生のもう一方のスキーの内側に、ピッタリつけて先生につかまった。スタート。充分にスピードを楽しみながら真直ぐに下へ……。転んでストップ。この時私は、転び方が上手だとほめられた。その時は変なことをほめられたものだと思っていたが、後になって転ぶことがいかに大切であるか思いしらされた。私のスキーは、Mの字を示して雪の上に立てられている。どなたか御親切な方がして下さったのでしよう。

今夜は昨夜よりも活発に話に花が咲いた。誰ももうすっかり慣れた様だ。火いじりの好きな私は、ストーブの焚き口に陣どって皆の顔を見ていた。今夜は酔いどれ紳士の酒盛りはないようである。隅の方でコックリ君とグリスカ君がまたれかゝり合ひながら眠っている。何て器用な事をしているのだろう。隣の彼がいうには、山岳部員は列車で寝る事が多いので、この様な寝方は何でもないそう

だ。

この時、寮のおばさんが洗濯物を干しに乾燥室へ入って来た。今日も幽霊が出たとぶつぶついついてる。よりによって、元氣一杯の若者で活気の満ち満ちているこの山田寮に、幽霊が出るなんて……びっくりにしてしまった。囲りの男子が何かいっているが、こゝまで聞えない。後でわかったのだが、配善の時に室の人数分以上の食事をとりになるので、その室に幽霊がいるに違いないと、茶目っ氣を出していったらしい。配善の係の人の話によると確かに室の人数分を渡したのにもどってきても一人足りない、二人足りないといってくる。渡したといっても足りないといひ張られては、渡さないわけにはいかないそうで、人をなめていって、ブンブンしていた。しかし成長盛りの男子、特に運動した後では、おどんぶ一杯の食事では足りないのに違いない。しかも女子の様に嗜好物が多いわけではないのだから。おばさんが行ってしまったからしばらく彼と、化学の試験について話した。

計算問題がよく解けないので点が下がってしまふといっていたのは、憶えているが、あとは楽しくて頭がボーとしていた為か、自分が何を話したかも記憶していない。今思うと彼は話しのムードを出すのがとても上手で、いや上手すぎて頭をとろけさせてしまふ。



寝に行こうとしていた時、Yくんがトランプの恋占をしてくれた。現在では私の思いが大火事の如くで、相手の思いがぼや程度だが、未来には相手の思いが大火事になる可能性充分だと断言した。何かもだとかばやだとか私の愚昧程度の思いとは大部かけ離れた。何かのすごい情熱になってしまったので、少しも信じる気になれない。といった悪い気はしないし、その様になってくれたらいいとも思う。今夜は何か素晴らしい夢をみるかもしれない。

十二月二十九日

雨戸を開けると、ちらちらと雪が降っていた。冷凍ミカンを食べようと昨夜ビニール袋に入れて、窓の下に吊しておいたのが、コチンコチンになって、歯がたたない。金曜でも駄目な程。蒲団から出るのがとてもつらかった。

グレンデは、まだ二、三人しか滑っていなかった。昨夜からの雪が深く積って、先頭のマツバヤ君に続く私の足は、一歩降ろす度に膝までかくれてしまう。スノーボードもまだ運転されていない。登るのいつもの二倍の力がいる。登りきっていき滑る段になると、登る苦勞を思い出して、一気に滑ってしまうのが惜しい気がした。それでも下腹に力を入れて立てていたエッジを水平にするとスキーと滑り出す。あわててひざを屈折する。耳もとでビューンと風をきる音がする。あつ前方に誰か転んでいる。右足を開いて右へ回転しな音。おっとと、右へ行きすぎちゃった。こういう時は、右足をちょっと開けば……そうらOK OK、これで真直ぐになった。眼鏡に雪があたつて見にくい。確か前方に、小山のようなも

のが見える。ジャンプしなくちゃ……よいしょと……しかし、実際にスキーは少しもあがつていない。……ウワア……チカチカ星が見える……どこかボキッと鳴ったが……首は真直ぐ前を向いてついているから、まずまず大丈夫だ。しかし、左の足首が痛い。捻挫かな。我慢して歩いていこうと、直ちやう直ちやう。しかし、この交叉したスキーを、どうやって直そうかなあ。全くこの長いものは扱いにくい。これが上手にさばけるようになったら、私も一人前なんだけど。それにしても誰か来て助けてくれないかしら。これがアメリカだったら私みたいなブスでもすぐに男性がとんできて、こんな無様な恰好を、人目にさらさないようにしてくれるのに。それにひきかえ、松原の男子は……。一人で足をばたばたさせてみたが、一向に効めがない。その時、U君が救援に来て、それはそれは親切に足からスキーを外したり、とんだ帽子を拾ってきて下さったり……時がただにU君が世に二人といないいい人に思えて、少しの捻挫などはなんでもなく思える。しかし、夕方グレンデを降りる時になって痛みだした。まして下り道は足に力はいっている。Y君のストックを借りて松葉杖がわりにしたが、学校のは安ものの竹なので、折れはしないかと気になって、思うようにつけない、そこで白杵先生が肩をかけて下さったので、ずっと楽になったが、十四貫のボディを支えるのに、ずい分重かっただろうと思う。本当に世話をやかしてしまつた。

今晩は最後の夜だといつて、U、Y、T、H、M、Iと、マージャンで徹夜慣れた面々で、二時半頃までナポレオンをして遊ぶ

だ。すでに消された乾燥室のストーブを焚いて、ちょっと失敬した後期スキー教室用の卵をゆでたり、夜中の台所からご飯をよそってきたり、一枚の掛け蒲団の下へ円陣型に足をつつ込んで、いくらかのぬくもりを得ようとしたら、誰もが千年の昔からつき合ってきたような感じがして、全く二度と味わえない楽しい夜だった。この夜の事は、生涯忘れ得ない思い出となるだろう。

十二月三十日

早目に昼食をすませて、寮を十二時に出発した。途中、あちこちに止まったので、むかつくひまがなかった。バスボーイが面白おかしく解説して下さるうちに、暗くなつてしまった。後の座席のM君とS君は、バスが止まるごとにお酒を買いに降りて行く。がお口に召すのが見つからないらしく、いつも手ぶらでもどってくる。とうとう見つからないままに新宿についてしまったが、私の右横に座っていたたくましき男性は、かわいい坊やとトランプをしながら、さつきから横目でチラチラ私のひざの上のスルメを見ている。

スルメといえは、今度の旅行で一番人気があった。普段さしてもてないスルメが、一端山へ入ると我然と人気を集める。夜ストープでやかれた一枚のスルメが、取り囲む十数人の人にとびつかれて、御本人の手もとは短い足が一本というあわれな話もあった程。

そこで、今しがた降りて買ってきたスルメを渡すと、あつちからも、こつちからも手がニョキニョキと出て、あつちという間に一貫の終り。残るは空の袋の残がいばかり。

全くスキー教室が始まった一秒目から最後の一秒間まで、楽しく愉快なことはかりだった。

ヤツと俺と柔道

二年 成 沢 淳 一

高校へ入っての始業式の時、ヤツが「おまえ柔道部へ入らないか？」と俺に一番最初に話しかけてきた。俺は一瞬とまどったが、「まだ良くわからないや」と言った。これが俺とヤツとの最初の会話だ。これ以来俺とヤツとの一年半のつき合いが始まったのだ。教室に入って俺とヤツとは席が前後した。自然ヤツと俺とは口を聞く回数が多くなった。ヤツは数回俺に柔道部へ入らないかとさそったが俺はことわった。ヤツは入学後さかんに柔道部において活躍していた。

ある日は学校においての柔道の試合を見に行った。ヤツの番が来た。ヤツは少しこわばった顔をしていたが、たてつづけに六七人抜いてしまった。この時俺の心は動いた。ヤツに出来るものが俺には出来ないものかと考えた。そして一学期終了間近になって、俺はヤツに、「俺柔道部へ入りたいんだが」と言った。するとヤツは快く了解してくれた。その日から練習だ。最初は受身だけ。しかし今まで柔道なんかやったことのない俺にはつらかった。だが柔道部の先輩そしてヤツが親切に教えてくれた。皆が投げたり投げられたりしているのを見ているのがつらかった。俺もいつかはあのように投げてやろうと、心に思っ受身の練習をした。数日後俺とヤツとが初めて練習をした。結果はヤツのいいえきにされた。背負い投

昇段試合が間近になった。この頃になると練習に出て来るものが少なかった。しかしヤツはその中にまじって熱心に俺にけいこをつけてくれた、しかしヤツの教えてくれた通りにすれば受かると思いい、懸命に練習した。そして当日俺はヤツの言った事を思い出しながら試合した。おかげでどうにか合格することが出来た。そしてヤツに電話すると「よかったなあ」と大変喜んでくれた。この時俺はヤツというばかりでかい目標があったおかげで受かったんだと心の中でヤツに感謝した。合格後は黒帯をしめて練習に精を出した。ヤツも今まで通り練習に出て来て大いにあばれた。そして三年の送別試合の時はヤツが一人で大活躍してOBをおどろかせた。このようにして一年間は過ぎ去って二年になった春休み、ヤツを含めた三人で大菩薩峠へ前夜発で出かけた。ヤツは山の経験があり、俺にいろいろな事を話してくれた。しかし不運にもヤツが豆を作り嶺まで行くことが出来なかったが、ヤツは持ち前のファイトで峠までがまんをして登った。俺だつたらとうていがまんできないだろう。この時俺はヤツを見直した。二年の最初の頃ヤツはよく練習に出て来た。又試合でも大活躍をした。俺とヤツの差は一向に縮まりそうもなかったが、ひと頃はど投げられなくなった。俺の試合成績は勝ったり敗けたりとお恥しい次第であった。だが俺はヤツを目標にがんばった。一学期の後半になるとヤツは練習をさぼるようになった。しかし試合においては、今まで通りの強さを発揮していた。夏休みに入ると合宿があった。俺は参加したが、ヤツは都合で参加出来なくなり大変残念だった。しかしこの間にヤツとの差を縮めるんだとがんばった。二学期になってヤツと久しぶりの練習をした。しかしヤツ

げ、足払い、大腰、巴投げなどヤツのくり出すあらゆる技に俺はほんろうされてしまった。しかし俺は今にヤツみたいに強くなるんだと心に決めて練習した。一週間も練習すると足腰が痛くなってくる。柔道がこんなにつらいものかと初めて知った。しかし一たん入った部を練習がつかないという一語でやめるなんか、俺の恥だと思いい、又いつかヤツを倒すんだという希望にもえて練習した。夏休みに入って合宿があったが、俺は都合で出られず残念だった。又他人に差をつけられたかと思っ残念だった。そして二学期に入り、柔道の練習もいよいよ本格化してきた。俺はヤツに背負い投げを一番最初に教わったが、一発もきまることがなかった。その時ヤツは「俺も最初きまらなかったが、試合で一本背負いで決めた時以来きまるようになったんだ」と俺にヤツの経験談を話して慰めてくれた。そして二学期の初めに俺の初めての試合があった。その時ヤツが何かとアドバイスしてくれたおかげで、恥をかかずにすんだ。そしてヤツはいつものごとく五六人抜いた。俺はそれを見て早く俺もあゝなりたないかと思っ。そして練習の帰り道俺は「練習はつらいが、終わった後は楽しいなあ」とヤツに言うのと、ヤツは「そうだなあ」と言った。事実練習は大変つらかった。しかしヤツというばかりでかい目標があるおかげで、部をやめようと思う気持はすぐに消えていた。秋も深まったある日、ヤツの昇段試合があった。俺はヤツが合格するものと信じていたが、一寸心配だったので、試合のあった夜ヤツに電話をかけると、ヤツは「うかったよ。」とさすがにうれしそうに言った。ヤツはそれ以後も元気に練習し、俺もそのうち初段になる日があると信じて練習した。年が明けて、今度は俺の

を投げる事は一向にできず、ヤツの投げをこらえるのに精一杯だった。そのうちにヤツは家庭の事情で学校を変えてしまった。変える数日前ヤツが練習に出てきた。久しぶりにヤツが出て来たのだった。ヤツは俺と練習した時、俺に「大分強くなったなあ。」と言った。しかしこの時もついに俺はヤツを投げる事が出来なかった。後で考えるとこの日がヤツの最後の練習日だったのだ。そして最後の相手が俺だったとはすこし皮肉だ。俺はヤツが消えた後、急に一つの大きな目標が消えてしまったようがっかりした。「今まで何のために練習してきたか」と考えると残念でしょうがない。俺とヤツは勉強の方は丁度良い相手だった。だがヤツは自分では勉強なんか余りしてないと言っているが、もしこれが本当ならば俺なんか足元にも及ばないだろう。又ヤツが学校をやめるすこし前に柔道大会があった。ここでは一般、大学、高校の初段五十人位が集まっただろう。その中でヤツは奮戦奮闘してベスト8に残った。このベスト8において高校生はヤツ一人だけであった。しかもヤツはこの二ヶ月練習らしい練習もせず、なおこんなに勝ったのだ。もしヤツがまともな練習をしていたらどうなっただろうかと考えると俺はヤツを尊敬する気持でいっぱいになってくる。又柔道をしている時のヤツの顔がもう見られないかと思うと残念だ。そして俺とヤツが同じタタミの上で力を争うことが出来ないかと思うと残念でしょうがない。もしヤツという人間にめぐり会うことができなかったら、きっと俺は柔道なんかせずに高校生活をくらしていただろう。しかしヤツにめぐり会ったおかげで一つのスポーツを身につける事ができたのだ。こう思うとヤツに感謝する気持でいっぱいだ。

ヤツのもう一つの点を紹介しよう。ヤツは一年の時上級生からさかんに文句をいわれ、又いじめられた。しかしヤツが二年になった時、こんな事を二度とくり返さないよう努力し、下級生をいじめるような事を絶対的と言っているほどしかなかった。こんないい友だつたヤツが、もういないかと思うと残念だ。だがヤツは今頃どこかのタタミの新しい相手と黙々と柔道をやっていることだろう。

秋思

三年 谷口金代

ここらあたりは東京近郊の小路を思わせる静寂さと鬱鬱気を持つている。道端の草叢の繁みの中に、秋の七草の一つフジバカマがすでに咲いていた——淡い紅紫色に花卉を染めて——。顔に生乾きのその葉を近づけると、香りのよさが漂いあたりの空気をさえさせた。正門から入るとすぐにマツ・ナラ・ブナなどの巨木がうっそうとしていて、黒土の歩道をさらに暗くしている。標識通りに第一コースよりたどる……。薄暗い道のへりには今では大分珍しくなってきた野草の類が群れて咲いている。茎が三角で両端から裂くと、カヤをつたような四角形が出来るので、俗にカヤツリグサと呼ばれているゴメガヤツリ。そして紅紫色で可愛らしい小粒の花が沢山くっついていてイヌタデ。又の名をアカマンマこの野草を見るたびに田舎で育てられた私には懐かし、また幼い日々の思い出が勢いのよい早瀬のように甦ってくる。そして憂愁と童心の中に自

黒い羽のトンボが止まっていた。また近ごろうとして草むらに足を踏みだしたとたん、トンボは沼の上へとんでいった。赤トンボを求めてデコボコで埃っぽい坂道を登って行くと、先程の沼が見える高台に出た。樹々はいも変わらずどの木を見ても枝ぶりがよく、リボンのように細い路をまだらに染めていた。赤茶けた土の路を長い間下ったり登ったりして「小鳥の森」に出た。名の知らない小鳥が数匹しか見られず、もしカラスが小鳥の部類に入るならこの名称も決して悪くはない。騒々しくわめきたてるカラスの鳴く声があたりに響き、木霊して今までのあの静寂とあのどかさの跡形もなくまるで泡のように消失してしまった。このあたりは花ビラ、ガク、オンベ、メシベすべて真紅色のヒガンバナが群れて咲いている。一名マンジュシャゲともいう。周囲の暗緑色の大樹と対照的な色彩の花である。まるで自己の存在を主張するかのよう強烈に鮮やかに、毒々しくこの木深い路のここ、かしこ到る処に固まっているのである。この辺より路は平坦に細く長く続いているようである。雑木林は自然のまゝに枝はからみあい幹には奇妙な模様編み出されている。そしてこのようなかで紅葉したつた、うるしの木などは異様なまでの神秘性を生んでいる。またもや閑寂を破るカラスの音が……。すすきの穂がまぶしく銀色に輝いている。変わった植物が草の上につるを作り葉を葉に重ねておもしろい形を作っていた。それが谷間の方に落ち込んで、斜になっている。まるで柔らかなクッションのように、連なりあつて草の上に浮かんでいる。ふとセーターを見ると胸元に何かくっついていて。これはよく見かけていたずらをしたくなるイノコツチ。節が特に太いのでこれをイノシ

身を甘やかしてみるのが常であった。アカマンマの他にハコベ・ナズナ・オミナエシなどと秋の野草は今を盛りとして、爽やかな秋の中にその身を置いているのだった。雑木の間の細長い小路をたどると前方に池のようなものが大樹の梢越しに見え隠れする。入口で受け取った案内図によると「ひょうたん池」のようである。枯れて色づいた枝が池の面にすれすれに垂れ下がり、今にも朽ちて落ちそうな様子である。そのような時にその一枝から、小鳥が一羽ぱつと羽音を残して飛び立った。梢が小揺ぎして水面がにぎやかになり深味をおびた。風流なベンチになっている丸木に腰をかけて、水中を見るときも眺めると、鯉が二・三匹泳いでいるのが時々見えた。濃緑の木々と秋らしくからっと気持ちよく澄んだ空だけが鯉の上に一杯に拡がっていた。水中に小石を投げて、波紋のおもしろさにはばらくみとれる。余りの静かさに驚いて後を振りかえるが人影は視野に入らない。そこから飛石の変わりにひいてある年輪を見せた丸木の上を歩いて行くと、眼前によしの群がのびているのが見え始めた。田舎風な木橋の端で一本の丈の高いよしに触れていると突然に、風が起きてよしの葉が一様に靡き顔にあたった。そして目をよしの根元に近づけるとゴミのような透明なエビガニの子が無数に泥底になりついていた。このような光景はここが都会の一部だという事を忘れさせ遠く故里に戻ったような感じをさせる。秋空を仰ぐとそこに一匹の赤トンボが飛んでいた。——棒切れを持って稲束がまるでカベのように積んであるあぜ道を、赤トンボを追ってどこまでも駆けていった小さな頃の事がふと心を掠めた——。その荒れ果てた沼のほとりの草の一片に、線香のように細く

シの足の関節にみたててこの名がついたそうである。道はまだまだ続くようである。前方に「水鳥の沼」がぼんやりと見えはじめる。私は不幸にして一羽も見事出来なかった。前の池よりもきれいではない。小魚が群をなして泳いでいる。道はたにはツエクサが見られる。そのわきに背の高いジュズダマが首をかしげて秋風になびき葉はカサカサと音をたてて秋の深さを思わせる。すすきの穂がまたここに見られ、いつのまにか正門に来てしまった。ここは芝白銀の自然教育園。そしてその名の如くありのまゝの自然が楽しめる所である。

Mさんのこと

三年 石塚秀実

松高を去って行くのに、何もしないのはつまらないから、ル・クルに創作でも出そうと思って、『恋愛小説』みたいな物を書いたが、なにしろ経験不足と文学的なセンスがないので途中でやめてしまった。それでも何か男女関係について書きたかったので、Mさんとの文通のことをここに公開する事にした。以下は僕とMさんとの文通についてありのままに書き記したものである。恋愛とかいうものとは、ほど遠いが、少しでも男女関係について読者のためになるならば、こんなうれしい事はない。Mさんと僕は中学二年まで同じ学校に居た。彼女は背が高かった。(今では一メートル六〇で僕より二センチも低い。)それで陸上競技が得意だった。頭の方もきれ

る人だった。終業式が終わると僕はあこがれの東京へ転校した。彼女も又、その中学校を去って鹿児島へ行った。

その時から文通が始まり毎月かかさず延々と四年目の今日に到っているわけだ。

そんなに長い間何を書いたのだろうか？と自分でも不思議に思う事がある。手紙の内容としては、学校の話、生活の話、受験の話、精神的なもの、はては、世界状況と広範囲である。

こんな長い文通であるが、今まで僕は彼女を好きだと思ったことはない。「好きでもないのにそんなに文通が続くわけはないよ。」と誰か友人が言った事があるが、本当なのだ。僕は、自分がMさんにどんな感情を持っているのか自分でわからない。というのは、僕の心の全部を彼女に告げたのだ。たとえば「初恋をしました。↓失敗しました。」という風に。自分のすべての心は、自分の一番好きな人に告げるのが普通の心理である。それなのに「初恋をしました。」と彼女に書いてある。もし僕が彼女を好きならば、好きな人が出来たんだなんて書けるわけがない。又初恋をした人に、僕にはこんな風に文通している人がいますとは言えなかっただろう。とすれば自分の一番好きな人よりもMさんが近い事になる。これはきわめて不思議な現象だ。この奇妙な心理に解答を求めるならば、それは僕とMさんが初期の恋愛というものよりずっと強い友情というきずなで結ばれているからだといえるだろう。確かに友情だと思ふ。僕がMさんに「初恋の人が出来た。」と書いた時Mさんは僕に「しっかり頑張って下さい」という励ましの手紙をくれた。もし彼女が僕に愛情を持っていたらその手紙を見てきつと憎悪を持っただろう。そして

みが流れていた。僕は彼女の肩に手をかけながら……（これはうそ！気をもませて申し訳けない。）僕の顔をなぞた真夏の風がいやに冷めたかった。とにかく映画の一シーンのような思い出の一コマである。その時僕は何を話したか全く覚えていない。台風が近づいているので波も心なしか高く、二人の頭上へ桜島の方から黒い雲が走り去った。しびれをきらした船はついに岸壁を離れた。Mさんからのおみやげを左手に右手に彼女のテープを引きながら別れた。港が小さくなるまでMさんの影は消えなかった。その晩木の葉のような船の中で始めてMさんに好意を抱いた。Mさんの話をしたら父はニヤリとし母はしぶい顔をした。こゝで最近の彼女からの手紙を公開しよう。

今晩は、もうずいぶん寒くなりましたね。南国奄美男児は大学入試めざして勉強したり、食べたり、ギターをひいたりしている事でしょう。中間テストの前は大へんいゝ経験をしましたね。秀実さんて案外思慮深いんですね。お話を聞かせてもらってから私にもずいぶん役に立ったと思います。私は短気ですから思った事をすぐ行動に移してしまう方です。やかましいと思ったら「ちょっと迷惑にならないかどうか考えたらどう？」とやっつけてしまいうで大いに考えさせられます。太い人生の道を歩めるようにあらゆる方面から自分をきたえてゆきましょう。私達は勉強してやろうという目的の他に自身を人間的にきたえるという大事な目的をかついて大島を飛び出したんですからね。こゝらでくだけた話でもしましょうか。先週の日曜日だったかしら、町へ出て行ったらデパートでひょっこり小学校時代の友達に出くわして食べながら話してもしましようとい

文通も終っていたらと思う。しかし彼女は喜んでいて。励ましてくれた。僕も又彼女にボーイフレンドが出来れば応援してやるつもりだ。もし彼女との文通がなかったら僕は随分女性について悩んだかもしれない。自分が好意を持っていた人が、他の男子といっしょに楽しげに歩いているのを見た時とか好きな人の写真や「あの人がもらったのさ」とか言って持っているのを見た時でさえ笑顔でいられた。自分の心の苦しさをポストに入れてMさんの返事を持つた。僕は元気づけられた。だから僕は女生徒に恐れを抱けなかった。なんのわだかまりもなく大びらに自分の心を語った。いろんな人と話す事も出来た。そして女生徒も男子同様いろいろな性格を持ちそれ／＼に長所を持っていた人達ばかりだという事もわかったのである。僕はMさんに会ってみたいと思っていたが、今まで「会えはたさず」であった。しかし待望の日はやって来た。今年の七月十八日午後五時五分僕はMさんと久し振りに対面した。くわしく述べよう。四月からノイローゼ気味だった僕は、期末考査が終るや否や田舎へ飛んだ。鹿児島から田舎へ出港する船は鼻息が荒かった。棧橋で波を見ながら「Mさんこないのかもしれない……。」と不安であった。セーラー服を着てる女学生が向こうから走って来るのを見た時心が止った。「きつとMさんだ！」僕は近づくと影を待っていた。影が近づくとが随分長かったようであり又短かったようでもある。彼女は僕に気がついていたらいい。五m位の間をおいてとまった。目を伏せた。長いおさがゆれた。僕はメロドラマのヒロインのようなものごしでやゝ足早に彼女に近づいた。うつむいた彼女の額が眉の流れが神秘的だった。頬から首すじにかけてほのかな赤ら

って話をするうちにびくびくしたのは、彼女はもうミセスなんですよ。ほんとうにびくびくして……。ミセスだとわかったらもうてんてんてん話があわない。まるで子供と大人みたいな感じがして……。AさんはどうBさんはどうか話すうちに私の初恋だったK君の名が飛び出し、何かへんな感じになりました。初恋と言っても小学校五六年の頃の話を、自分は何も考えていないうちに第三者があつた二人は仲がいいとか何とかいって……バカみたいですね。K君は頭もいゝ万能型で気が小さすぎる位おとなしかったので男の子によくいじめられていたのを時々私が助け舟を出したことがあつたと思います。K君のために（身がわりになって）私がいたずらにこにじめられたことが何度もあつたのに彼はノータッチ。私は弱者の味方にしか思っていないのですが、古仁屋へ転校して改めて、小さな胸をいたませたと記憶しています。もうあえないんだと思って涙を流したこともあつたような気がします。秀実さんが高校になって初恋したのに比べて早かったんですねフフ。今じゃ彼ボクシングの選手ときいてこれ又びくびく片想いだつたので残念でした。あまり勉強ばかりしていると頭がつかれるのでたまにはこんな話も悪くないと思ひ書いて次第です。文通をするという事はお互いが異なった環境の中から得た知識を交換して共に向上しようという長所があると思ふんですが、今日はちょっとはすれて申し訳ない。さあ、希望校は決まった後は実力のためすべく入試を待つのみ／＼しかしその間が大へん。私、バカな証拠に時々「あゝ勉強なんていやだ。たつた一二枚のテストのためにこんなにも心の負担が必要なのか。」と思って何もかも投げ出してやりたいような気にさえるのです。でもこんな

気持なんて誰にもわかりっこないと思って、友達にも話した事がないんですけど、第一志望がダメなら親の望んでいるK校でも行こうと思っっています。が、この親父のいう事もたまには聞いとかなといけんし。Y大学頑張っただけいね柔道で来たえた厚いじょうぶな体は少し位の風邪等にはへこたれないと思ひますが……。ここに写真を送ります、遠足に写したのですが、「君笑うことなかれ！」では今日はこれで失礼します、さようなら。

秀実様

十一月十五日

M

というように彼女との文通は僕の生活において一つの大きな精神的さゝえであつた。彼女との文通のおかげで僕は随分生長したと思う。来春は彼女も東京の大学へ行くはずだ。これから二人がどうなつて行くか、自分でも全く想像が出来ない。離れていたという事と文通というムードが二人を結びつけていたかもしれないが、会って話してお互いの内面をもっと深く知った時二人が、友情以上に発展するか友情が消えて行くか……とにかくこれから先が楽しみである。



憧れの人物

二年 森田 美佐子

常に自分をありのままにさらけ出して、思った事、感じた事、何でも遠慮なく言つてのける人物、人々を恐れず、周囲の目を気にする事なく、何時も朗らかで屈託なく、ものごとくにこだわらない——というような人物は、どんな場所にあつても、常に優な立場において暮す事が出来るものである。又それと対称的に、ものごとに動ぜず、必要以外の事は喋らず、みだりに喜怒哀楽の情をあらわさず、いやしくも人の機嫌をとるような言動は絶対せぬというような人物は、また常に人々から尊敬され、幸福に暮す事が出来るものである。私はそれをよく承知している。ところが情ない事に私はこの両方とも、持ち合せていない。常に望みながら、なる事の出来ない自分のふがいなさをつくづく残念に思うと同時に、そのような人物に常に憧れて暮している。

自分を裸にして暮す生活、誰の気兼ねもなしに、思った事、感じた事をそのまま表現する生活だつたら、どんなに気が安まる事だろう。一日でも良いからそんな人物になれたなら……。私にはやっぱり出来ない。私の心に「見栄」や「虚栄」という感情がある限りは、私が一人ぼっちの世界に行かない限りは……、周囲の目を避ける事は出来ないだろう。

オーバーな言い方かも知れないが、それ程私の心はまだ未熟

で、憧れの人物にはほど遠い存在なのである。常に周囲の目を気にし、一時として気の安まる「時」、「場所」を持たない私はどんなに惨めだろう。まるっきり何も知らない馬鹿の方が、盲目で耳の聞えない人の方が、私よりどんなに尊く偉いかも知れない。「ふり」をする事のみの生活で、私は本当の自分を忘れてしまつていたのだ。いったい、今まで自分を誰と感違ひしていたのだろうか。どのような洋服で、自分の身体を着飾っていたのだろうか。たとえそれがどんなに立派な金、銀等で作られていても、私の身にあつたものでなければ、何の価値をも得ないと言ふのに……。そればかりか、何事にも打算的で、妥協的であり、御用聞きのごとく会う人毎に機嫌うかがいをし、吹けば飛ぶような紙人形のごとく、常に人によりそつて暮している自分、こんな自分をい、やという程わかつていても、改める事なく、今日も明日も又明後日も……。も続けようとするこの心。何にもまして憎いのは、この墮落しきつた心なのだ。何故、改めようとしなないのだ、間違つていゝとわかつていながら……。抜けきらない程染つてしまつたのだろうか。落せる垢なら、何としても落したい。「悪にそまるとは易きも、抜けるはむずかしと同様に、私がこれからこの墮落しきつた心から脱皮するに、長い月日と強い信念を要するのだ。自分自身が望み、且つ願つたような人物になりきつた時には、もう私の生活する場所は、どこにもないかも知れない。それ程私には遠い人物なのだ。私には憧れの人の人なのだ。

私はもう「ふり」をする、偽りの生活に厭きた。今度こそ自分を裸にして暮したい。ありのままの自分にかえりたい。しかしいくら裸

になつても、その裸の自分に満足する事は出来ないだろう。人間が洋服を着る如く、私はまた裸の自分に洋服を着せるであらう。しみを隠すために、あらゆる手段を考え、そのはてはどんな物を使つても、それを隠そうとするであらう。いくら隠しても、自分の心までは、隠す事の出来ないのを知つていながら……。人間は、必要に応じて洋服を着たり、脱いだりするのには、私は馬鹿の一つ覚えのように、洋服を脱ごうとしない。ますます私はその上に、偽りの洋服を着せ続けるであらう。でも何時かは、その重荷に絶えられなくなる時が来るだろう。目がさめるのだ。しかしそれは遅すぎる。もう脱ぐ事も、着せる事も出来なくなつてしまふのだ。自分で自分の周りを囲つてしまふ事になるのだ。自分には、もう自分の姿を見る事が出来ないのだ。周囲の目には、どんなに哀れな醜態に見える事だろう。全くの珍光景である。これ程自分の姿をわかつていながら、なお私は、洋服を着せようとしている。しかも他人の……。今ここで脱皮出来なければ、私は一生墮落した生活から、抜けきれないであらう。今までのように、人から軽蔑されるような生活はしたくない。いや絶対にしてはならないのだ。そうならないためにも、これからは、是が非でも偽りの洋服は脱ぎすて、そうして自分を裸にし、ありのままの自分に返る事だ。心も身体も軽やかに出発するのだ。憧れの人物になれなくても、純粹の自分に戻り、自分の道を、自分なりの生き方で進むのだ。他人には他人の生き方のある事を、忘れてはならないのだ。これからは、憧れの人物は憧れとして追い続け、生活の上の一つ

雑感

一年 宇佐美 純子

私の幼な馴みにオッコちゃんという女の子がいた。彼女とは家が近くで小学校も同じで四年生の時から同じクラスでとおした。彼女はふとっていて、成績は一番ビリだったし男の子には一番イヤがられていた。彼女はクラスの中で一番騒々しく又みんなに嫌われていた。グループに入っていていつもいじめられ、損な役ばかりさせられ泣いてばかりいた。私は彼女に同情して、又昔から彼女が大好きだったので、私のグループにひっぱってきて、いれてやり、彼女に親切にした。私の仲の良い友達もみな彼女を歓迎し喜んで親切にくしてくれた。私は彼女に本をあげたり、その頃大切にしていたお人形のカードなども惜しみなくあげた。私とその頃の私の親友とは彼女が勿論喜んでいてくれると思っていた。でも彼女は六年生になると私達から出て又もとのグループに帰っていき又泣かされていた。でもそこから出ようとはしなかった。最後には彼女が他の生徒の給食費を盗んだなどという噂もまった。中学生になると学校が変わり彼女とはほとんど会う事が無かった。二年生の夏休みに彼女が家出して、バーで働いていると聞かされた。彼女はいつも女優になりたいと言ってみんなに笑われていた。彼女がどうして私のグループから出て、泣かされたながらもそのグループにいたのか今でも不

私は彼等の話の仲間入りをしたい気持ちでいっぱいだった。

私の家の近くのY駅にいつも夕方になると集まっている少年少女の群れがある。彼等の内には中学校を共に通った人もいる。彼等はひとときは目立つ服装をして、人々の目をさらっている。人々の内には何か彼等に対して文句をいう人がいる。けれども彼等は決して他人には、迷惑をかけたことがない。だから彼等に対してとやかく言う事を許される人はいないのだ。ハデな服装をして大きな声でしゃべるのについて言えば別であるけれども。彼等はみなとても楽しそうに、人生の幸福を手につかんでいるような口調である。大人はそれを不良と言うけれど、ともかく彼等は他人の生活には干渉しないで、楽しそうに、愉快そうに見えるのだ。彼等も又私の知らない世界を持っている。母の知人に何人も若い人を使っている人がいる。そこに働く人々は中学を出てすぐ働きに出た人で、中学時代にも、本を読んだりする事も余りせずに過ごして来た人が多いそうである。彼等は映画俳優と歌手と人のうわさで日を過ごしているという。知人は彼等達に「おまえ達と違った他の世界があるんだよ」とおしえてやりたいという。鳥かごの中の小鳥も、もっとステキな、あるいは、鳥かごの中よりも苦しいかもしれない沢山の世界を知らない。私は高校に入ってスタンダードの「赤と黒」を読んだ。そしてここにも今まで知らなかった他の世界があった事を思った。

私に小学校四年の男の子の従兄弟がいる。彼が友達を連れてきて遊んでいる。私が「コンチワ」と顔だすといつもアワテテドアを

思議であり、そんな魅力がどこにあったかも不思議である。彼女の家はごく平凡な家庭で不幸なことは何もなかった。彼女は家にいない。どこかで働いているという事しか私は聞いていない。

高校に入って、毎日学校の帰りの電車でろう学校の生徒の少年達と出合う。最初は彼等がろう学校の生徒である事を知らなかった私は、みんながふざけているのかと思っていた。彼等は声のない会話をしている。身振りはあまりしないけれどもよく口を開いて話している。久しぶりに一人で帰った時電車で四人の男の子と出合った。四人とも黄色のFとマークの入った野球帽をかぶっていた。一人の帽子には一と入っていた。中学一年生ぐらいだろう。彼等は電車の中の宣伝を指さして話していた。私はよく話しを通じるものだと思う。又、かわいそうにと思い、知らずの内に、少年達の顔を同情の目を持って見つめてしまった。少年達は私が瞬時目を見つめて目の前で見ているので、気がついたのか私の方を指さして見ている。私はその時何て悪い事をしてしまったのだろうと思ひそして少年達の心を傷つけたのではなかっただろうかと思ひ自分が恥しかった。しかし少年達は私を見てからバカにしたように笑っていた。私を指さして手をバーのようにしていた。もしかしたら「あの女バカみたい。」なんて言っていたのかもしれない。それから私はホッとした。少年には人から同情され、かわいそうになんて思われている気持はキット少しもないのだ。少年達には何も変っている所なんか無いのなもの。もし私が「かわいそう。」なんてこと言ったら彼等は何故だろうと首をかしげたに違いない。次にこの生徒達と会った時、

閉めてカギをかけてしまう。学校の帰り道にきまって遊んでいる小さな女の子と男の子がいる。私が笑うと男の子にバビューンとピストルでやられてしまう。実際、私には入れてもらえない所ばかり。

私は学校での出来事をすべて母をつかまえ、追いかけてまわして長々と話す。だから母は何でも知っている。お友達の話、今日誰が先生にしかれたとか、クラスで一番ノッポい誰だとか、オチビは誰だとか、体育祭でイカした人とか、なんでも話す。母にも話したくないこと、人に口出しされたくないこと、そっとしてほしいもの、秘密にしておきたいものがある。こんな気持は昔から幼ない頃から変わりなく持っていたものだ。中学時代のクラスはグループが特にはつきりと別れていて中にはお高いとか非難されたグループがあった。私はこれにはいつも憤慨していた。誰がお高いなんてことが言えるのでしょ。人は自分の生活は干渉されずにいるのを望むのに、他人の事、その世界を干渉することは許されるのか、と。

家の前をニコソンの人達が通ります。広い道を車をガラガラひきながら、真白い長いひげをしたオジサンはいつも一番うしろからゆっくりとついて行く。家に来る牛乳さんは牛乳配達をしながら大学に通っている。もっと沢山私の知らない世界がある。



二年 丸橋 秀夫

夕焼けに 色なお赤し

蔓珠沙華

白樺の 彼女に青き

冬の山

こもれ日の おちゆくさきや

春の竹

遠山の 雲を背にして

麦を踏む

忘れし 木陰に咲きたる

福寿草

月光に はきわすれり

落葉映え

墓石の 花輝やけり

彼岸かな

青草を 踏み越え歩む

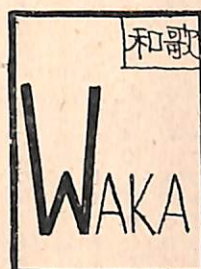
裸馬

藤浪の 山路のゆくて

茶屋かすむ

潮風に 色映えばえと

茶山かな



二年 茨木 保行

片隅に墓標も消えて花もなし

夕闇空に煙とけいく

隅の席若き美し二人の娘

手まねの会話衰れを誘う

晩に浮かぶ古木等降らす雨

落葉積りし沢の岩間に

今日も暮れ枯葉の中に身を投ず

夕日の彼方向をか求む

霧かけて虹の橋浮く福寿草

露とかわりて一筋流る

泥靴で紅きじゅうたんのし歩く

落葉の拍手我等を招く



宗教の必要性

二年 谷口 愛子

「人が教育を受けるといふ為には少なくとも、次の三つの事を知っていないなければならない。すなわち自分の立場と、どこに向って行

っているのかという事及び、いかなる事態におかれてもなすべき事を知っているという事でなければならない。」とジョン・ラスキンは云った。また古典物理学に基礎を置いたニュートンでさえ自分は海辺で小石を集めている子供で、自分の目前には未知の真理の大海が横たわっていると云ったように我々をとり囲んでいる宇宙には多くの謎がある。その中でも人間自身の謎——「人生とは何か」「人生の目的」「人間とは何か」「人間の運命」という事は誰でも一度は考える問題であるが、結局人生とは一つの旅路で遅かれ早かれ死に直面するのであって、その他には満足な解決が得られないままにだんだん年をとってこの世の実務に追われ、ついには忘れられてしまふ。それよりも人間はこの極めて重要な問題を人間自身これ以上自問する事を恐れているのかもしれない。特に我々高校生は大学受験の為の高校生活でそれ以外の事には熱を入れられないという狭い考えが多分にあるが、これは万一落第したら誰の責任にする事も出来ないこの世の冷たい現状であるから、と云われても私には何かスツキリしないものがある。だからと云って「人生は不可解なり」とばかり自殺せよなどは云わない。第一そんな事を云うものなら「あいつは馬鹿なお人良しの哲学青年だったんだ。俺なら心中してやるぞ」と、近代人的感覚そのままを持っては、つばをかけられるであろうから……。

はじめに神は天と地とを創造された(創世記一ノ一)

聖書の言葉は、この簡単ではあるが雄大な、力強い構想を持つ言葉で始まっている。そして思うに我々近代人にはこれを容易に理解す

る事が出来ないのである。これは科学文明の発達した今日ではこの世界の起源に関する問題のみならず、人類の起源、そしてあらゆる宗教に対して——「宗教とは何であるか」「宗教は何の為に存在するのか」「科学文明の発達した今日でも宗教は必要なのか」と云う肯定の気持ちよりも否認の気持ちを多く含んだ懐疑である。恐らくこれは知恵のついた我々高校生にも値する特有な現象ではあるまいか。そしてこれにはそれ相応な理由——我々近代文化人の理性や思想は科学的に物事を考え、かつ処理するからこれに矛盾する事柄は素直に受け入れられなくなった。この点、宗教について考える時も否認、不信の懐疑が強くなるのであろう。それなら「科学的に考えて信じられないから、信じない。」と単に科学万能とする事は甚だ危険であり、またゆき過ぎた考えである。何故か？

私はここで宗教と科学についてちょっと触れておく。御存知の通り中世大学に於ては神学こそは学問の女王であり、聖書の絶対的權威に基づいて宇宙及び人間の究極的真理が理解されていた。しかし中世末期から近代初期にかけて教権に対する人間の自律、批判の傾向が強くなり、中世カトリック教会とその神学の束縛からの解放によって聖書及び超自然的宇宙観への反発、否定といういわゆる近代的精神態度が起り、それが色々な思想を生んだ。この思想によってすべての宗教は迷信とされた。その結果現代人の宗教観というものは不言となり、無関心となった。しかし今日までの宗教の課題とも云うべき「人生の諸問題」が科学の発達に伴って解決されるか。五十年前、否すつと以前の人間の悩みと云うものは我々近代人の苦悩と同じものではないか。宗教と科学とは全く別の道を進んでいるので

要なものとする事は出来ない。また科学だけではある一つの価値が他の一つの価値よりも優先すべきだと云う事を示す事は出来ない。」との如く科学では宗教を立証する事は永遠に不可能であつても、我々はこの心で知る事が出来る。それはあなたにも私にも、教養の有無は無関係に、我々全人類に与えられているのであるから科学のみでは足りない何かを求めようではないか。

さて近代精神態度からのイイズムとは理神論、汎神論、唯物論的機械論、進化論哲学、懐疑論の不可知論などがそれである。私は恥しい事に、これ等は一つの説として認めるが、「ここのう点で理解し難い。」と徹底的に云い切れる程知識が豊富ではない。それは「信仰する事」以上にそれ程大切な問題ではないから。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる。」(箴言四ノ一八)と記されているように我々はキリストと共にある知識にあずかる者である時に、その真理を明確に理解する事が出来るのではないか。我々は常に知識のみに走りがちになりやすいから。そこでこれ等のイイズムから考えて大きく三つの世界の起源——その一つは懐疑の不可知論、次に進化論、第三に神の御言葉による世界の創造である。近代科学の教えは万物は原子とかアトムとか称せられる微粒子から成り立っていると云う事は仮定であり、推測に過ぎないと思う。なぜならば近代科学の最も大きな特徴は「実証主義」であるが、この世界起源に関する問題は実験室で立証出来るものではない。理神論にしても、神を宇宙の第一原因としていても、それは時計が時計製造者の手を離れて運行するように神は宇宙及び人間の歴史を自然法則に全く負かせて歴史への介入を一切行わないとい

あつて、これ等は科学の範囲外ではないか。それに近代科学の対称は物理宇宙ではないか。純粹な科学者は宇宙及び人間の起源が創造者たる神によって造られたか否かについては発言しない。もし云つたとしてその科学者の云う事を絶対と見る事は……。しかし中世以来宗教と科学、特にキリスト教に於ては多くの対立があつた。我々がすぐにガリレイの地動説に気づくように、それはほとんど科学の勝利を得た事は事実であつて、我々も素直にその過失を認めるが、これは当時の權威ある神学との争いであつて、今日我々のキリスト教の經典である聖書を聞く時、科学の結果と何ら衝突するものはないのであるから、こんな事から宗教をどう云う事は甚だ遺憾である。その他にもある人は奇蹟に関して「蹟きの石」となるであらう。これは今日の科学に於ても理解されない事は沢山ある。だからと云つてその事実を否認する事は余りにも單純ではないか。奇蹟は自然法則の立法者である神自身の意志作用であるから、思うに正しい宇宙観に基づく科学者は、宇宙及び人間の創造者または保持者として超自然的な神の存在を否認するものではなく、寧ろこのような神によって人間に科学思想が与えられたのであると考えるのである。最後にバートランド・ラッセル卿は「科学によって与えられる正確な知識のみが必ずしも人類の必要とする一切ではない。人類はそうした知識の外に生かすべきかについても人間の追求すべき目標についても、また立派なものと不劣なものとの区別についての觀念をも必要とする。この觀念は云わば人間が宗教、哲学、詩、あるいは歴史上讃仰される英雄達から得たものである。組織をどれ程尽しても、また科学をどれ程集積しても、価値の觀念を不必

うのであるが、この考えを人間にまで推し進めると、人間は一個の機械となつてしまふではないか。その他にも、太陽系の生成に関する学説も数多くあるが、みな完全ではなく議論の出發に用いた初めの状態が、どれも仮定である。同様に進化論も生命の發生について余り明確な説明はなされていないにもかかわらず、特に諸外国に見られない現象、それは日本人はこの説を絶対的に見ている事である。例えば異つた生物間に類似点が見られるから、これから生物は共同の祖先、魚なら魚から進化したのだ。また發生状態に於ても高等動物は發生の途中に下等動物の形態を現わす事実から、高等動物は下等動物の進化である。この事實は誰でもが認めるものではあるが、故にこれだけで進化を立証する事は少し無理がありはしないか。進化論を正しく科学的に立証しようとするならば先にも述べたように、ある生物がその種を変じて他の種の生物に変化しつつある状態を、実例的に示さねばならない。そこで最後に六日間にしてその完成を見た聖書の創造を考えてみたいと思う。創世記一章によれば、神は「光あれ」と言われた。すると光があつた。神はその光を見て、良しとされた。神はその光と闇とを分けられた。神は光を昼と名付け、闇を夜と名付けられた。夕となり、また朝となつた。第一日である。第二日目、神はまた言われた、「水の間に空があつて、水と水とを分けよ。」そのようになつた。——地球を取り囲んでいる空間が造られたのである。三日目、神はその乾いた地を陸と名付け、水の集つた所を海と名付けられた。——陸地、海及び植物が造られたのである。神はまた言われた、「天のお空に光があつて昼と夜とを分け、しるしのため、季節のため、日のため、年のために

なり、天のお空にあって地を照らす光となれ。」そのようになつた。——太陽系の天体が創造された事が第四日目である。そして五日目には魚類、鳥類、水中生物が、六日目には地上の生物を類に従つて造られた。最後に人間が、「我々の形に、我々に型どつて人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう。」神は自分の形に人を創造された。すなわち、神の形に創造し、男と女とに創造された。このように神は地上の生物の支配者として、人間を造つた。しかしここに、一日一時代説がティンデル等の学者によつて唱えられたように、我々には神の宇宙創造と云うべきものはすぐには信じ難いのである。なぜならば我々の理性はすぐに「創造物の創造者」と云う事を求めるから、そして結局これ等は神話以外に認められまいと云う。ここで私はローマ人への手紙の聖句をもつて、次の話に移りたい。

「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造のかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。」実に我々が毎日、目にしているこの麗しい、神秘的な、しかし精巧な構造を持つ自然界が、偶然にこのような結果となつたことは誰しも思わないであらう。

神は霊であるので、靈的な判断を欠いた人間の知識では見分ける事が出来ない。(コリント・前一ノ一四)

十九世紀のアメリカの有名な不可知論者と、ある説教者との会話に、ある日この不可知論者が彼の家に尋ねた時に、そこに一個の立派な地球儀を見て、「誰が造つたのですか」と問うたところ「自然

に出来たのだ」と答えたそうだが、きっとこの不可知論者はふに落ちなかつたであらう。我々も物がそこにあるからには、必ず目に見えない製造者がいるのだと確信するように、決して偶然にボツコリとこの自然界が出来たとは思わない。何かの作用、誰かの力によつて……。それに關して神の存在という事は光の問題と共に興味ある事柄だと思われる。「カトリック教会に於ては、神の存在は独自の理性によつて証明される」また一八七〇年に開かれたバチカン宗教会議に於ても「神は創られたるものを通して人間の本来の理性の光によつて知られる」という教義が採択されているが私は理性によつて得られるところの總べての結果は絶対的に確実と呼ぶ事の出来ない蓋然性があると思う。ここで神に対する懷疑を二・三とり上げて見ると、「神とは人間の願望の理想化投影に過ぎぬ。永遠を慕う人間の憧憬がかたち作つた概念ではないか」——このような神を全知全能の神とする事は余りにも虫が良すぎる。もちろん人間の想像が作つたこのような神々もあらう。しかし聖書の示している神は人間の考えた投影以上のものである。また唯物論者は目に見えないもの、測定出来ないものは実在しないと考へた。これは余りにも幼稚な考へであると思う。我々はよく友情や愛情について討論するように、それらは人体を解剖しても目に見る事は不可能であつても、これらが作用した時の結果的現象を見て、これらの存在を知る事は、我々の体験が示すところである。「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」(コリント、後四ノ一八)故に神を知るといふ事は科学的方法のみには負かせられ

ないばかりか真に知る事は不可能かも知れない人間の本質的な直観——心の中に深いおのきを感じる時——このおのきが畏敬の念に深まつてゆくならば、我々には自から何かをさがめたいという気持ちになる。このような体験を持つ事、信仰を持つて求めようとする時に理性以外の能力、心の動きともいふべきものが伴われるのである。

このように懷疑を根拠ある徹底した懷疑として考える時に我々の心の中には神の存在否定よりも神をかすかに見るのではないか。そしてもちろん神を認める人々にとっては認める人々よりも多くの懷疑を抱く事は当然である。私は省みて思うに、キリストの救いにあずかる以前の自分の姿というものがまさまさと目前に描き出されるからこそ、机上の推論や仮定に立ちこもる人をこの道へと導く事は並たいていの事ではないが、レオ・トルストイは「神は人がそれなくしては生きる事が出来ない方である。」と神を知る喜びをいったように、本当に神を知る事はもはや体験以外にはないのである。人間の絶望こそ神にとってはこの上もないチャンスである。人生の思わぬショックが、その人の心の態度をゆるがせて信仰の芽を開くのを待つより外はない。するとある種の懷疑論者は、「宗教はアヘンか。それとも医者代用品なのか。」と反ばくするであらう。しかし宗教というものが人間の広い意味での願望満足を無視して、人間の生への充実という事を無関係に存在するか……。「生きているのはもはや、わたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられるのである。しかしわたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしの為に御自身をささげられた神の御子を信じる信仰

あらゆる不義と悪と貪欲にあふれ、ねたみと殺意と争いと詐欺と悪念とに満ち、またざん言する者、そして神を憎む者不遜な者高慢な者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者となり無知、不誠実、無情、無慈悲な者となつてゐる。(ローマ一ノ二九三)

我々には疑おうと思へばいくらでも疑う事も、理屈を並べる事も出来る。それは限りある人間の心を持つて限らない神の性質、そののみわざを十分に悟ろうとする事で、不可能な事である。けれども信仰の基礎の上に真理を求めるとき、我々の心は「限りなき神の愛」に浸る事が出来る。そしてそれは同時に何を意味するかといへば、右の聖句のような自己への発見である。これは実に偽る事の出来ない人間の姿なのだ。私自身この罪の為に何度か涙を流して主の前にひざまづいた事であらうか……。ある政治家は近代生活の最大の必要は「罪の意識」であるといったが、私は人間誰しも自覚はしている。一番大切な事は完全に脱けきる事が出来ないのだ。意識し、自覚しているのに真理の道を歩む事が出来ないなんて……。ああ、うっかり忘れるところだった。我々には「罪、々」といわれてもピンとこない。「一体全体罪とは何か」「罪の侵入」「罪を犯した結果人間はどうなるのか」というもっともな質問である。「はじ

めに神」という言葉が始まっているように、神は総べてのものの以前に存在して、その被造物をみな見て良しとされたのに今日の世界の状態は、幾多の恐しい病氣、貧困、じめな戦争、新聞をにぎわす事件等で、それは（罪の結果なる）いばらと、あざみの世界ではないか。「身を慎しみ、目をさましていなさい。あなたの方の敵である悪魔が、はえたけるしのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。」（ペテロ、前五ノ八）この聖句のみならず我々は悪魔の存在を否定する事は出来ない。新約聖書にはこの他にもサタンという言葉も入れて七十余りも明示されている。ではこの悪魔の起源とも云うべきものは、イザヤ書一四章一二節から一五節によれば、悪魔は初めは明けの明星（英訳ではルシファー）と呼ばれその美貌、天使中最高の地位、その上神からは最も愛されていたにもかかわらず、彼はそれに満足せず、欲望をたくましく、心を高ぶらせ、ついにはミカエル（キリストの別名で「神の如き者」と戦って天上から追われる身となった。（黙示録一二ノ七）

では何故、善なる神はサタンをその場で直ぐに滅亡させてしまわなかったのでしょうか。その前に、神がサタンを造ったのではない。神は知恵に満ち、美のきわみである完全な印としての天使ルシファーを造ったのであるから、彼の行為は自ら神の反逆者となったのである。そしてその結果、つまり罪の結果を知っていたのは神のみであったから、神は悪魔を直ぐに滅ぼしてしまつたらその他の従順な天使は罪の結果としての死、病、老、苦等が来る事もわからないばかりか、神の愛と義にも不信を持って、ただそれは恐怖心からの服従になるであろうから、神はこのような真実のない行為は喜ばれる

はずがない、又それは総べてのものに悪と悪との結果を十分悟らす為に「時」を与えたのでもある。以来サタンは人間の心を常に誘惑して、我々人類の祖であるアダムとイブの上にもその墮落の手がさしのべられたのである。「このようなわけで、ひとりの人によって罪がこの世に入り、また罪によって死が入って来たように、こうしてすべての人が罪を犯したので、死が全人類に入り込んだのである。」（ローマ五ノ一二）しかしキリストの十字架によって神の無限の愛に変わった事は忘れられない。それは黙示録に予言されているように「そして、彼らを惑わした悪魔は、光と硫黄との池に投げ込まれた。」ではアダムとイブが禁断の実を食べた後どうなったかは、御存じの通りであるが、神はどうして総べての支配者としての人間をこんな罪を犯す弱い者に造られたのであろうか、というもつともなる質問に、もし人間に「自由意志」というものがなかったら……どんな姿になるであろう。それはもはや一個の機械にすぎないのである。我々の今せねばならぬ事はこの自由意志の活用にあると思う。

「エチオピア人はその皮膚を変えることができようか。ひょうはその斑点を変えることができようか。もしそれができるならば、悪に慣れたあなた方も、善を行うことができる。」（エレミヤ一三ノ二三）罪人である我々は自分の力では何一つする事が出来ない、この聖書の御言葉は明示していると思う。ヨブ記の著者である彼は「誰が汚れたもののうちから清いものを出すことができようか。ひとりもない。」とさえいつているように我々には必要である。我々の

罪を取り除く神の子羊であるイエス・キリストが、「わたしはぶど

うの木、あなた方はその枝である。もし人がわたしにつながつており、またわたしがその人とつながつておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなた方は何一つできないからである。」（ヨハネ一五ノ五）——どんな立派な若木でも枝が支柱から切り離されたら、豊かなぶどうの房をつける事も出来ぬうちに枯死するのである。我々の霊的生命も同様な事がいえよう。

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなた方を休ませてあげよう。」（マタイ一一ノ二八）とその愛の手を我々にさしのべているのであるから、我々は謙遜な素直な気持ちから自分自身が本当に罪に支配された者である。この重荷を負っている者である事のみで、条件はそれだけでキリストの御手に入る事が出来るのだ。キリスト教というものをより多く知ってから、イエス・キリストという方を知ってから等という知識を主は要求しているのではない。そう思う事はその人の心には高慢があるのだと思う。我々は誰でも新しく生まれなければ天国を見る事が出来ない。天よりの新しい生命に、キリストの霊的な力を注がなければならないのです。それにはまず悔い改めてその罪を神の前に告白する者になる以外に方法はない。

「神よ、あなたのいつくしみによって、

わたしをあわれみ、

あなたの豊かなあわれみによって、

わたしのもろもろのとがをぬぐい云って下さい。

わたしの罪をことごとく洗い去り、

わたしの罪からわたしを清めて下さい。

わたしは自分のとがを知っています。

わたしの罪はいつもわたしの前にあります。……

ヒソブをもつて、わたしを清めて下さい。

わたしは清くなるでしょう。

わたしを洗って下さい。

わたしは雪よりも白くなるでしょう。

神よ、わたしのために清い心をつくり、

わたしのうちに新しい、正しい霊を与えて下さい。

わたしをみ前から捨てないで下さい。

あなたの聖なる霊をわたしから取らないで下さい。

あなたの救いの喜びをわたしに返し、

自由の霊をもつて、わたしをささえて下さい。……

神よ、わが救いの神よ、

血を流した罪からわたしを助け出して下さい。

わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう。」

（詩篇五一ノ一一四）

ダビデ王のこの心からの悔い改めの祈りに、私は時々暴露出来ない汚れた魂の持主である自分が哀れだと思えます。でもこんな私にも主の愛が注がれたのでありますから、その喜びを一人でも多くの友達に伝えるためにこうして筆をとらずにはいられなかったのです。未熟ながら増々疑問をもたれた方もいることでしょう。その人の為に私達がいつでもあなたの良き相談相手になれますように。

現代について

二年 清 積 哲 也

現代では人間はひとつの歯車にすぎないと云う。さし迫った状態の中に埋没してうごめいているだけだともいう。青年の間に実存主義がはやり、あきらめと利己主義とがある。だがそれは本当だろうか。もちろん個人のセンチメントはもっとも尊重されなければならない。あらゆる種類の公式主義はナンセンスである。しかし、僕達の周囲にはこんな状況もあるのに地球の他の部分には、べつに希望にあふれたほかの状況もある。個別的なとらえ方がただ一つのとらえ方だろうか。

ために「人間とは何か」ということを考える場合、個人的なとらえ方をすれば、いくらでも答はでてくる。「人間は性愛のかたまりだ」「人間のすべては闘争本能だ」また「人間は所詮死ぬものなのだ」等々。いくらでも限りなく答は出るだろう。おそらく考えた人の数だけ違った答は出るかも知れない。しかし最後には万人が同意する方向のとらえ方もある。それは「どうして人間は、人間でないものから人間になったのだろうか」というとらえ方である。火をつくる。道具をつくる。労働する。力をあわせる。ことばを話す。論理的にものを考える。これには誰も反対出来まい。そして人間の本質が万人によって納得される。「認識」は歴史的認識になった時に、はじめて空想でなしに外界の真理を心のなかに反映させること

民衆である。

第三次大戦の火だねは、たしかに第一次大戦の時よりも、第二次大戦のよりも強かったが、バケツの水の方がもっと強かったので火事にならなかったのである。そして「ジュネーヴの雪解け」がやってきた。あるジャーナリストは評している「ジュネーヴの四巨頭会議には、もう一人の影の出席者がいた。それは姿は見えないが、その影が四巨頭を呼び集めたのである。それこそ平和を願う世界の諸国民そのものであった」と。本当にその通りだと思う。名もない民衆たちが初めて世界戦争を防止出来たのである。「現代」はそれに続いている。これが現代の本質ではなくて何だろう。

もうひとつ。同じ頃にヴェトナム戦争が終った。その後アジア、アフリカの国々はほとんど「独立」し「中立」の国々になっていく。しかし「人間とは何だろう」という問題に対するとらえ方と同じように、正しいというのとらえ方で中立の問題を考えてみるとどうなるだろうか。

スイスやベルギーの中立と、アジア・アフリカ諸国の中立とを較べた場合、ことばは同じでも、その成り立ちを較べて見ないと、果して同じか違ふかはわかるまい。まずスイスは、かつてそのまわりのフランスやドイツと同じく中世の姿であって、互いの間に強弱はなかった。しかし近代になってフランスとドイツとは資本主義強国としてそびえ始めた。スイスは地理的には高所にあるが、国際政治には低い谷間に落ちた。「もし戦争をするなら、俺の国だけは通らないでくれ」とおそれるおそれる隣りの巨人たちに頼んでいるのがスイスやベルギーの中立なのだ。だからどうせ無力とは知りながらも少

は出来るのである。

いま僕が問題にしている「現代」についても、それが云えないだろうか。僕が問題にしている現代とは、空想やおしゃべりの対象ではなくて、歴史的な現実である。それはいやおうなしに二度にわたる世界大戦の後になされたそれにひき続く時代である。そこに現代の本質的位置づけがある。だが世界大戦は二度だけとは限らない。第三次大戦もあったのである。いや厳密に云えば「あるはずの第三次大戦がなくてすんだ」と云った方がいいだろう。なぜなら二度の大戦の前夜と一九五〇年代の始めの頃の状態とを較べてみればわかる。第一次大戦は、サライェヴォでオーストリアの皇太子が暗殺されたことから始まった。しかしその当時はオーストリアがセルビアに最後通牒を送り、帝政ロシアが総動員令を発しただけで、英独はまだ戦争体制に入っていないかった。第二次大戦はナチス軍のポーランド侵入で始まる。しかし当時、まだ物的な意味での全面戦争の緊張はなかった。ところが朝鮮戦争当時はどうだろう。三十八度線のこちら側には世界最強の米軍が、太平洋戦争当時よりもっと強力な装備で頭張っていた。向こう側には中国義勇軍が、当時の最新鋭ミサイル戦艦に守られていた。それだけではない。げんにそれらは弾丸を撃っていたのだ。戦っていたのだ。一方の司令官は云った、原爆を使うぞと。この三つの場合を考えて、どれが最も戦争に近いだろうか。もちろん第三の場合だ。しかし第三の場合は大火事にならない。なぜだろう。それはただ一つ、第一と第二の場合には消火用のバケツの水が少なかったのに、第三の場合には多かったということ以外に理由はない。バケツの水は云うまでもなく、平和を願う

しばかりの武装も必要だったのだ。ところがアジア・アフリカ諸国の場合はどうだろう。かれらはもとは大規模植民地だった。そして最近では、かれらは「独立戦争」によらないでそのかわり世界諸国民の「声援」によって独立できるようになってきている。かれらの中立（暴力から主権を守る）は、すでにその誕生の時から、世界諸国民によって保障されているのだ。しかもその中には「順序」があることに注意しなければならない。独立、そしてその次ぎには中立である。どこかの国の植民地でありながら、どこの国とも仲良くしましうというのはナンセンスである。それは丁度食事をするには、まず胃袋でこなしてから歯で噛みましようというのと同じである。

僕等のおやじ位の年輩の人が僕等位だった時、そのひとびとにとって学校を卒業することはそのまま軋轢への道だったという。しかし僕等にはありがたことに軋轢への道を歩かなくてもよくなった。平和と繁栄への道を進めばよいのだ。いまの世の中がたしかに明るくはないことは事実だ。やたらと青年をつかまえて「明るく、明るく」という大人はなんとなく気味が悪い。しかしうす暗さにも二種類ある。朝のうす暗さと、夕のうす暗さと。それは同時に地球上に存在しているうす暗さではあるが、そのひとつは光明に、そのひとつは闇黒につながるうす暗さである。僕等はうす暗い現実のなかを歩いていく。確信と希望を持って。そしていまのうちに明かるい明日を迎えるのにふさわしい清らかな青年になっておこう。

ゲッターへの対流

三年 阿曾村 孝雄

室内は薄暗く、コンクリートで出来た箱のような感じであった。中に居る男は、身に何も付けていなかった。鋼鉄製の扉が、強い音を立てて閉まると、怯えたように、男は扉を叩き始めた。S隊員は、扉の遙か上方に付いている、小さな厚い窓ガラスを通して、男に言った。

「おいユダヤ人、お前は、これから、風呂に入れ」

男は、手に握らされた、消しゴムのような固形物を、ぼんやりと見つめた。男は知らなかったのだ、それが、ユダヤ人の脂肪で作られた石鹸であることを。

暗い箱、そう、部屋ではない、五メートル四方の箱の四隅から、冷たく重い気体が流れ込むのを、男は感じた。幽かな音だった。男はむせんだ、狂人になって叫んだ。

激しい苦しみと、長い懊悩の後に、男は、神の居る国に、歩み入



っていた。薄い金色の霞が漂う向うから、神が呼びかけた。

神「Aよ、お前は何故ここに来たのかわかるか。」

男「神様、私は何故ここに来たのをごいいますか。」

神「それは、お前がユダヤ人だから。」

男「私がユダヤ人だから……」

神「そうだ、お前をここに送り込んだ男が、そう言っておった。」

男「神様、私は、非常な苦痛を通して、ここにやって参りました。」

私は、これからどうすればよいのをごいいますか。」

神「お前は、非常な苦痛を通して、ここにやって来た。お前はこれからどうしたい。」

男「私が、それを言うてよいのをごいいますか。」

神「そうだ。お前がそれを選ぶのだ。」

男「神様、私は、今一度下界に戻りとうごいいます。」

神「よろしい。お前は、今一度下界に戻るのだ。ただし、今度はBとして下りて行け。」

男「神様、Bというのは、どういう人間なのをごいいますか、私は、もうユダヤ人に生れ変わるの、嫌でございいます。」

神「まあよい。下界に下りれば、何事もわかってくる。」

男「さようなら、神様。」

広場は、明るい陽光に輝いていた。時折聞えてくる、大型トラックの始動音が、周囲を、よけい物憂げにしていた。そして、広場の中央に掲げられたハーゲン・クロイツは、そういう光景に、見厭きたかのごとく、うなだれていた。

二重の有刺鉄線に囲まれた広場の一角に、一つの穴が掘られ、中

に、その穴を掘った男が、両手を後頭部に回して、立たされていた。男の額から吹き出た汗が、その頬から顎を伝い、表面にこびりついた泥を含んで、したりたり落ちる瞬間、かっきり一発の銃声が、広場の緩んだ大気を振寄せた。十三の銃口から、十三の悪魔が、穴の中に射ち込まれた。

神「Bよ、お前は何故ここに来たのかわかるか。」

男「神様、私は何故ここに……」今までに、幾度となく繰り返された……いや、正確に言えば、二百五十三万八千五百九十六回繰り返された対話が、また始まる。そして、その終りはいつもこうだ。

「さようなら、神様。」

白く、不気味な光沢を放つ、タイル張の部屋の中央の台に、男は寝かされていた。力づくで麻酔をかがされ、自分の体の切り裂かれる音だけが、変によそよそしく、男の耳に入った。今、男の体内で生きていくものは、聴覚器官と、そして、けなげに鼓動し続けている心臓だけだった。時折、金属の触れ合う音と、聞きとりにくいドイツ語が「腎小体」「髄質」「主体……」などとしゃべっていた。しかし、男には、もう、その断片的な話に考えを巡らす力が残っていなかった。全ての物音が次第に遠のいて、その後から、静寂が訪れた。

男「神様、私は、以前ここに来たのをごいいます。」

神「Cよ、そろそろお前に教えてやろう。お前は、以前Bという人間としてここにやって来た。そしてその前はAとして、その前はD、その前はC、その前は……」

男「神様、私は、それらの名前を存知ませぬ。でも、何度か、ここに来た記憶がございます。それも耐えられない苦痛の後でござ

います。」

神「Cよ、お前が何故何度もここに来たのか、それも耐えられない苦痛の後に来たのかを、教えてやろう。」

男「はい、神様」

神「Cよ、お前がである前は、Bであつたな。」

男「はい、神様」

神「お前がBである前は、Aであつたな。」

男「はい、神様、そして私がAである前は、Dでございました。」

神「そうだ、お前は、そうして二百五十三万八千五百九十八回ユダヤ人に生れ、そしていつも非な常苦痛の後に死に、ここに來ていたのだ。二百五十三万八千五百九十八回のお前が誰であつたかを、教えてやろう。そうすれば、お前にも、自然にわかるだろうからな。」

男「はい、神様、それで、二百五十三万八千五百九十八回のお前は、誰であつたのでございますか。」

男は、愚かな好奇心に駆られ、周囲に渦巻く金色の霞の中で、一心に神の返事待っていた。」

神「Cよ、二百五十三万八千五百九十八回のお前は、二百五十三万八千五百九十八の人間を殺した。アウシュヴィッツ収容所の司令官だつたのだ。」

こうして男は、二百五十三万八千五百九十九回目の死刑を受ける為に、今度は、Dというユダヤ人として、下界に似せた天の受刑場に行つた。

男が、最後の受刑の為に下りて行く時、神は、男の望みを叶え

た。受刑後、本物の下界で、清らかな流れに、身を洗われる、丸い小さな石に生れる筈である。

――終り――

※ナチ親衛隊(Schurstaffel)

※※※この作品のモデルとなつてゐる人物は、一九四〇年に、アウ

シュヴィッツ収容所の司令官に任ぜられ、一九四三年までに二百五十万人の犠牲者を毒ガス刑、及び火刑に処して抹殺した。犠牲者のうち、約十万人はドイツ系ユダヤ人と各国(オランダ・フランス・ベルギー・ポーランド・ハンガリア・チェコスロヴァキア・ギリシャその他)の住民で、大部分はユダヤ人である。

なお、「ゲットト」とはユダヤ人収容地区のことである。

明日に向つて

二年 山田 信和

I

「調子よく決まつたな、吉野。」と、中田勝己が先刻からおとなしい吉野謙二に声をかけた。

学校からの帰り道である。

吉野謙二は複雑な顔をしながら口を開いた。

「もう一度乗り換えんだろ？」

「ああ、渋谷でな。」

「じゃ、さよなら。明日からガンバレヨ。」

中田が声をかけると吉野謙二はニコッと笑つて電車から降りていった。

II

「ねえ、ブタカンさん、……大川さん。」

「えッ、なに、吉野君。」

窓際で台本を読んでゐた大川邦子は吉野謙二の方に向いた。

日曜日なので学校はひっそりしている。

「今日どうしようか。集まつたのがたつた五人じゃしょうがないな。かんじんの人が来てくれないんだから。」

と、謙二は手の中で白墨を二つころがしながら言つた。

「日曜日でミッチリ練習ができるのにね。集合時間から一時間もすぎちゃつたわ。ほかの人たちダメね。」

「みんな、どうする？ 今日中止にしようか。」

謙二がつまらなそうに言つた。

「やめちゃおう。これだけじゃできないよ。」

装置の係の山岡が答えた。

女子もみんな賛成した。

「じゃ、今日はこれで終り。ごくろうさま。」

そう言つた謙二に、

「明日から毎日練習しないとダメかな？」

「うん、今年の文化祭は例年より早いからな。今日が九月三日だろう。あと一ヶ月だもんな。今からみっちりやるとかないと間際になつてあわてるからな。劇部なんかいつもそうさ。今度はそうならないようにしようと思つてゐるけど。」

電車がブレーキをかけ始めた。

「じゃ、グッバイ、乗り換えるの面倒だな。」

と、邦子が声をかけた。一瞬、謙二は嬉しいショックを受けた。
「途中まで一緒だったけ。」

邦子の降りる駅は東横線の学芸大学、謙二は三つ先の田園調布である。

駅で五人はわかれた。同じ方向へ行くのは謙二と邦子だけだった。

一緒に電車に乗っても、うまく話することができなくて、話題は自分達の劇のことが多かった。

「こんな調子で、うまくできるかな。心配になってきちゃうよ。」

「でも、今まではわりと順調にいつてるんじゃないかしら。これから皆でできてくれると思うわ。大丈夫よ。二年三組と四組の代表で「すもの。ガンバリましょう。」

謙二は邦子の言葉の中にしつかりとしたものを聞いた。

「だんだんと、うまく話せるようになった。」

「ねえ、今日これからひま？ ひまだったら僕の家に来ない？」

「ええ、ありがとう。そうね、どうしようかしら……おじやまじやなかったら行ってもいいわ。」

謙二の精一杯の誘いに邦子は簡単にO、Kしたので謙二はホッとした。

彼の家は田園調布の駅から歩いて十分位の所にある。閑静な住宅街の一角である。

二人が門を入ったとき、一匹の犬が謙二の足もとに飛んできた。犬を追いかけて謙二の妹が、庭の方から走ってきた。

「おかえりなさい、アラッ、お友達？」

「バレタか。」

「五・六人いるけど、あの中誰？」

「吉野、知ってる？あの右から二人目。」

「二人目っていうと、髪の毛のチョツと長いほっそりした人？あの人は小林孝子さんっていうんだろ、一年三組の図書委員の。」

「あれ、吉野、知ってるの？」

「知ってるよ。俺も図書委員だぜ。お前と一緒に図書委員になったじゃないか。」

「そうだったな。忘れてたよ。」

「小林孝子さんがどうかしたの。」

「おい、あまりでかい声出すなよ。」

「声のかいのは地声でしようがないんだ。ハーン、わかったぞ君は彼女のことを思っている。そうだろう。」

と、謙二は中田の顔を、じっとみつめながら言った。

「なぜ、わかる？」

「中田のおでこにニキビができてるもん。思いニキビってやつだな。そうするとニキビって大事だな、ハハハ。ところで彼女と話したことあるの？」

「うん、少しな。一学期のとき、図書当番が一緒だったんだ。」

「今は見えているだけか。思いきっていけよ。よく俺に言ってたじゃないか。」

「人には言えても、自分じゃうまく実行できないんだ。もっと大きな気持を持たないとだめだな。吉野もおでこにニキビあるじゃないか。おや、鼻の下にもあるぜ。『思い』と『思われ』両方じゃない

「うん、大川邦子さん。これ僕の妹の紀子です。それから、この犬がチャック。」

紀子は兄の方に片眼をつぶってみせてから、邦子にあいさつをした。

「犬が走ってきたとき、びっくりしたわ。可愛い犬ね。チャックっていうの？」

と、邦子が犬の頭をなでながら言った。

「ええ、兄がチャールトン・ヘストンの大ファンで、犬にまでチャックって付けたんです。」

犬は邦子の手から抜け出して庭の方へ逃げていった。

紀子が玄関のドアを開けて叫んだ。

「お母さん、兄さんが帰ったわよ——。お友達と一緒に！」

III

昼食の終わった中田勝己が、窓から中庭をぼんやりと眺めていた。

「何みているの？」

そう言いながら吉野謙二が空いていた中田の前の席に座った。

「ああ、吉野か。」

中田は返事をすると言い歯を見せて笑った。

「誰か中庭にいるの？あそこでキャッチ・ボールをしているのは、えーと城之内と森と山田だろう。あいつらを見ててもしょうがないな。そうすると誰だ。向こうで日なたぼっこしてる女子っていうことになるな。なるほど。」

と、謙二は中田の顔を見ながら言った。

か」

「そう、昨日、調子良かったんだ」謙二が嬉しそうに言った。

「劇の練習やったの？」

「五人しか集まらないんだぜ。しかたがないから中止にしたんだけどさ。そのあと、彼女が俺の家に遊びに来たんだ。」

「すごいね。楽しかったろう。」

謙二は照れくさそうに笑った。

「うん、夕方頃までいたよ。いろいろと話したりしたけど。」

中田は少しうらやましそうに言った。

「俺は昨日映画を二つ見たよ。」

「二つとは？」

「最初に『バラバ』見て次に『リバティ・バランスを射った男』を見たんだ。」

「かっこいいね。混んできた？」

「『リバティ・バランス』のほうは途中から入ったから大部混んでたけど、『バラバ』のほうは第一回目に行ったから、お客はバラバだったよ。」

「『バラバ』がバラバラか。なかなかうまいね。『リバティ・バランス』わりと面白いな。俺、夏休み中に見たよ。リバティ・バランスはなぜ倒れたか知ってる？」

「なぜ倒れたって、射たれたからだろう。」

「彼はバランスを失って倒れたんだ。うん。」

「リバティ・バランスはバランスを失って倒れたか。くだらねえな。」

「バラバラのお礼だ。ハハハ。」

二人は笑った。その時、チャイムが鳴り始めた。

「休み時間って短かいな。」

「ほら、彼女たち教室へ入って行くぞ。」

謙二の声に中田は中庭の方に、また視線をやった。

IV

二年三組、四組の劇は、順調にでき上りつつあった。

秋分の日も間近いある日の放課後、二年三組の教室では演出の指揮のもとに立ち上げこ、隣の四組の教室では舞台監督の指揮のもとに舞台装置を作るのにみんな一生懸命だった。

吉野謙二の演出振りも板についた感があった。

謙二は中田勝己の助言や、本などの知識を功みに取り入れていた

「松谷さんと田淵さん。もう少し離れた方が良いんじゃないかな。

それから、もう一度お願いします。ハイどうぞ。」

みんな愉快に、けれども真面目に練習をやっていた。

よその教室からコーラスが聞こえてきた。謙二は耳をすました。

歌声は中庭をへだてた向こう側の校舎から聞こえてくる。最近流行している。「寒い朝」という歌である。

（あれは一年の三組と四組らしいな。なかなか上手だ。「寒い朝」か、わりに良い歌だな。一年三組っていえば、中田もこの歌声を聞いているかな。）

謙二がそんなことを考えていると、大川邦子が入ってきた。手には数枚の紙と金槌を持っている。

みんな、コーラスに耳をかたむけた。

しばらくして謙二が、

「よし、僕らもやろうぜ。あのコーラスに敗けるな。」と、言った。

「それじゃ、次の場面から、北村の出で来るところね。いいですか、ハイ。」

みんなは、また劇の中に溶け込んでいった。

校内には文化祭の気分が満ちつつあった。

V

練習は毎日続いた。謙二たちには、ほとんど障害がなく日はすぎた。

文化祭の前十日間は学校に七時まで残って良いという特別許可が出た。最後の仕上げに大わらわの各クラスそしてクラブは時間ぎりぎりまで残っていた。しかし二年の三・四組にはその必要がほとんどなかった。

そのころ中田勝己が謙二たちのけいこしている教室に、よくあらわれるようになった。原作者の中田は、ときどき役者に注文をつけるだけでけいこをただ眺めているときが多かった。

謙二も初めのうちは中田が自分の作品のできが心配で見にくるのだと思っていたが、今度の文化祭で中田は演劇部の演出を受け持っていることを思い出した。

今日もまた謙二たちのけいこを見物している中田に謙二は聞いてみた。

「吉野君。ねえ、ちょっと。」

「えっ、なあに。いやだなトンカチなんか持ってこわそうだな。」

「あ、いけない。こんなもの持ってきたわ。今、釘を打たせてもらったのよ。釘打つのおもしろいわね。それより、このところどういうふうになっているのかしら。」

図面の一部を指しながら邦子が聞いた。

「どこ、これか、えーと、僕にも良くわからないや。装置主任の山岡に聞けばいいのに。」

「その山岡君が少し前からいなくなっちゃったの。」

と、話しているとき、行方不明中の山岡が入口から顔を出した。

「おい、出岡、どこへ行ってたんだ？」

「やあ、悪い悪い。ちょっとね世界の情勢をみてきたんだけどね。僕達の劇なんか調子の良いほうだぜ。意見がまとまらないで、ちょっと進まないクラスや、練習しないで遊んでるとこもあったよ。」

「へー、そうか。じゃ、このぶんで行くと文化祭のクラス対抗、上位入賞できるかな。」

「そんなこと言っていないで、ともかくしつかりやることよ。」と、邦子が堅実な意見を述べた。

謙二が向こう側の校舎を見ながら言った。

「さっきから歌が聞こえているだろう。なかなか上手だぜ。」

「一年でしょう。さっきは「寒い朝」歌ってたけど、今度のは何かしら。」

「「レッド・リバー・ヴァレー」だろう。」

「なるほど、わりとうまいな。」

「おい、中田、演劇部のほうの調子はどうか？」

中田は力なく答えた。

「おれ、やる気なくなっちゃったよ。この頃ずっと頭にきつばなしなんだ。」

「なにがあったんだ。」

「俺が演出を引き受けたのが夏休みの終り頃なんだ。それからずっと練習はしてきた。今までもずいぶんやりにくかったんだけど、最近特にひどくなったように思えるんだ。演劇部って女子が男子の倍近くいるんだけど、みんな口では適当にうまいこと言ってる実行しないんだよ。俺の言うことなんか聞かなくて文句ばかり言ってるんだから。いいかげん頭にきてんだ。だけど俺が帰るわけにもいかないから、みんながやり出すまではとくんた。」

吉野、おまえがうらやしいよ。みんな楽しそうにやってるからからな。クラス対抗じゃ、上位入賞確実だよ。なにしろ原作が良いからな、ハハハ。」

中田の笑い声には普段の明るさが少し失われていた。

謙二は中田の立場が自分と比べてあまりにも異っているのに驚いた。そして中田の気持がはつきりとわからなかった。謙二は中田を激励することしかできなかった。

その後謙二は最近の自分を反省してみた。

（俺は演出をやっている。毎日残って練習する。何の為にやってるんだ。プラスになることがあるのであろうか。文化祭だといっても全然無関係って顔をしたやつだっているではないか。人が忙しいめにあっているのに、のんびりとしているやつを見ると頭にくる。）

しかし俺は演出をしていて、いろいろな経験をした。目に見えなくとも何かプラスになっている。きつとそうだ。」

謙二は今までに増して、明日からもがんばろうと心に誓った。あくる日、中田は謙二の激励と説得とに励まされて、自分の任務を成し遂げようと決心した。

今まで別に行動していたスタッフとキャストが合流して、いよいよ総仕上げに入った。

学校全体もあわただしく、生徒たちも期待と興奮とに胸をふくらませていた。

いよいよ明日から文化祭、舞台がいこも無事に済んであとは本番を待つばかりとなった。

舞台がいこの為に帰りが遅くなったので、謙二は邦子の家まで送っていった、その途中、二人の話があったことは本番を控えての不安についてだった。

今までの努力がどのように現われるか、謙二も邦子もそして文化祭の準備にたずさわったすべての人々の不安と期待を乗せて時刻は文化祭(と一歩一歩近づいていった)。

VI

文化祭は土曜、日曜の二日間にわたって開かれた。クラス対抗は二つのクラスが合同して九チームの間で争われ、上位三位までのチームが後夜祭のとき表彰されることになっていた。

謙二たちの劇は午後の部の初めのほうであった。幕が上がるまでのあわただしい間にも謙二の気持からは不安が消えなかった。

「一位、二年三組、四組。二位、一年三組、四組。三位、……。」

中田が思わず謙二の背中をたたいた。謙二はうれしさを大声で叫びたいような気持だった。

再びフォーク・ダンスが始まった。しばらくしてやっと謙二の待っていた順番がまわってきた。

邦子は謙二の顔をみるなり、

「おめでとう。よかったわ。」

と言った。謙二もいろいろしゃべりたかったがうまく言葉にならず

「よかった。」

と言っただけだった。

七時すぎに後夜祭が終り、それぞれ家路についた。

東横線に乗換える生徒が少なかったので謙二は邦子の姿を見つ不出すことができた。ホームで二人はあらためて「おめでとう。」を言いあった。

邦子を送って行く途中、夜風がほてり気味の顔に心地よくふきつけてきた。

「明日は代休だけ大川さん予定あるの？」

「えーと、別にないけど。」

「ひまだったら明日僕の家遊びに来ない。」

「たびたびお邪魔しちゃ悪いわね。」

「別にそんなことないさ。」

「そう。じゃ明日行くわね。」

謙二が帰宅したのは九時近かった。家に帰るとさっそく夕食をバクつきだした。

幕が上がったとき、謙二は、
(無事に終わってくれ。まちがいさえなければそれでいい。)と、心に祈っていた。

幕が降りたときの観客の拍手を聞いたとき始めて謙二は安心した。そして舞台のわきで並んで見ていた。邦子に快心の笑みを見せた。邦子の眼にうれし涙がたまっているのを、謙二はみのがさなかった。二人は手を握りあった。そしてすぐ舞台装置の後かたづけに飛び出していった。

土曜と日曜と同じことをやるので二日目は楽だった。プログラムだけが午前と午後と逆になっていた。

二日目は無事に終って後かたづけをしてから、謙二と邦子は校内をゆっくりと見物してまわった。日曜なので父兄がたくさんきていた。その中には邦子の母と姉そして謙二の家も一家そろって見物にきていた。

二日間にわたった文化祭もどことなく終了して夕方から全生徒の待ち望んだ後夜祭が始まった。

初めに三十分位フォーク・ダンスをして次に表彰である。

「おい中田、演劇部の良かったじゃないか。」

「そうか。俺ももつとひどいかと思ったら意外と良かったよ。やりやでるのにやらないでぶつぶつ言ってるんだからな。しょうがないよ。でもよかった。ラスト・スパートが成功したからな。」

「さあ、いよいよ発表だぜ。」

「心配するなよ吉野、絶対に一位だから。」

マイクを通して順位を発表する声が聞えてきた。

「お母さん、明日大川さんが遊びにくるからそのつもりでね。」

「はい、はい、いいですよ。」

「兄貴のガール・フレンドか、このあいだ来た人でしょう。ものすごく良い人よ。兄貴にはもったいないな。」

謙二は照れながら、

「兄貴をからかうなんてとんでもないやつだ。そんなひまがあったら高校入試の勉強でもやれ。良い高校へ入れないぞ、紀子」

「いいわよ、兄貴の高校へ行くから。」

「こいつ、頭にきちゃうな。」

食後、吉野家の居間は文化祭の話題で満たされていた。

十一時近く、謙二は明日を楽しみにしながら眼をつぶった。まもなくすこやかな寝息が聞えてきた。

その頃、大川邦子は日記をつけていた。寝る前に日記をつけるのは彼女の日課の一つにここ数年なっていた。

……明日、吉野君の家遊びに行く約束をする……

この話はこれで終りではない。まだまだ続くことと思う。この統きは、君自身、あなた自身で創ってみて下さい。

作者

子供のためのもの

二年 山本和可

真赤に燃えた太陽が西空に傾き始めた頃、又いつものようにお民婆さんの家の縁側は、村の子供達でいっぱいになっていた。

「なあお婆ばよ。今日もなんか話をしてくれよ、のう。」と、その腕白連の一人がせがんだ。「よし、よし、そんなら今日はお加代

の手柄話でもしようかいの。」と、お民婆さんは、しわくちやの顔の中の落ち窪んだ口を開き始めた。

……これも昔の事だけれども、あの山の麓に、甚六、お米、お米の夫婦がおったんじや。お米の腹の中には子供が居ての、ある雪のたんと降る夜に、女子を一人産み落としたんじや。名をお加代とつけての、えろ可愛がったんじや。じやがの、お加代が十二になった秋に、なにがもとかわからんが、お米は大病にとりつかれての、明日にもわからん命になったんじや。そこでお米は枕もとにお加代を呼んで、「わしはお前だけに本當の事を言うから、良く聞いて、わしが死んだ後も決して悲しんで、お父に心配かけちゃあならないよ。実はの、お母はあの山に長年住みついてた女狸なんじや。ある時、今お前のお父である甚六に助けられての、その恩返しとして人間に化けて嫁に来て、お父に仕えて来たんじや。だがわしも病には勝てないんだ。お前やお父を残して逝きたくはないが、これもちし方の無い事じや。そこで、わしが死んだ時には誰にも姿を見られんようにして、あの山のてっぺんに埋めておくれ。そしてわしが死んだ後、お前を助けてくれるのは、わしの弟の狸吉だから、よくあれの言う事を聞いて、お父に孝行しておくれ。きとおじさん狸がお前を幸せにしてくれるはずじや。」と言いながら、女狸であったお米は苦しうな息を二、三回して、とうとう死んじまつたんじや。後に残ったお加代は、いくら言いかされたとは言えまだまだ幼い十三の子供だもの、大声をあげて、「おっ母よ、おっ母よ。」と長い事泣いておった。じやがそのうちに、死んだお米に言われ事を思い出して、甚六の帰ってこんうちにと思って、一人で

うがな、ならお前を助けるよう頼まれとったからの。」という声が聞こえた。そこでお加代はすっかりうれしゅうななって、「おじさんよ。おじさんよ。」っていつての、その男狸の所へ走り寄っていったんじや。そして人に見られんように納屋へその男狸を案内していったんじや。そしてのしばらくすると、うれしうな顔をしたお加代とな、その男狸とが一語に出て来て、お加代は家の中へ、男狸は山の方へ行ったんじや。じやが、この一人と一匹とがなんの話をしたかは誰にもわからんじや。

それから二、三日したある朝の事じや。甚六はいつものように野良仕事をしに出かけようとして、鍬と鋤が見あたらないのに気がついた。そこで甚六は、「お加代、お前わしの鍬と鋤をどこぞにしまったんか。」と、お加代にたずねたんじや。するとお加代は、「わしやなにも知りやせんよ、お父。またいつもの癖で、どこぞに置き忘れたんと違うんか。」と素知らぬ顔で答えたんじや。「うむ。そうかしれん。」と甚六もうなずいて、いろんなところをはじくるように捜したけんどもな、どこにもある様子がないんじや。するとお加代が急に、「いい事がある。御先祖さんの墓へ行って聞いてみようや。」と言いつて、もうとつとと駆け出して、それから一町ほども行つた所にある林の中へと入っていったんじや。不思議に思いながらも甚六は、一応お加代の後について行ってみると、もうお加代はその林の中にある墓の前にしゃがんで、拝み出している風なので、そつと後へ忍び寄って、何を言っているのか聞いてみるとな、「のう御先祖さん。どうぞこれからわしの言う事をよう聞いて、よい答をしておくれね。実はな、今朝お父がのら仕事に行くちゅうて、鍬と鋤

泣く泣く山のてっぺんへ狸の婆にもどってしまったお米を埋めに行つたんじや。さてその日も暮れん方になってのう、仕事から帰って来た甚六は、お加代からお米の死んだ事を聞いての、おい／＼と声をあげて泣きながら「なあお加代。ところでお母の身体が見えんようだがどうしたい。」と言つた。お加代は「うん、わし一人で、あの山のてっぺんに日の暮れんうちに埋めて来よう。」と答えたんじや。するとまた甚六は、「それでお母はなんぞ言い残していかんだか。」と聞いたからの、お加代は「うんにや、な／＼も言い残してはいかないだよ。」とうそを言つたんじや。そこでその夜は、いつまでも悲しんでもしょうがないからの、二人でひっそりとおまんま食つて寝についたんじや。するとどくらいたつた頃だろか、どつとか遠くからでもあるような近くからでもあるような、とても小さな声で、「お加代。お加代。」と呼んでいる気配に、お加代はまなこをばちちと開いての、「あれ、誰ぞかわしを呼んでいるようだ。」と思つて、下に降りていった。そこにあった下駄をひっかけたの、土間にあ

る戸口をそつと開けて見よつた。そして開けながら甚六の方を盗み見てみるとな、甚六はなしも知らぬけにいい気持で眠つてるようであつた。そこで、一疋ばかり開けたそこから、お加代は闇の中をすかして見るとな、その闇と同じような色をした一匹の男狸がじつとこちらを見ているのに気がついたんじや。初めはびっくり仰天したお加代も「もしかしたら、あれがお母の言つていたおじさん狸かもしれん。」と思うと気が楽になつて、「狸吉おじさんか。ならわしを助けに来てくれたんだね。」と聞いてみたんじや。それに答えて、「うむそうじや。わしは狸吉だが。はてお前はわしの姉さん狸の子だろ

をとりに行くと、いつも置いてある所になんじや。そいでほうばうめつたんじやが、どこにも見あたらん。あれ等が無い事にや、わし等は明日から食うていけなくなるんじや。別のを買う錢などは一錢だつてありやしないけんの。だからどうかありかをわしだけに教えてくれろ。お頼みます。」と言うような事を言つてるんじや。そこで甚六はまず「不思議に思つての、耳の穴をまなこ程にも掘けて、耳をすましてたんじや。するとまた、「なんじやと。うん／＼。なんだそんなところにあるとな。そんじやあ誰にもわからんわけじや。じゃあこれから行つてとつてこよ。御先祖さんありがとうさん。」と言つて、お加代は腰をあげながら後をくるりふり返つて見たんじや。「なあんだ。お父さんなとこで聞いたつたんかいの。」と初めつから甚六の居たのを知りながら空つとほけてみせたんじや。すると、甚六は、ぽかんとした顔つきでお加代に言つた。「お加代、お前はあったまげた女子よの、死んじまつている御先祖さんと話が出来るとは。」お加代は、「お父、鍬と鋤のありがわかつたよ。今からもどつて取つてこよ。うちの前にある、かしの大木の股に狭まつているんだと。」言つておいて、どどん取りにもどつて、ちゃんとそれ等を持ってまた甚六の居る所へと帰つて来たんじや。そのために、まず／＼甚六はあったまげて、「うーむ。うーむ。」とうなり声をあげるだけじやつた。

その日はこれですんだけれども、ど／＼も甚六は、我が子ながらお加代を不思議に思わずにはいられなかつた。だからある日、のら仕事をしているうちにつかうつかりと、「わしとこのお加代はど／＼も不思議でなんねえ。御先祖さんと話をしちまうんだからの。」と仕

事仲間の、これもまた畑で耕していた孫兵衛に聞こえるように言つてしまつたんじや。すると孫兵衛は、これがまた非常に物好きな男だつたからたまらぬは、根ほり葉ほり、とう／＼甚六から先日起つた事を一部始終聞き取つてしまつたんじや。聞き終つた孫兵衛も、あまりに不思議な出来事に、しばらくは口もきけん様子であつたが、しばらくして、「これはまたなんとした事じや。お加代には、なんか化け物がとりついたんじやないのけ。でも本当とも思へん事じやで、いっちょ試してみようと思うが、どうじや。」と甚六に問うて来た。甚六ももつともな事じやと思つての、「そんな明日にでもお加代をお前さまの所に行かせよう。」と言つて、その日は早帰りをして、お加代には、孫兵衛にしゃべつた事は内緒にしたいんじや。そして「お加代、お前明日孫兵衛さんとこへ行つてな、塩と味噌を借りてこい。」と何食わぬ顔で言つたんじや。お加代は直ぐに「うん。」と言つての、その使いをすることに應じたんじや。

さて明るる日の朝早く、一番どりが鳴く頃にお加代は起き出して、甚六が野良仕事へ行くのにさしつかえのないように仕度をして、「じやあお父、孫兵衛さんとこへ行つてくるからな。」と言つて出かけたんじや。じやが行く途中で、これはなんかあるかもしれないぞと思つたので、ひとまず狸吉が住んでいるという山へと足を向けたんじや。してしばらくすると、その山の方角から、うれしそうな顔をしたお加代の姿が見えて来たんじや。何やら歌までも歌つとるようなのじや。

いたずら好きの孫兵衛さん
いたずら好きの孫兵衛さん

けんの。」とさも困つた顔をして言つたんじや。さて人に言つてはいやじやと言われると、なおさら言いたくなる性分の孫兵衛は、心の中で、『へん。言わずにおくものか。』と思つていたのじや。「じやおじさん。おじさんちの墓へ案内してくれ。」とお加代に促されて、孫兵衛は下に降りて、先に立つて案内して行つたんじや。その道で、「わしの大事にしていた銭の入っているかめがどこにも見あたらないんじや。ひとつそののありかを、御先祖から聞いてもらいたいんじや。」と孫兵衛はお加代に頼んだが、その顔には出来はしまいと言う表情をあらさまに出していたんじや。それを見てとつたお加代は、『ふん。今に驚いて腰を抜かさんようにして。』と心の中で思ひながら、「うん。じやあひとつやってみよう。」と合図をうつたんじや。

墓の前に来るとな、お加代はびり／＼止まつて、そこにしゃがんで、この前の時と同じように、お加代は言つていた言葉は馬鹿にした表情をしておつた孫兵衛は、驚きから、次には恐怖へが耳に入つて来るにつれて、その表情は、驚きから、次には恐怖へと変わつていつたんじや。お加代はつと腰を上げると、「おじさん。銭の入つとるかめは、お前さんとお蔵ん中に入つとるそうじや。」と事もなげに言つた。孫兵衛は、「ほんにそんな通りじや。こりや甚六の言つた通りじや。」と言ひながら、もう村の方へと走り出していつたんじや。この事を村人に知らせるために。そこでお加代は「おじさん人に言わんという約束だつたらう。よう。」と言つて追いかける真似をしたが直ぐに立ち止まつて、孫兵衛の後姿を見送つていただけじや。何故なら、この話が本当は広まつてもら

わしの力を試すとて
わしの力を試すとて
家のお蔵にかめ隠し
手ぐすねひいて待つてゐる
はい、手ぐすねひいて待つてゐる

と言うような歌なのじや。そうこうするうちに孫兵衛のうちの前に来たので、お加代は「はい、今日は。今日お父に頼まれての、塩と味噌を借りにまいつたよ。すまんが借してもらへるかい。」と何も知らんげにたずねてみた。すると孫兵衛は、「おゝいいとも、おやすい御用よ。その両方とも喜んで貸してやろう。だがまずあがつて茶でも飲んでお行き。」と巧みにお加代をうちん中へと誘ひこんだんじや。じやがお加代は、これから孫兵衛が何をしようとしているか知つとるので、「うん。じや一寸上がらしてもらいましょ。」と言つて庭先から縁側に上がったんじや。縁側に上がるとな、早速孫兵衛は、鼻の頭をひく／＼動かしながら、「お加代よ。お前御先祖さんと話が出来そうじやの。」と切り出して来たんじや。『そー来たよ。』と思ひながらお加代は、「おんや、おじさん、誰からそんな事聞いたんかいの。そんな事はありやせんよ。」と答えたんじや。じやがそんな事であきらめるような孫兵衛ではないわ。「隠してもだめじや。どこに行つちまつたかわからんものありかを、御先祖さんから聞き出せるというじやないか。」としつ／＼こく問うて来るので、お加代も、もうこのへんが潮時じや思つての、一層効果のあるように語気を強めて、「おじさんだけに白状しまつたお。実はそうなんだ。でも人にしゃべつてくれるなよ。広まつたらいやじや

いたいのが、お加代の本当の心の内なのじやから。

さあこの事が村中に広まつたからたまらぬわ。猫もしやくしも、お加代を一目見ようと毎日おしかけて来るんじや。丁度その時、村の床屋も、この話を耳にした一人じやつた。そこで、『これは耳よりの事を聞いた。早速お加代に会つて、居なくなつてしまつた息子の嫁御の居場所を捜し出してもらおう。』と考へて、お加代の所へお使いをよこしたのじや。じやがあまり急な話なんので、お加代は狸吉に聞く暇もなく庄屋の家へと連れて来られてしまつたんじや。で、今度はばかりはいくら頼まれても、出来ない、出来ない、のいつてんばりじやつたが、あまり庄屋が頼むんで、「じや、出来ても出来んでも、一応やつてみよう。」と言う事になつての、庄屋の御先祖の墓の前に座つたんじや。じやがなんせ、狸吉と相談をしておかんだので、心の中では、『どうぞ嫁御の居場所が、なんかの方法でわかりますように。狸吉おじさん助けておくれ。』と一生懸命祈つてたんじや。すると不思議、どつからか、一番最初の狸吉がお加代のうちを訪れた時のような、あの時の調子でしゃべる狸吉の声がかきこえて来たんじや。その声はこう言つた。「お加代。その嫁御はわしがお前に手柄をたてさせるために、山の中のお堂に隠してしまつたんじや。早くその事を言つて、手柄をおたて。」とな。さあそこで喜んだお加代は、いかにも御先祖からのお告げがあつたように、「うん。うん。そなとこにいるんか。床屋さん、嫁御の居場所がわかつたよ。あの山のお堂の中に入られてゐるという事だよ。」と言つたんじや。これを聞いた庄屋は大そう喜んで、直ぐにそこに人をやつてみたんじや。するとちゃんとそこにはお加代の言

つた通り嫁御が閉じこめられていたんじや。庄屋は喜ぶ。その息子も喜ぶ。助けられた嫁御もまた喜ぶ。人々は感心する。そしてこの事によつての、お加代と甚六は一生安楽に暮らせる程の銭とほうびをもらつての、親子二人楽しく暮らしたんじや。とお民婆さんの長い話は終つた。熱心に耳を傾けていた腕白連は、「面白い話だったあ。おはばよ、また明日も来るから、今日と違つた話をしておくれ。」と言ひながら立ち上がり、各々の家路についた。それを見送りながら、お民婆さんは、「子供は可愛いの。」とつぶやいた。

——終り——

砂と小石

一年 横山 淳

私の住んでいる
砂山に

一つの小石がありました。

他の石と比べると

とりたてて、ひい出る事も無いのですが、私から見ると、

何んと形容してよいやら、わからない程、

まばゆく見えました。

それはそれは美しく、

丁度真珠のように、

まるいまるい石でした。
そうです

とにかく私にはそう思えたのです。

「あの、きれいな小石と、

話しをしてみたなあ、

風が僕を運んでくれないかしら」

そんなように、私は思っていました。

でも風は小石のいる方から

私の方へと吹いています

小石のいる方から飛んで来た、
仲間が言いました。

「そりや君、あきらめた方がいいね、

ともかく

つきあいにくくていけないよ」

すると、別の仲間が言いました。

「うーん、そいつあ、よした方がいいよ、

ともかく

気取りすぎて、いけないよ」

すると又、別の仲間が言いました。

「そうだそうだ、やめときなさいな、

ともかく

話しかけても、

相手にしてはくれないよ」

それを聞いた、私の心は、

変に、物悲しくなっていました。

そんな私を見て

なぐさめるつもりだったのでしようか、

私の隣りにいる友が、言いました。

「君は、そんな事で、

あきらめてしまうつもりかい？」

「アア 有りがとう

僕は決してあきらめはしない！

それに、何んとかして

あの小石のもとへ行ってみよう」

それから

私の、小石の所に行ってみよう

という思いは

日増しに募る一方でした。

この事が、天に通じたのでしょうか
ある時、

神様が

私のもとに、降りていらしって

おつしやいました。

「お前に、三つの望みを

かなえてあげよう

但し、よく考えて

上手に使わなければいけない」

私は 今 是れもう

嬉しきでいっぱいでした。

それで早速、最初の望み通りの事を

神様に、お願いしました。

「ああ、神様、どうか私を

あの小石のもとへ

つれて行って下さいまし。」

その言葉が終わるか終らないうちに

西の方から、急に強い風が吹いてきて

私を 小石のいる所まで

運んで来てくれました。

しばらく たった様でした。

ふと 気がついてみると

確かに小石はありました。

遠くで見ると

いっそう美しく

いっそうまばゆく見えました。

「それにしても
何んてきれいなんだらう！」

こんな事を思っている

「なんだい、君は、新参者だな！」と急に隣りにいた
いじのわるそうな仲間が言いました。

「いったい、何処から来たんだ、え？」

私は何も言おうとは
しませんでした。

「ここは、あんたのような者が

来る所じゃないんだ！

まだ わからないのか

はつきり言ってやろう

お前さんはじゃまだ！！

私は、まだ、口をつぐんだままでした。

「さあ、新入は出てお行き、

さっさと 吹き飛んでしまえ！」

私には 神様から授かった

“力”があります。

私は又、神様にお願いました。

「ああ、神様 どうか私の隣りにいるこのうるさい者を

どこか遠くへ、やって下さいまし。」

その言葉が、終るか終らないうちに

さっきの悪童は

私の見ている前で

消え去ってしまいました。

私は、何とかして

小石に話しかけようとしたがどうしても、うまく切り出せま
せん

恥ずかしさと、不安とが

変に入りまじった心地でした。

さっきの悪童は消えてしまいましたが
それでも

私の周囲には、沢山の仲間がいます。

彼等も又、私と同じ様に

憂いと あこがれを持って

あの小石を見つめています。

「ジェラシー」

そうこうしているうちに

私は 小石が

皆から見られるのが

たまらなく くやしくなってきました。

小石を 自分のものだけにしたいという気持が、わいてきてしまっ

たのです。

こんな事になったのは

別に

小石の罪でも

仲間達の罪でもありません

そうです

私、私なのです

もう、どうにも仕様がなくなりました。

自分で自分を はぐく感じる様になってしまいました。……………

とうとう私は、神様に、お願しました。

「ああ、神様 どうか私の前にいる

あの小石を

誰にも見られない所に

運んで下さいまし」

その言葉が、終るか終らないうちに

小石は

私の見ている前で

消え去ってしまいました。

そこで私は

自分が、小石といっしょで無かった事に気がつききました。

私はあわて

「ああ神様どうか私を、あの小石のもとへ運んで下さいまし」

その言葉が、終るか終らないうちに

今後は

神様が、お下りになりました。

「お前には もう

三つの望みを

かな得てやったはずだ、

その上 何を望むと言うのか？」

アア その言葉を聞いて

始めて 私は

自分が、愚かであった事を知りました。

私は、泣きの涙で頼みました、

「ああ 神様

私をあわれみ下さい

私は馬鹿でした

どうかお許し下さい……どうか……お許しを」

今は、もう

胸もはりさげんばかりの、気持でした

そこで、神様は、

「今更 後悔しても、

それは、無理というものだ、

お前が、なまじっか

独占欲を起こしたばかりに……

私は、お前をためしてみたのだが、その結果が

このような事になってしまった

そこで私は

お前に一つの事を

教えてあげようと思う

それは

何事によらず

愛は開放的でなければならぬ

という事だ」

とおっしゃると

突然、あたりは

真暗になってしまいました。

ただ

私にだけは

神様が、天にお登りになってゆく白い姿が

はつきりと見えました。

その事があってから

私の性格は

仲間の誰に対しても

親切で

公平に接し

何をするにも

思慮深くなったと仲間は言います。

ちっぽけなもの

その一、人間の歴史の話

三年 浅村 益弘

僕がもし将来学者になりそになって歴史の教師になったとしたら僕はその授業の第一目に僕の生徒達に向って次の様な話をするだろう。

僕は先ず黒板にチョークで長い一本の線を引く。そしておもむろに生徒達の方に向き直って話し出す。

「君達、この一本の長い線が人間の歴史である。出発点はどこだか分からない、これから先どこまで続くか分からない。しかし細いこの一本の線の上の一つの点にも、幾千万、幾億万と云う人間が浮かび沈んで行った。その意味だけでも、この一本の線は、僕達にみじろぎも出来ない程の感慨を与えてくれる。そして今僕達はここ

の点に（と云って一本の線の真中あたりを示す）今まで先人達がや

それに

時々一人静かに

物思いにふける事が

多くなりました。

そんな私の姿を

皆さんがご覧になった時には

どうか

あの小石と

天にいらっしゃる神様の事を

思い出してみて下さい。

——美しき玉のような石見れば

心は慕に君を忍ばむ——



って来たとそっくり同じ事——生きるという事をしてる。生れてそして死んで行く。何の為に？ 誰の為に？ 何の為に生きるのか——僕はそう云う質問は君達には聞かない。そんな答は得られる筈はないんだ。又、仮にもし得られた所で、それが果たして何になるとは云うものの、誰だって死ぬ運命を持たされて生きている以上、生存理由位はあみ出したいのが人情だ。何故なら人間は死ぬのが恐いから。しかしそう云う所から出発した疑問に、仮に妥当な答が見つかったからと云って、それは真理ではなくなる。真理と妥協とは別の物だ。

さて、今日は、その「妥協」を僕なりに述べてみたい。勿論これは僕の一生を通じて不変のものではないが、今はこう考える。

人間は何故生まれたのか。それは生物の分野だ。何の為に生まれたのか。何の為に生きるのか。それも実は僕は哲学の分野に入れるよりも生物の分野に入れた方が適當ではないかと思うのだ。何故なら今、この時点に生きている人間は——過去の人間がそうであったように——単に「人間の歴史」を絶やさない為に、この一本の細い線をずっとずっと先まで延ばす為に生きているのだ。と思うからだ。

そしてその意味に於て、人間の生存理由は、「生きる為」と云う事に凝縮されるのだ。人間が地球上に姿を現わしたのが五百万年前とすると、はつきりその歴史が分かっているのはその二百五十分の一の二千年かそこらだろう。その二千年の四十分の一の歴史を僕達は受け持たされているのだ。僕はその事に感謝したい。この一本の線の上に現われた何千億と云う人間の一人になれた事に感謝したい。だから、だからこそ僕の一生の仕事はこの人間の歴史と云う細い線

い。何故ならば、それを無視すれば本質その物も無視しなければならなくなるからである。彼は銅貨を空中に放り投げた。鈍い音がして机に落ちて来た。一銭と書かれてある面が上に出た。彼はまた同じ動作を行った。今度は表である。彼には菊の紋を見る事が出来ない。彼は同時に両面をのぞく事の不可能さに少々腹立たしく思った。そして次には、この現象をどんな事でも良いから自分に結びつけようと思った。人人間にも表と裏がある以上——何が表であり何が裏であるかは問題にはならない——人と接する場合に於いてどちらか一方しか見せる事が出来ないが、それだけでは決して人の本質全ては分かりはしない。(あたかもこの銅貨の裏を見て一銭銅貨とは菊の紋しか書かれていないのだと信じ込むがごとく。——しかしそう云う偏見はどうする事も出来ない事実なのである。彼は又銅貨を放り上げた。すると今度は机の隅にあった本の群のわずかなすき間にはまり込んでしまった。銅貨は立っていた。しかしどうした事だろう、彼の目にはそれが銅貨として映らなかった。ただ側面のギザギザばかりが目について、一銭の字も菊の紋も見えなかった。彼は一層腹立たしくなった。さっきまでは片一方しか見えない銅貨をあれ程腹立たしく思ったのに……。銅貨が彼にその両面をのぞかせようとした事がかえって両面ともをのぞかせない反目になった。今見えているのは側面ではない、単に表と裏の境界線ではないのだ。彼はここに於いて初めて、あのようにする事も出来ない事実を正当化する事が出来た。すなわち自分の裏と表を同時に人に見せる事が不可能であれば又仮にそれを試みる事によってかえってどちらも見せる事が出来なくなるのなら、どちらか一方を強く押し出さなくてはならない。こ

こに彼自身の信念となりかけた、徹する、と云う言葉に通じるものがあつた。「徹する」と云う事——それは意地を張る事とは違う無性格者——社会組織の中に自分を扶養してしまつた一見徹している様な人間——になれと云うのではない。むしろ徹せない人間が意地張りになり、無性格者になるのだ。何故なら彼等はその裏か表を形作るもの、即ち銅貨の銅そのものが無くなっているからである。「情に掉させば流される」と云う言葉が有る。情に流されるままにしていれば自分を押し通す事が出来なくなる。どうすれば自分を見失わないで済むのか。答えは「徹する」と云う事である。人はとかく情けに流される人間——具体的に云えば、自分を多少偽つても他人と同調する人間、孤立する事を恐れ、善悪の判断には全て他人が中心となつてゐる人間、良く云えば社交家で、人情家だと云われている様な人間——を見て偉い人だと誤解するものだ。しかしそう云う人間を皮むいてみると何もない、つまみだけ。自分の信念と云う物がなく行動している。しんがある様に見えてもそのしんは実は皮の固まりに過ぎないのだ。

銅貨の運動を見ての彼の考えはこれだけでは停まらなかった。それは、昔から美德とか理^{ことわり}とか云われて来た無形の怪物にまで及ぼうとした。彼は謙譲と云う美德を考えてみた。今まで彼はそれを永遠に変わらない絶対的な美德だと思つてゐた。しかしそれは今ではあくまでも表だけの事だと思われてきた。その裏には消極性と云う事が同居していた。「尊敬」は「卑下」と表裏の関係をなしていた。「明朗」には「軽薄さ」が、「思慮深さ」には「行動性の欠如」が「愛」には「嫉妬」が、「慈悲」には「優越」が、「信頼」には「自

己喪失」が同居していた。しかし何人と雖もその一方だけを見てそれ全体を非難する事は許されない筈であつた。嫉妬と云う事を見て誰が愛する事その物までも否定出来るのか。ここまで来ると洋は何が徳であるかと考えた場合、その両面の中間が一番良いのだとするのも考え物である様に思われてきた。何故ならばその徳は二つの境い目でしか無い——銅貨のギザギザでしか無い——物であるからである。彼はこの一見両面をそなえている様で実は単なる一本の線しかなさないものよりも、片一方しかないけれども広い面の方を選ぶべきだと思つた。ある場合にはそれが人間への不信、行動性の欠如となつても仕方の無い事だと思えてきた。そして中庸の徳と云う言葉の持つ魔力性が非常に憎くやつて来た。この憎さは、決して「徳」と云う事自身をも否定する事ではなかったが、ただ、そう云う言葉に誤魔化されて生きるよりも、表に対する裏を見つめて生きる方がよっぽど彼の性に合つてゐた。そう云う生き方は辛い事もある。例えば純粋な人間の感情と云う物までもその裏にある物をさぐり出すくせを働かせねばならない。がそれは逆な言い方をすれば不道徳、不正と見える事の表を探し出す喜びもある訳だ。けれどもそんなに深く物事を考えて何になろうや洋自身も絶えずその疑問に悩まされてゐた。ただその疑問を柔らげる者として彼には、「考える為の考えをしているのではない」と云う弁解が用意されてゐた。

つまり僕がその時(今も)そこで云いたかつた事は、「真理は絶対有る。一つしかないのではない。二つある。そして三つ以上はな

い」と云う事です。それを云う以前にまず僕の云う「真理」を限定する必要が有ります。「真理」とは物事の本質を仮に名付けた言葉だと思ひます。だから無論、善悪、徳・不徳等と云うものでは測定出来ません。何がそのものの本質であるか? 非常な難問ですが、僕は今はこう思ひます。「本質」とは「目的」です。先の一銭銅貨の例をとれば、何をして一銭銅貨と呼ばしめてゐるか、と云う事は無論それを形作っている銅そのものではありません。かと云つて、菊の紋章や「一銭」と書かれた文字でもない筈です。何故ならば「一銭」と書かれた文字が全て一銭の値打ちを持つものではないからです。では一銭銅貨の本質は何か? それは人間が経済上の理由から一銭の値打ちを持つものとして——米何俵かと取り換えられるものとして——一つの形を与えたと云う事、その事だと思ひます。全ての真理と云うものは人間を離れては存在しません。人間が生きてゐる事、意義を見出す事として努力した結果の一つの方便です。だとしたら、一つの物事に対しては必ず真理は二つ有るのです。恋愛について云えば、一つは出来る限り自分を埋没させて相手の中に消化させる事、もう一つは自分を離さずに相手を所有する事です。僕は君との恋愛に於いて後者の態度に欠けてゐたと思ひます。しかしそう考えると僕の考え方に無理が生じて来ます。僕はもし、僕の考えてゐる様に真理が二つ有るとしても二つ合わせて求める必要はさらさら無いと思ひます。(徹すると云う事)だから、君に対してもしや恋愛に対しても二つは求めません。だのに僕は前者のものだけで押し切る事に未練が残ります。この矛盾はいつかは解消させてみせます。その時にまた僕の考えを批判して貰ひたいと思ひます。

偉大な思想家、文学者の最も偉大な点はそれに触れた人間をその人自身をちっぽけなものに感じさせる点にあると思う。逆説的で嫌な表現だけれど自信からは真の自信は生まれたいと思っている。人間がたくましい生き物であるか、ちっぽけなものであるかは考え方の自由であるが、少なくとも飽和状態から（それが見かけだけのものでも真にそうであっても）飽和状態は作り出せないものだ。だから真に飽和状態を作り出そうと願っているのなら常にその何ベースントかを空虚にさせておかなければならない。前書きが長くなくてしまったが僕が今云いたい事は僕がちっぽけなものであると云う意識を強いショックと共に持たされた経験の話である。

島木健作と云う昭和期上半の作家は僕が彼を偉大として考えていたと云う先入観がなかっただけに「礎」「生活の探求」（僕は続編は読んでいないが）等の作品を読み終えた時のショックは何にも増して強烈だった。誇張ではなく、しばらくは口もきけない程ただボンヤリとしてしまった。そしてその後彼の生きた時代の事を日本史で学んでから一層打たれてしまった事を覚えていて。僕は彼がああ暗黒の時代にもちっぽけな自分を守り切ろうとして必死になって何かにすがりつこうとしてもがいているのが——丁度彼の作品「赤蛙」にある様に——目に浮かぶ。この事は去年の「ル・クール」に富増先生が書いておられた。僕はその時の先生の考えは考えとして正しい事だと思っている。しかし先生の考えも結局は僕の島木健作に対する尊敬の念と矛盾するものではないと思う。僕は彼の作品の中で「謙

虚さ」と「真面目さ」を学んだ。何に対しての謙虚さでもよいが、煎じつめる所「自己」と「自己の生活」に対してだ。このちっぽけな、恐ろしくちっぽけな「自己」と「自己の生活」が何にもまして優先するものである事を知った。（注。これはエゴイストを弁護する思想ではない）人間は「ちっぽけなものである」と云う考え方はそのままちっぽけなものを軽視するとか、虐待するとか云う行為とつながらない。むしろちっぽけであればある程それを大事にし、大きなものに育て上げる事が必要になって来る。この考えと、さっき書いた長い前書きをからみ合わせると一つの飛躍が生まれると思う。（ただしK君の為に注釈を加えるなら、この考えは君の主張する自己否定、自己敵視、自己虐待の思想とは大いに異なる。僕は「否定」はしない「自覚」するのだ。）

兄に。去年の十二月十七日から一月三日まで戸塚の下宿に寝泊りさせて貰い、受験勉強をしていた様な顔で、毎日こんな事を書きながら書いていました。でももしそれが悪徳であるならば、僕は声を小さくして弁明します。だって人間は社会的動物なんだから、一人で一週間も三疊の部屋にとじ込められたら誰だって人なつこくなりますよ。僕の周りには誰も知っている人がいなかったからこんな事をして、タカブる気持をせめてでも押えていたと云う訳。その上、勉強の予定だけは見事に消化したのだから僕の意志力も大したものだと思います。讀めて下さい。入試バスの報告と共に（あるいは引き換えに）この僕の青春の一時期の記録を提出します。

バア坊に

マ

Koreo mea whiri whiri i Maori pakawai tara

序

一、動機

三年須藤 勲

私が、この小説(?)を書くと思ったのは、ごく最近のことである。「ル・クール」の作品募集のポスターを見た時、卒業までに何か一つぐらい載せてみたいという欲望が湧いてきた。さて、家に帰って机に向ったのはいいがテーマがない。二、三行書いては続ける自信がなくなってしまう、それまで……。あぐくのはてには、押入れから古いノートを引張り出して、読み返す始末である。それらのノートには、以前気が向いた時に書きつづった小説らしきものが、ビッシリと書き込んであった。しかし、どれもこれもがあまりにも私小説的で、公開するわけにはいかない代物である。しかし、何かを載せたいのだ……。三年間の高校生活の終止符として、それが下手でもかまわない。全く無責任なことでは申しわけないが、真実こう考えていたのだから……。二、三日遠ざかっていたが、ある日急にニュージーランドのペンフレンドのことを、思い出した。我々の文通は、この夏(六二年)以来行われていなかったもので、忘れていたのだ。それを親友であり、文通仲間である一友人が、思い出させてくれたのだ。ペンフレンドからの最後の手紙を。その手紙には数行に渡って「マオリ人の伝説」が、書かれていました。それを、思い出したのです。「章之介」だ。今昔物語に題材を求めている

るじゃないか。」こう考えると早速「マオリ伝説」に肉づけを始め、出来上がったのがこの作品です。しかし、原文が完成したのが、六三年に入ってからでした。これでは推敲する間もありません。何度も提出するのをやめようかと思いましたが、ル・クール編集委員長に原稿提出を誘われた時約束し、スペースを取っておいでもらった以上、中止するわけにもいかず、載せてもらうことにしました。目下、軽はずみな約束を与えた事に対して後悔し、又ほとんど推敲することなく、「ル・クール」に載せなければならぬことをお詫びする次第である。

二、伝説について

元来、私は伝説というものが好きである。何故好きになったかと聞かれると困るが、祖母や母が、故郷(新潟)の伝説を膝の上の私に聞かしてくれたり、両親が、「伝説集」とも言うべき本を、買い与えてくれたためだと思う。その頃(小学校二、三年の頃)、伝説の中に登場してくる「英雄」や「物の精」の活躍、働きを、喜び、悲しみ、不思議がったものだった。小中学校の国語の教科書には、必ずと言ってよいほど伝説が載っていたので、購入すると真先にそれを読んだものである。今では、妹の教科書を読むだけになってしまったが、今までに国産品、舶来品とりまぜて、どれくらい読んだか皆目見当がつかない。思うに伝説はこの国、否、どの民族にもあるものであり、このことは間違いないだろう。内容は自分達の祖先の偉業を称えるもの、その中の英雄を称賛するもの、神や大自然の

力に対する恐れや賛美を、それらの「もの」を擬人化することにより、親近感を増しているもの、若い男女の恋愛を扱ったものなど、いろいろありますが、どれもがみんな彼ら——すなわちその民族の祖先——と深い関係があるものばかりです。

伝説というところ、となく軽くみる人がいますが、どうして、なかなか有益なものです。第一伝説により楽しむことが出来るし、我々は先祖がどのような生活をしてたか、どんな物の考え方をしていたかということのあらましを、つかめるではありませんか。それに、地形の変化なども知ることが出来ます。たとえば、国語学者として第一人者の金田一京助氏が、わざわざ最果ての北海道まで出かけて、真剣にアイヌ語とアイヌ伝説について調査しているのは、日本語の発生、日本先住民族の渡来経路など学界に於いてまだ定説のない、しかし、重要な問題にある方向からの解決を与えることが出来る可能性が濃厚だからだと思えます。

このようにして我々は、伝説を知ることによって、その民族の祖先の生活態度を、知ることが出来ます。よって、我々は伝説をもっと大事にしなければならぬと思います。もっともそんな七面倒なことをしていたら、日が暮れてしまうと、おっしゃるのでしたら楽しみだけをお求めになるのも大いに結構、良いことです。

三、「マオリ伝説」の原文

日本に数限りない伝説がある如くに「マオリ伝説」といっても、多種多様でお伝えしきれません。ペンフレンドが、最も有名とされ

四、マオリ族について

マオリ族とは、ニュージーランドの原住民の部族名です。このほかに、モリオリ族という少数部族が住んでいますが、ほとんど語られません。

1 マオリ族——一八四四年イギリスのニュージーランド占領。

前は二十万人位、最盛時には五十万人位、いたと推定され、人口も、十九世紀末には、何と四万人にまで激減してしまいました。何故こんなに急に、減少したのでしょうか。一つには、「マオリ族が、征服者に対して反抗した。」ということが考えられます。そして、石器しか持たないマオリ族が、鉄砲、大砲、その他の文明の利器に叩きのめされた、としても、一般に残虐行為を好むゲルマンが、大量殺戮をやったとしても、これほどには減少しないでしょう。ましてメラネシア、ミクロネシア諸族、オーストラリア原住民に比して、知能程度の高いポリネシアの一部族であるマオリが反抗しても、無駄なことが分らない筈がないではありませんか。二つには、病原菌に対する免疫のなさがあげられます。入植者の中に、結核菌、天然痘その他の患者、保菌者がいたのです。病氣といえ、食あたり、ぐらしか経験者したことのないマオリ族に、伝染病に対する抗体ができていたと考えられますか。彼らは、バタ／＼減少しました。あわてて植民政府は、保護をし始めました。そして、最小時の四万人が、現在では十二万人にまで回復したのです。他に原因はいろいろあるかも知れませんが、「二」が一番適切だと思うのです。近くにインフルエンザによって絶滅したタスマニア人（オーストラ

にいるものを教えてくれましたが、それは普段やりとりしている手紙の中に、数行に渡って書かれているにすぎない、ごく簡単なものでした。

……ニュージーランドの北島に、ルアベアという北島最高の山があります。そして、このルアベア山と附近の山について、マオリ人の伝説があります。

マオリ人が、※アオ・テ・ロアにやってくるずっと以前の話です。北島の中央部に、ルアベア、トンガリロ、ナラホエ、タラナキの四山がありました。ルアベアと大変険しいトンガリロは、両方ともタラナキを愛していました。（タラナキは、女性の山なのです。）それで彼らは、戦いました。そして、トンガリロは、裂火の如く怒って爆発しました。（彼の頂上は、今でも時々爆発します。）それでタラナキは、恐ろしくなり海岸に向って、数百マイルも逃げ走りました。彼女が走った時、水路がえぐられました。それが現在のワシガヌイ川です。又、タラナキ山は、今はエグモント山として知られています。

※アオ・テ・ロア——これは、ニュージーランドのマオリ語名で、雲の間の長い陸という意味です。というのには、マオリ人が、カヌーでニュージーランドへやって来た時、彼らは雲の間に長く連なる南島の山並を見たからです。……というのが、原文です。何故原文を載せたかというのと、皆さんにも肉づけをやってもらいたいからです。何でも良いのです。この原文を骨にして、思ったことを加えてもらえなさい。きっと楽しくて、「食事だゾー。」と言われるかも知れませんよ。

リア原住民（^{マオリ}）のことがありますが。マオリ族の来歴は詳らかにされていませんが、信ずるに足る伝説の研究によれば、東部ポリネシアのソシエティ諸島から渡来したものらしく、その最も大規模な渡来は、十四世紀半ばに行われたらしい。したがってマオリ族は、身体形質的にも、文化的にも、ポリネシア系に属する。

2. 文化・生活——マオリ族の文化領域は、フエアフェル岬とバンクス半島を結んだ線ではほぼ分割され、以南は採集、狩猟、非定住生活を営み、以北はタロイモ、薩摩芋などの原始農耕を営み、方形切妻家からなる集落が見られた。文化は、木彫をはじめとする工芸の発達に著しいものがあり、緑石を加工して石斧の刃としたり装身具としたりする。製陶術、機織りは欠けるが、亜麻を編んで衣料とする。男子は、顔面に精巧な入墨を施す。

3. 社会構成——父系的大家族性をとり、何らかの血縁関係に結ばれた数個の大家族により親族集団が構成され、それが数個集まって部族をつくる。さらに緊急時には、その上に部族連盟がつけられることがあった。

4. 階層分化——身分的階層分化には著しいものがあり、貴族、平民、奴隷の別がある。又、社会的分業の芽ばえも見られ、入墨師、大工、舟大工などは専門化していた。

五、モリオリ族について

マオリ族の渡来以前に、メラネシア系の先住していた。その一派は、ニュージーランド東方のモリオリ族であると考えられていた。し

かし今日では、モリオリ族はポリネシア系であることが、明らかにされている。よって、モリオリ族の生活、文化などは、マオリ族のそれと類似している。(なぜならば、ポリネシア系諸族の文化、生活などは著しく類似し、特に言語はどの島へ行っても通じるのではないかと思われるくらい似ているのだから……)

Korero mea whirwhiri

i Maori Pakipakaitara

時は、一九〇〇年代。所は、ニュージーランドのマオリ部落。若いさらばえた一人の老人が、二人の孫を前にして坐っていた。

一、マオリ人の渡来

「お祖父ちゃん、またお話しておくれよ。」

「そうだ。ナ、いいだろ。お話しておくれよ。」

「そうじゃな。静かに聞くんじやぞ。わしが、お前達の頃じやったがノ。やはり祖父さまに聞いた話でな。祖父さまも曾祖父さまに、曾祖父さまも……というぐわいに伝わってきた話での。」

「早く話しておくれよ。」

「そうせくな。物事は全て落着かなきやあならん。いいかよく覚えるんじやぞ。(祖父さまを見つめる子供達の瞳は、期待にキラキラと輝いていた) 祖父さまが何人も、何十人もこの話を伝えてきたんじやよ。そのくらい大昔のことでな。わたしたちの御先祖さまはなここからずうと東の小さな島(すなわちソシェイ諸島)に住ん

な、ここからずうと東の小さな島(すなわち、ソシェイ諸島)

励んだのじや。再び月が無くなり、三日たち、四日たち、人々はそれを諦めかけていたのじや。そして、五日目の明け方じやった。見張り小屋の板木が、けたたましく鳴り響いたのじや。「オーイ、帰って来たゾー。カ・エ・ツ・テ・キ・タ・ゾー！」人々は夢を破られてガバツと飛び起きた。見よ、微かに白らんだ西の空の下を、二艘のカヌーが飛ぶように来るではないか。ぐんぐん大きくなってくる。間違ひなく探しに行った若者じや。何艘ものカヌーが、迎えに漕ぎ出したのじや。ググツ、カヌーは浜に乗り上げ、若者は駆けよった人々に抱きかかえられるようにして、御先祖さまの前に連れてこられたのじや。四人の若者は、こんなにも遅れたことをお詫びし、二艘が途中で出会って一諸に探したこと。そして、ついに何十倍も、何百倍もある大きな陸を発見したことを告げたのじや。御先祖さまは、四人をやさしくねぎらわれて、「皆の者、今聞いたとおり大きな陸をこの者達が見つけたが、ただアオ・テ・ロア(雲の間の長い陸)というだけで皆目見当がつかない。それで偵察隊を送るが、志願者はいるか。」すると、例の四人が真先に……。それに付られるようにして、ぞくぞくと志願者が出たのじやよ。偵察隊が決まると、四人の者は翌日出発すると言いつ張ったのじやが、御先祖さまは、出発を次の満月まで延ばされたのじや。」

「何故? 皆困まっているんだろ。」

「困まっていると言ったって、すぐ死ぬわけじゃないじゃろが。四人の案内人を休ませるためであつたし、準備を完全にするためでもあつたのじやよ。やがて満月の夜がやって来た。御先祖さまは、近

でいらしたのだ。その島は、一年中お日さまが照らして下さつたので夏ばかりじやった。そして、平和だったそうじや。」

「それじゃあ、何故この島に移ったのさ。」

「それがな、平和な島にも困まったことが起つたのじや。戦争なんちゅうもんはとんとなかったの、仲間が多くなつて食えなくなつてしまつたのじや。なんでも、その時若い者は近くの島を分捕るじやあ言つて、戦いの仕度を始めたそうじやが、御先祖さまは、全て御先祖さまの御兄弟や、お友達達の島だからとおっしゃつて、お止めなすつたのじや。」

「それじゃあ、飢死にしちゃうじやないか。」

「そこが御先祖さまの偉いところでな、皆を前よりも一生懸命働かしたのじや。それと同時に、何艘ものカヌーに頑丈な若者を乗せて、もつと大きな島を探しにやらせなかつたのじや。その時こうおっしゃつた。「お前達は、月が満ちる前により大きな島を探がして戻って来なければならぬ。」丁度満月の次の朝じやつた。「お前達は、今までよりもつと多くの芋を栽培し、魚を捕り、この者達が帰ってくるのを待たねばならぬ。若者よ、仲間の命は、お前達が握っているのだぞ。行け!」

若者達のカヌーは、四方八方へ散らばつて行つたのじや。やがて月が無くなる日がやって来たが、誰も帰つてこなかった。そして、再び月が満ちようかという頃になつて、ぼちぼち帰つてきたのじや。だが、どれもこれも期待はずれじやつた。そして満月が再びやってきた。これまでに九艘のカヌーが、帰つてきていた。だが駄目じやつた。まだ五艘帰つてこない。人々はそれに望みを託して、仕事に

くの島からお客を招待して、盛大に出発の宴を張られたのじや。

翌朝、夜が明けるがはやいか、二百名にも及ぶ偵察隊が、若酋長のボンレンさまに率いられて出発したのじや。島に残つた者は、期待と心配に胸をふるわせながら、働き続けていたのじやよ。満月が過ぎ、月が無くなって三日目じやつた。ふらふらになつて二人の若者が帰つてきたのじや。御先祖さまの前に連れて行かれた二人が語つたことは、恐いことじやつた。「私達は、満月の五日ばかり前にアオ・テ・ロアに上陸いたしました。二、三日は何事もなく過ぎたのでございますが、四日目に突然モリオリとかいうのに襲われたのでございます。相手はそんなに多くないようですが、疲れていて押され気味なので援軍を欲しいとの若酋長のお言葉でございます。」

それで御先祖さまは、援軍を一次、二次と送つたのじや。しかし、カヌーに制限があるので、しばらくカヌー造りに精を出していらつたのじやが、しばらくすると若酋長が「無事に勝利を収めました。御安心下さい。」と伝言をよこしたのじや。御先祖さまは、伝言者を案内人として、アオ・テ・ロアに来ていた者の妻子、恋人、それに何十組もの夫婦を送り込み、この島に定住するように言われたのじや。御先祖さまが、お亡くなりになつた後この島に定住したボンレンさまの弟さまが、故郷で酋長になられたのじやよ。マオリ族は、その時二つに分かれたのじやが、その後も仲が良くてのう、何十回にもわたつて、この島に移民したのじや。弟さまから十二代目のトンミンさまの時じやつたが、どうしたことか作物が全く取れんのじやよ。それでトンミンさまは、全員を率き連れてこの島にやつてこられたのじや。それで再びマオリ族は一つになつたの

じゃよ。

二、アオ・テ・ロアの占領

「お祖父さん、敵はどうしたのですか。」

「お兄さまの若酋長ボンレンが、この島に偵察隊を率き連れていらつしたのには、お話ししたくな。上陸なさると、あちこちら水や、食料などを探してお歩きになっていらつしたのじゃが、四日目に突如敵に襲われなされたのじゃよ。激しい戦いが、月が二回満るまで続いたそうじゃ。若酋長は、味方を率いて勇敢に戦われたのじゃ。最初は負けそうじゃったが、応援を得て盛り返していったのじゃよ。敵を追ってゆくうちに、アオ・テ・ロアが二つの島に分れていることを発見なされて、北の島からは完全に追い払ってしまわれたのじゃ。そこで御先祖さまに、御安心下さい、と伝言したのじゃよ。その後も何年にも渡ってお戦い続けなされて、とうとうモリオリ族を東方のチャタム諸島へ追い払ってしまわれたのじゃ。その時、わしのような老人も捕虜になつたんじゃな。その老人が、何かの時に話し伝わっている話しが、あるんじゃがこれから集会に出なければならんから、この次にしような。」

「こないだの話しをしておくれよ。」「お祖父さん、話して下さいよ。」

「よしよし。どこまで話したかのう。」

「ええと、お祖父ちゃんのような爺さんが捕虜になつて……………」

「そうそう。爺さんの話しまでだったナ。その爺さんはな、真白な

やいなや、「戦いする人って嫌いだわノサヨナラ」と言い終るが早いか、姿を消してしまつたのでございます。今までですといつの間にか消えて、思いもしない時に現われるのがビョーレのやり方でございましたから、再び姿を現わさないでございましょう……………」

（こう言うとその爺さんはボロボロ涙を流して、しばらくは何もしゃべらなかつたのじゃよ。やがて、涙をふくところ言つたのじゃ）どこまでお話ししましたでしょうか。ああ、それでございしましたな。その陽気なビョーレが、ある日木陰の石に腰かけて泣いていたのでございます。何百年も私どもと暮らしているの、ビョーレのしたことはみな伝わっているの、でございますが、ビョーレが泣いたなんていうのはついぞ聞いたことがありませんので……。ビョーレは爺奴を発見して腰をぬかさんばかりに驚いたのでございませうが、やがて決心したのか、ぼつりぼつりと話し始めたのでございませうが初めて聞くことばかりで、全く驚かされたのでございませう。

2、凱旋

なぜこの爺が驚いたかは、おいおいとお分かりいただけるのでございませう。（ここで爺さんは、盃の酒を一息に飲み干したのじゃそして、しばらく感慨深そうに目を閉じていたが、酒を一杯所望すると、それを目の前に置いて話し始めたが、全く驚くべきことじゃった。）ビョーレの母は、ホーレ、あそこが高くそびえているタラナキ山でございました。父は北の暑い島々——メラネシア——の小島から逃がれてきた若い男女の間に生まれたイワカという若者が

頭をしていて、長い／＼ひげがあつたそうじゃよ。そしてそのひげも真白じゃつたと。身分を聞いても絶対に答えなかつたそうじゃが、どこことなく品があつてな、長老の一人らしかつたのじゃ。他の捕虜に聞いても、そのことだけは口を割らなかつたそうじゃ。何故だか分らんがな。その爺さんはな、話す時は必ず酒を所望し、チビリ／＼と唇を濡らしながら話したそうじゃ。時として涙まで浮かべていたそうじゃよ。爺さんの話が始めると、部落中の者が皆爺さんを囲んで、固唾をのんで聞いていたそうじゃ。

三、捕虜になつた爺さんの話

1、ビョーレの隠遁

あなた方がこの島を占領するまで、我々モリオリは妖精と一緒に暮らしていたのでございます。その妖精はビョーレといって、それは可愛らしい女の子でございました。我々の祖先がこの島にやつてきたとき、すぐに友達になつたのでございます。ビョーレはよく我々をからかいましたが、誰もその悪戯を怒りませんでした。怒るどころか喜んだものでした。悪戯自身がとてもかわいらしいもので、その上悪戯したあとには、必ず何か良いことをしてくれたからでございます。彼女はいつも陽気に跳回っていたのでございます。いまでもいるかですって。ええ、ええ、ちゃんといふますとも。でも、ビョーレは再び姿を見せないでしよう。あなた方との戦いが始まるまで私たちといて、一生懸命に止めたのでございますが、始まつたと見る

ございました。

…………どこからお話申しあげたらよいのやら。…………そうそう。これからお話ししましょう。イワカの父はアドミラチー諸島のモンロリオ族の若酋長でございました。ある日、島の見張所の枝木・ほら貝の音が、朝ぼらけの静寂を破って激しく流れ出たのでございます。すると何百という生き物が、浜に並んだ小屋から、あるいは山腹に並んだ小屋から、どつと飛び出してきたのでございます。真紅な太陽が金色の光を投げかけ始めた海面を、金色に輝く何十そうものカヌーが浜目指してやつて来るではありませんか。浜の人々は不安な面持ちで右往左往するばかりでございましたが、人々の不安を増すかの如くにほらの音が響き渡つたのでございます。…………ボツ、ボツ、ボツ。するとカヌーからも全く同じ音が響き渡つたのでございます。人々はドツと歓声をあげると、バンパバンと水の中に駆け込んで行つたのでございます。やがて二つの動きがぶつかりあつた時、人々は海中で激しく抱擁しあつていたのでございます。打ち寄せる波の音も、涙を浮かべ、しかし口元には笑いを浮べて抱擁し、背中を叩きあう人々の泣き声、笑い声で、しばし消されてしまつたほどでございました。華やかな凱旋の喜びの中で、人々の哀れを誘つたのは、我子を…………夫を…………恋人を求めて泣き走る女の姿でございました。…………やがて人々は手に手にカヌーから降ろされた紅・桃・白など色とりどりの見事な珊瑚・鯨や鯨の骨、そして大きな真珠を。そればかりではございません。すぐ後には数珠つなぎにされた男女が続いていたのでございます。可哀そうにも、彼らは利あらずして戦いに敗れ、捕虜となつたのでございます。（この時爺さんは

ガバツと地に伏せて、おいおい泣き始めたんじやよ。自分たちも同じ捕虜になっているのでよい悲しかったんじやろ。皆何も言えなかったそうじや。そればかりじやない。若い女子などはポロポロ涙を落し、痛ましげに爺さんを見守っていたじやとよ。……やがて一行は山の中腹にある社に着くと戦利品、……捕虜……を社前に捧げると一斉にひれ伏し、怪しげな祈りを始めたのでございませう。急に軽快な太鼓の音が響き渡り、人々は踊り始めたのでございませう。三日間も——初めの日は、この勝利を感謝して、二日目は戦死者の霊を慰め、再び彼らが人間として生れることができるように、そして三日目は以後の種族の繁栄を祈って——踊り狂うのでございませう。

モンロリオ族が普段の生活に戻ってから、はや半年が、夢ように、平穩無事に過ぎ去ったのでございませう。女はヤマイモ・タロイモづくり、豚・鶏の飼育に汗を流し、男はカヌーで沖へ出ては漁労に明け暮れるという生活を送っていたのでございませう。

3、芽生え

（「ネー、お祖父ちゃん、捕虜たちはどうなったのさ。」どつちのじや。モロオリか？それともモンロリオか？「そのモン……モンなんとかっていう方だよ。」爺さんは再び顔を曇らせはしたが、涙を見せずに話し続けたのじや。あゝ哀れな捕虜たちは奴隷にされ、まことに惨めな生活を送っていたのでございませう。男達は半年の間、厳しい監視の下で連日二十メートルもある海底に真珠採

クタの面影を忘れるようとしてできないでいる。シエナミオでございませう。

シマクタは初めての戦いに、何とも言い現わすことができない恐怖を感じていたのでございませう。それが「死の恐怖」であつたか、「殺すことの恐怖」であつたかは彼自身にも分からなかつたのでございませう。だが、戦場の奮闘に酔つたと申しあげたら良いでしょうか。無我夢中で走り、逃げまわつていて、偶然にシエナミオを見つけたときに、「俺は死なないぞ。どんなことをしてもこの処女を連れて帰るのだ。噫！何と素晴らしい処女だろう。俺は死なないぞ。」とこんな考えが、一瞬火花の如くに閃いたのでございませう。

凱旋してからというもの、父の代理で戦利品の分配、カヌーの修理の監督・他の島に起つた小反乱の平定などに追われどうして、シエナミオに言い寄る機会を見つけないで済んだのでございませう。……と言うよりはむしろ、シマクタが他種族の、それも奴隷の女と結婚するなどと言ひ出すのを恐れた酋長が、シマクタを遠くにやつておき、その間に美しいものだけを撰んで神聖なる巫子にしてしまわれたのでございませう。しかし、こんなことで彼は……彼らは諦めなかつたのでございませう。まことに言葉を変へることがあつても、それはいつも株を守りて免を得待つ大人の前にございませう。だが、恋する者にとって、どうして言葉が必要でしょうか。いつ頃からか、二人は瞳で愛を誓ひあうようになっていたのでございませう。やがて、それだけでは満足できなくなつた二人は、人目を忍んで会うようになり、夜を語り明かし、日がかなたの水平線に微かに顔を出すのに気づいて、あわてて帰るということが度重なつたのでございませう。

り・珊瑚採りに潜られ、ある者はアコヤ貝にはさまれたり、鱧に食われたりし、又ある者は水庄の急変に耐えられずして死に、半分になつていたのでございませう。女はというと、これまた厳しい監視の下で低湿地の畑でのタロイモ・ヤマイモ栽培に従事させられていたのでございませう。しかし、ほんの一部の容姿端麗な処女だけが巫子として選ばれて、比較的自由な生活を送っていたのでございませう。その中に一際目立って美しい処女がいたのでございませう。彼女の名はシエナミオ——これは彼女の故郷の言葉で「天女のように美しい」「処女」という意味でございませう。みずみずしい小麦色の肌、流れるばかりの黒髪、清く澄んだつづらな瞳、整った肢体……名が示すとおりの美しさを備えていたのでございませうが、たった一つ彼女には欠けているものが……微笑が欠けていたのでございませう。

あの朝、突然に、まるで疾風の如くに、黎明の静けさを破つて襲いかかつてきたモンロリオのカヌー。雄略。逃げまどう女子供、手近かの得物を取るがはいか、勇敢に立ち向う男たち……しかし、準備に劣り、不意を打たれてあわてふためくシエナミオの仲間たちは、砂を朱に染めて、次々と倒れていたのでございませう。シエナミオの笑みを奪つたこの思まわしい出来事……この最中に彼女は「胸のときめき・血潮の逆流」を覚え、自分自身を叱りつけたものでございませう。乱入者の中に発見したくまなく、素晴らしい若者……憎い敵……彼に次々と打ち殺されてゆくのは彼女の仲間、「もしかしら父が……兄が……」とは思ふものの、彼の無事を祈らずにはおれないシエナミオでございませう。あの日からはや半年。巫子として神に仕えている間だけでもあの若者——若酋長シマ

います。（ここまで話した時、爺さんは自分の思い出を話すかのよう目を閉じてノ、黙りこくつてしまつたのじやよ。「どうなつたの。さあ、先を話しておくれよ。」今日はこれでおしまひじや「どうして。いいじやないか。ネエー。」爺さんが黙りこくつてしまつたので、その日はそこまでで終りになつたのじやよ。だからおしまひじや。）

4、出奔

そうそう。それは新月の夜でございませう。燃えきつてしまふのではないかと思はれるような真紅なお日さまが、西の海を金色にそめて沈んでしまふと、西空のほのかな紅さだけを残してあたり一面真黒になつてしまつたのでございませう。鼻をつままれても分からないと言ひますが、まことに暗い夜でございませう。島の裏側の断崖に——ここは普段でさえ人の来ない所なのでございませうが、闇を通して何か動いているのが、微かに見えるのでございませう。その二つの影は岩壁に刻まれたわずかな足場をはうように降り始めたのでございませう。やつとのことで下の岩場にたどりつくと、隠しておいたカヌーを引張り出し、それに乗り込むと、音をたてないようになつておき、しかし一杯漕ぎ出したのでございませう。二人は許されぬ恋の道に悩んだあげくに駆け落ちを決意したシマクタとシエナミオだったのでございませう。

翌朝、二人の出奔を知つた西長シマコトは泣いて頼む妻の手を振り切つて追跡隊を組織し、自ら一隊を率いて出発したのでございませう。

聞いてくれ そよ風よ 小鳥たちよ

俺は 妻を亡くした、

彼女は 俺とイワカを残したまま

遠い旅路へ 立ってしまった

彼女は死ぬ間際まで 俺を愛していた

否、違う 今も……いつまでも愛しているのだ

彼女は 可愛らしいことを言っている

俺を……俺を泣かせたのだ

坊主を このイワカを

立派な若者に してくれって

そう言って 目を閉じたんだ

彼女が 可愛そうな女だった

燃えさかる 炎の中で

雄哮の中で

彼女を見つけた

彼女は 真紅に輝いていた

俺達の恋は 許されなかった

だが 俺達の愛は 固かった

玲瓏な光を浴びて

俺達の愛は 深くなっていた

青白い月光を 浴びて

まわりの物は みな 冷たかった

短いことばだが

「イワカを かわいいイワカを

立派な 若者にする……」と

6、主権争い

ハイハイ。糟糠の妻シエナミオが死んでから、はや十三年の歳月が流れ去っていたのでございます。この十三年の間に、シマクタの故郷のアドリリチーからの逃亡移住や、その他の島からの移住が続き、この島の人口は一千人を突破していただのでございます。シマクタとイワカでございますか。先住者であり、血統がよくて、そのうえ頭が切れて、力のあるシマクタは酋長となり、この島においてモンロリオ族を構成するようになっていたのでございます。そしてイワカは、シエナミオの遺言どりの立派な若者に育てられ、十五と若いながらも、次代を担うものとして囑望されていたのでございます。彼らは多民族の寄せ集めながら一致団結して、平和で幸福でございます。……「何故、そんなにうまく統一がとれたか。」とおっしゃるのでございますか。それは、シマクタの指導力と申しますか、人格と申しますか、それが桁はずれに優れていたのでございます。いいえ、そればかりではないのでございます。この島（アオリテロア）に移住してきた者の大部分が、シマクタと同じように出奔してきた者でございました。もっとも、理由はいろいろあったのでございましょうが。同じような身の上の者ばかりですので、何かと団結できたのでございましょう。

波も……砂も……そして大人も……

俺達だけが 燃えていた

俺達の恋は 太陽よりも熱く紅かった

彼女も 俺の胸の中で 真紅になっていた

すべてが 青白く 輝いていた

だが、俺達だけは 金色だった

俺は、いつも 指ですいた

彼女の 流れる黒髪を

紅いランの花が 美しかった

青い空の……白い雲の下を

白波を踏立てて カヌーは滑った

緑の……火の神の島へ

黒い迫害から 逃れて

彼女が 不幸な女だった

慰めてやってくれ 彼女を

幸福く 短い一生を

笑ってくれ

妻を 幸福にできなかったこの俺を

可哀そうな 彼女は……もういない

せめて彼女に誓おう

彼らの平和な生活を破る一大事が勃発したのでございます。

戦い！戦いでございます。誰とうですって。人間ではなかったの

でございます。山と山——神と神の戦いが始まったのでござい

ます。（爺さんは、恐ろしいことじゃとでもいうかのように頭を二・三度

振り、あたりをはばかりるように小さな声で話し始めたのじゃよ。）

このアオリテロアの北部には四つの大きな山があったのでござい

ます。いいえ、北島ではないのでございます。なにしろアオリテロ

アが二つに分かれる以前のお話でございますので……。北部に

は、ルアベア山・トンガリロ山・ナラホエ山・タラナキ山の四山で

あり、それと同時に、おのおのの山にルアベア・トンガリロ・ナラ

ホエ・そしてタラナキの四人の神さまが住んでいらしたもので

ございます。ルアベア山は一番高く雄然とそびえ立っていたので

ございます。彼は王でございました。彼のすぐ北側にタラナキが

つきました。それからトンガリロ。そして、ナラホエは南側に。そ

中でタラナキのみが女性で、ほっそりと、まことに優美でござい

ました。全山のみならず人間からも恐れ、崇拝されていたルアベア

もルアベアを蹴落すチャンスを虎視眈々と狙っているトンガリロも、

タラナキを愛していたのでございます。ルアベアの統治のもとに、

全く平和なものに見えた北部もその内部はとうとうこのように一

触即発の危機をはらんでいたのでございます。南部はといいま

すと、問題にならない低い山ばかりで、北部——すなわちルアベ

テに服属していたのでございます。

唯一人の、美しい女性、それに南北に広がる広大な領土。男性と

して生まれたからには、これらを求めるのは当然のことございま

しょう。トンガリロが、これを求めたとして不思議なことがあるでございましょうか。まして、野心家のトンガリロのこととございませう。トンガリロは悩み続けたのでございませう。『俺は、ルアベアにこのまま牛耳られるのはどうにもがまんできない。昔から言うではないか——両雄不・立・並。不・入・虎穴・不・得・虎子。』と。しかし、もし失敗したら……。』トンガリロは悩み続けたのでございませう。

このようなトンガリロの気持を見抜いて、漁父之利をもちろんだのが、四山の中では一番小さく頂上が真平らで、いつも皆からからかわれているナラホエでございませう。彼は何かと良くないことを考え出し、トンガリロをおだてけしめたのでございませう。トンガリロはナラホエからけしめられる度に、用心して打消してはいったものの、自分の心が「打倒ルアベア」で埋まってゆくを感じないわけにはいかなかったでございませう。ナラホエは、トンガリロの否定が肯定であることを見抜きはくそえんだのでございませう。『馬鹿奴／見事俺さまの罠にかかったな。あいつとルアベアが戦えば、たとえ死ななかつたとしても両方ともおいぼれてしまふだろう。そうすれば……そうすれば全ての領土も、あの美しいタラナキも俺のものだ。そろそろけりをつけさせるか。』ある日ナラホエはトンガリロを呼んでこう言ったのでございませう。「黙って聞いてくれ。もし口を出したらやめるからな。……今日、ルアベアがタラナキに求婚したんだ。『ホーラ見ろ。思ったとおりだ。あいつの目はまるで獣の目だ。血走ってぎらぎらしてやがる。』すると彼女は、トンガリロ、君を好きだからと言ってきっぱり断ったのだ。」

とそれから……。『ホーク湾じゃよ。』（これらの湖は氷河湖であるが、あしからず。）」

タラナキには、彼らが突然に戦い始めた理由が、わからなかつたのでございませう。彼女は懸命に止めたのですが、彼女がそうすればそうするほど戦いは激しさを増して行きますので、とうとうさじを投げてしまったのでございませう。と同時に恐れたタラナキは逃げ出してしまったのでございませう。もし彼女がどちらかを愛していたら、逃げはしなかつたでございませう。しかし彼女が愛していたのは、全く別な「男」でございませう。

「逃げる」と言っても弱い女のこと、すぐに疲れてしまったのでございませう。だがタラナキは疲れて痛い足を引きずりながら歩き続けたのでございませう。彼女の歩いた跡がワンガイ川になったのでございませうが、下流——すなわち南に行くにしたがって、深く深くなっているのがお分かりのことと存じますが、それは彼女の疲れがだんだんと増し、足どりが重くなっていたことを示しているの

でございませう。やつのことで、北部と南部の間にある小さな湾の岸まで逃げてきたタラナキは、あまりにも疲れていたので岬に腰をおろし、一休みしていた時、まさにその時でございませう。今迄のそれとは全く比べものにならない程の大地震が襲ったのでございませう。大地は太波に弄あそばされる木の葉の如くに揺れ、アオリテロアが海中に引きつり込まれるのではないかと思われるほどでございませう。うっそうと生茂った大木までが断末魔の悲鳴をあげて、あたかもあたりの景色に永久の別れを告げるかのように、ゆっくりと、倒れてゆき

『やはり彼女は、俺を愛していたのか。畜生！ ルアベアの野郎。変なことをしやがったら唯じゃすまねえぞ。』「するど……」。するとルアベアは真赤になって怒り出し。もしお前が俺と結婚しなければ、トンガリロ、君の領地はもとより命まで取りあげると言ったんだ。それでタラナキは泣く泣く承諾してしまったのさ。」日頃からたきつけられ、逸る心を押えるのに苦勞していたトンガリロのこと、でたらめだと教えるものがあつたとして無現な相談、脱兎の如くトンガリロ山にもどり合戦の準備を整えるやいなや、ルアベアに襲いかかったのでございませう。驚いたのはルアベアのとった行動でございませう。この日は虫の居所が悪かつたのでございませうか。それとも日頃から野心家のトンガリロを苦々しく思っていたのでございませうか。気高く、穏やかで、名君の誉高いルアベアが挑戦に応じて戦い始めてしまったのでございませう。大地は揺れ、いたる所に地割ができ——もつとも、戦いの最中に踏まれて分らないなうなっていました。が、ありとあらゆる動物は皆南部へ逃げ出したのでございませう。（だから、以南のアオリは狩猟生活を送り、以北のアオリ族は農耕生活をしているのじゃよ。（四二参照））火を吹き出し、湯気をたて弾丸を飛ばしある時は煙幕を張り、がつぶり四つに組んで戦い続けたのでございませう。初めは不意を襲ったトンガリロのほうが優勢でございませうが、地力のあるルアベアがジリジリと盛り返してきたのでございませう。何しろひどい戦いでございませう。とうとう大陥没が三ヶ所、無数の小陥没、それに南島の南部にある大小無数の湖ができたのでございませう。（ネエ、お祖父ちゃん、その大陥没っていうのは、ホーラキ湾とフレンチ湾

ました。タラナキの眼前の小さな湾は、真白に泡立つ津波が去ったとき、何倍、否、何十倍もの大きな湾になっていたでございませう。そして、やがて襲ってきた二度目の大地震が去ったとき、わずかにつながっていた陸は跡形もなく消え去り、海峡ができていたのでございませう。（もう分かつたじゃろそう、タスマン湾と、captain Cookを記念して名付けられたクック海峡じゃよ。）

逃げ走った動悸が収まらないうちに襲った大地震のショックで、タラナキ山は腰を抜かし、動けなくなつてしまったのでございませう。（それでな、タラナキ山はタスマン湾に突き出た岬の上に、エグモント山と名付けられて残っているのじゃよ。いいか、お前たち。エグモントを驚かすんじゃないよ。何故って、また動き出すかもしれないからじゃよ。）

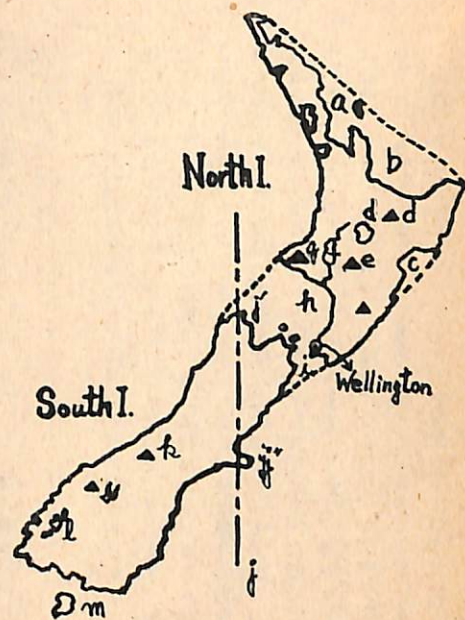
二度目の大地震が終わったときに、ルアベア山とトンガリロ山の五年にわたる長い戦いに終止符が打たれたのでございませう。何故か、でございませう。最初の地震は、戦いに敗れたトンガリロがバツタリ倒れたときのものでございませう。しかし、彼は渾身の力を振り絞り立ちあがると、最後の突進を試みたのでございませうが、力及ばず高々と持ちあげられ、ガツと叩きつけられてしまったのでございませう。これが第二回目の地震でございませう。この時、胸から下が粉々に砕けてしまったトンガリロ山は動けなくなり、ルアベア山の足元に見上げながら、怒り罵って爆発し続けていたのでございませう。

一方、あまにも重いトンガリロ山を地面に叩きつけたはずみに足を砕いてしまったルアベアは動けなくなつてしまい、去つてしまつ

たタラナキを忍んで悲嘆にくれていたのでございます。やがてルアベアの泪がタラナキ山のあつた跡に溜って、大きな湖ができたのでございます。(これがタワボー湖じゃよ。「それじゃあ、塩からい筈じゃないか。」「そうだよ。あの湖の水は塩からくないものな。」「やれやれ、これだから現代の子は……。神さまの泪は塩からくないのじゃよ。雨水を飲んでごらんよ、ちっとも塩からいことなんかないじゃろ。」「ふうん。そういうものかなア。」「さあ、おとなしく聞くんじゃ。)

さて、あの卑怯者のナラホエはどうなったのございましょうか彼は戦いが始まると、あまりのすさまじさに恐れをなし、こっそり南部に逃げ出したのございしますが、南部諸山の猛攻を浴びて重傷を負い、やつのことで最南端の海岸に逃げのびたのございしますが、そこも追われて、海中に逃れ、やっと見逃してもらうことができたのございします。老山——(侵蝕で頂上が平らになっていく)——のこととて、再生力が弱く、傷は悪化する一方。ついにあの世へ去ってしまったのございします。天網恢恢疎にして漏さずと申しますが、まったく良く言ったものでございしますな。(分かったそれはスチュワート島になったんでしょ。そのとうりじゃよ。爺さんが疲れてしまったのでその日は、ここまでで終ったのじゃ。)

「お祖父さん、この間の続きを聞かせてくださいよ。」いいともいいとも。ところで、どこまで話したか覚えてるかな。「あのねえ、爺さんが疲れて終ったとこまで。」「スチュワート島ができたところまでだよ。」「そうじゃったな。次の晩のことじゃった。月は煌々と光り輝き、あたり一面を青白く照らしていたのじゃ。爺さんは静かに月を眺めていたのじゃが、そのまゝの姿勢で話し始めたのじゃ。」「ルアベアとトンガリロの戦いが始まった時、モンロリオたちは、軽い気持ちで噂しあっていたのございします。」「またトンガリロ様の虫の居所が悪いようだな。」「それにルアベア様までが……。」「危い!!」それた火山弾が一人を殺したのでございします。こうなるとは躊躇している間にはございしません。シマクタ・イワカ父子に率いられたモンロリオ族一千数百名は、とるものもとあえずに、あわてふためいて南部へ移動を開始したのでございします。戦場が日ごとに変わるのございしますから、どこまで逃げたら安全なのか、全く分らないのございします。何十人、何百人ものモンロリオが逃げ遅れて踏みつぶされ、溶岩で焼かれ、カヌーに乗ってからも火山弾に打たれて死ぬなどして、南部に逃げのびたときには半分に減っていたのございします。南部へ逃げたからといって、危機が去ったわけではなかったのございします。皆さま御承知のとおり南部(南島)は北部(北島)に比べて寒うございしますし、夏が短いのでございします。それだけならまだ良かったのございしますが、ルアベアとトンガリロが噴出した火山灰が空をおおいつくし、日が照らない寒い日が続いたのでございします。冷害でございします。北部からやつのことで移植したタロイモ・ヤマイモも……南部でとれる作物さえ



※実線部分が現在のニュージーランドで、点線は陥没以前の陸を示す。

a ホーラキ湾
b フレンチ湾
c ホーク湾
d タワボー湖
e ルアベア山
f ワンガヌイ川
g エグモン山
h タスマン湾
i クック海峡
j 四・二の文化領域分割線
j' フェアフル岬
j'' パンクス半島
k クック山
l 三・⑥の湖
m スチュワート島

もほとんど枯れてしまったのございします。人々は寒さにうちふるえ、すきつ腹をかかえて天を仰いで嘆息し、日毎毎毎に祈り続けたのございします。時々くすんだ青空を拝むことができるのみで、あとはどんよりと厚い雲……と言うよりは厚い灰がたれ込めていたのでございします。

この島を逃亡する者が相繼ぎ、歯の歯をひくごとに日毎減ってゆくカヌーを見るたびに、シマクタは悲しそうに頭を振るばかりでございしました。しかし、若いイワカにはそれが我慢できなくなったのございします。彼は逃げ出す者を見つけたらに食ってかかり、何とかして引きとめようとしたのでございしましたが、とうてい無理なことだったのでございします。「父さんノ皆逃げていってしまふじゃありませんか。何故止めないのですか。」ある日、イワカは何の手も打たず黙って見ている父シマクタに、血相変えて食ってかかったのございします。「イワカ。お前には、あんなに一致団結していた仲間が、何故俺たちを見捨てて逃げていくのか不思議でならないのだろ。まだ分らないだろうがこれが人情というもののだよ。とくに、我々のような寄りあい所帯ではな。お前もおかた察していたことと思うが、俺達はいろいろな種族の寄せ集めなのだよ。俺が一番最初にこの島に渡ってきたので、いつの間にか酋長になっていたのだが……。だから皆が俺を見捨てたとて、何も怒ることはないのだよ。それに、このまゝの状態では皆飢死にしまふからな。」「でも……。……残念だけど仕方ないや。」「俺はシエナミオの墓があるこの島を去るわけにはいかないが、お前はスチーネフの後を追ったから行ってもいいよ。そうだなそれがいい。戦い

が終るまでスチーネフと一緒にいろよ。」「父さん、そりゃひどいよ。誰が父さん一人残して行けるかい。それに母さんのお墓もあるし。第一、あんな女、大嫌いだ。」「何故？昨日まではあんなに仲良く遊んでいたのに……」「嫌いだよ。」「ハハーン。さてはスチーネフが逃げ出したので怒っているんだな。そうだろう？あの娘は、昨日、俺の所へ来たよ。そして、――両親がどうしても残さないと言うので行かなければならませんが、イワカが悲しんだら誰よりもイワカを愛しています。忘れずに、必ず戻ってきます、とお伝え下さい。――と泣きながら言うのと、駆け去ってしまったのだよ。いい娘じゃないか。これでも嫌いなのか？」「嫌いです。母さんとの恋が許されず、こんなに遠くまで逃げてきて、ものすごい苦勞をかけたにもかかわらず、死ぬ瞬間までやさしく、従順だったといつも言っていたじゃないか。彼女の両親も、父さんも二人の仲を許してくれているのに、彼女行ってしまったじゃないか。」「それでは、イワカ。お前さっき何と言ったな。父さん一人を残して……、と言ったな。スチーネフもそれと同じ……」「だれどお母さんは……」。「俺と同じように両親を残してきたと言いたいのか。……お前には、否、だれにも話してないのだが……、母さんは……、シエナミオは捕虜の女だったのだよ。だれどすばらしい女だった。俺が初めて戦いに出た日……」シマクタは天をあおぎ目を閉じ、貴重な宝物を取り出すかのように、ぼつりぼつりと話し出したのでございませう。目には涙さえ浮べて。イワカは詳しいことを聞くのは初めてでございませうので、興味深げに聞いていたのでございませう。そして、話が終った時、彼の瞳は、感激の泪で潤んでいたでございませう。



再び前よりずっと大きな地震が襲いかかり、先刻の地震に耐え抜いた大木も倒れ始めたのでございませうが、その時、枝が摩擦され火を発し、見る見るうちにゴウゴウ音をたてて燃え広がっていったのでございませう。火に追われ、煙にまかれたありとあらゆる動物が逃げ場を求めて右往左往したのでございませう。シマクタとイワカは煙に面した洞穴に閉じ込められ、突入りの悪いイモをかじりながら、山火事が消え、北部に帰れる日を待ち続けました。二ヶ月が過ぎ去り、やっと近くの火が消えたのでございませうが、すぐには帰れないことが歴然となったのでございませう。それは、山火事が二人の住んでいた南島中部あたりからおこり、北へ燃え広がっていったからでございませう。その間二人は長い旅行に備えての食料を準備していたのでございませう。三ヶ月目に山火事は全ておさまったのでございませう。それから三ヶ月後の収獲期を迎えた時、二人分あるかなしのか突入りの悪いイモがとれたのでございませう。しかし、そのイモは、二人にとっては実に貴重なものでございませう。

収獲を終えたある日、まだ太陽がかなたの海から顔を出す前に、二人は足かけ6年もの長い間暮らした地を後にしたのでございませう。何日も何日も、あの貴重なイモの入った袋と、弓矢を肩にかけ、石槍をつえとして歩き続けたのでございませう。カヌーを失っていますので、歩き続けたのでございませう。驚いたことに、まだくすぶっている木が所々に見られたのでございませう。父子はいたわりながら、通れる所を求めてまわり道をしつつ北を目指し……まるで太陽を捕まえてでも行くかのように北へ北へと歩き続けたのでございませう。ありがたいことに、北へ進むにしたがって、なつかしい緑が目

います。

8、帰行

さしもの戦いも、ついに五年目に終ったのでございませう。モンロリオが待ちに待った平和が、アオリテリロアに戻ってきたのでございませう。しかし、この時島に残っていたのはたった二人――シマクタ、イワカ父子だけでございませう。丁度二人が煙でイモを掘っているときでございませう。グラグラッと大地が大きく揺れ、二人は地面に叩きつけられ、しばらくは起きあがることができなかつたのでございませう。四・六時中地震があるようなもので、地震には慣れっこになっていた筈の二人も、さすがに驚いたのでございませう。二人が小屋へ走り帰る途中、山腹から見た光景はすさまじいものでございませう。一抱もある大木がばたばた倒れ、海は真白に泡立ち、津波が退いてゆくところでもございませう。「父さん、波が高すぎないかい。」「そうだな。もしかすると……。」「急ごう。」二人は曲りくねった山道を駆け下りたのでございませうが、普段でさえ細い道は、大木が横たわり、人の腕ほどもある太いつたが蜘蛛の巣の如くたれさがって、二人の行く手をふさいでいたのでございませう。やっとの思いで部落の見える所までやってきた時、啞然として立ち止まざるを得なかつたのでございませう。かわいらしく、整然と並んでいたモンロリオ族の小屋はきれいになくなり、ただ小さなカヌーが一そう、ずっと内陸に打ちあげられているのみでございませう。「父さん、あのカヌーだけでも……」イワカの言葉が終らないうちに、

つくようになったのでございませう。そろそろイモばかりの食事に腹がはじめていまして、その上もっと重大なことは、イモが底をつきかけていたのでございませう。狩猟しようにも肝心の獣がいなかったのでございませうが、さすがに「緑」は生き物の親、緑が濃くなるにしたがって獣を見ることができるようになったのでございませう。何ヶ月ぶりか食べる肉のうまさ。ジュージューたれ落ちる油、芳しい香り、何とも言えない舌ざわり。ほかにこんなうまいものがあるだろうか、と思えたほどでございませう。骨までしゃぶりつくし、満腹になった二人はその場にゴロリと横になり、深い眠りに落ち入ったのでございませう。二人の夢は各々別のものではしたが楽しいものでございませう。シマクタは亡き妻シエナミオとの苦しく、はかなかつたけれども楽しかった生活を……。イワカは泣き泣き去ったという美少女スチーネフと語らいあつたなつかしい日々を……。二人が北へ向って出発した日から早くも一ヶ月半が過ぎ去っていったのでございませう。二人の歩みは牛歩の如くに遅かつたのでございませうが、やっとのことで潮騒が聞える所までやってきたのでございませう。狩をするために山の中を進んできましたので、久しぶりにきく潮騒は「天女の調べ」のように聞こえたのでございませう。「父さん、波の音がするよ。」「ほんとだ……。」波の音はいつ聞いてもいいなあ。「どこに出ると思えますか。」「あの湾じゃないかな。」「そうだといんですが……。」急ぎましょう。「待て待て。今日はここで遠い波の音を聞こうじゃないか。急いだとてじきに日も暮れることだし……。」

翌朝、二人は転がるようにして、潮騒のする方向に進んだのでございませう。

ございます。森がつきたとき二人は海に面した断崖に立っていたのでございます。「オイ、イワカ。あんなに大きな島がこの島の近くにあったかな。」「確かなかった筈ですが……。あれ、あの中央の山はルアベアではありませんか。そしてあれは、タラナキ山だ。」「まてよ。ルアベア山は分かるが、タラナキ山がそこにあるというのは。それにトンガリ山が見えないじゃないか。第一つながっている筈だ。」「もしかしたら、二度の地震でなくなったのでは……。」「ウーン、それしか考えられないな。」

父子はさっそくカヌーづくりに取りかかったのでございます。ただでさえ時間がかりますのに、それを二人だけでやるというのですから大変なことでございます。海岸からも近い倒木の手頃なものを選ぶと、必要な部分だけを残して焼き切り、中央部を少しくりぬき燃しながらくりぬいてゆく方法をとったのでございます。二人は眠る時間をも惜しんで、一心不乱にくりぬき続けました。二月ほどかかって、やっとのこと小さな、そして不格好なカヌーができあがったのでございます。

9、ビョーレの生い立ち

タラナキ山が逃げ出したとき、彼女は別の男を愛していた々と申しあげましたが、覚えていらっしやいますか。「ぼく覚えてるよ。」「黙って聞けよ。お話してもらえないぞ。」そう怒るなよまだ小さいんだから。良く覚えていたな。いい子じやいい子じや。サー静かに聞くんじやよ。」タラナキは、何か胸騒ぎがして、こゝこゝ



も歩かないうちに、ピタッとイワカの足が動かなくなったのでございます。「父さん、あそこにながら……。」「まさか……。」と言いながら、イワカの指示する方を見たシマクタも驚いたのでございます。イワカは、その女——まだ二十を出ていないで——そのうら若い女を抱き起したとき、イワカの胸に一人の女性の面影がくっきりと浮び、彼はまるで神がかりにかかったかのように、その女を揺さぶり続けたのでございます。「スチーネフ、父さん、スチーネフだよ。」二人とも、タラナキの術によって、その女がスチーネフであることに何の疑いも持たなかったものでございます。たとえシマクタが、彼女はスチーネフではないと気がついたとしても、彼自身とシエナミオが許されぬ恋の虜となつて島を飛び出した、とあつてみれば何も言わなかったでございましょう。タラナキはスチーネフになる代償として囁にされていたのでございます。一目見たときイワカの胸に、昔スチーネフに寄せた愛情が鮮やかに甦ってきたのでございます。二人はシマクタの暖かい眼差に見守られ、身をも焼き尽くさんばかりに激しく愛しあつたのでございます。そしてある晴れた朝、青空と鳥のさえずりと花の香につつまれたシエナミオの墓の前で、イワカは「両親」に祝福されて、スチーネフとの結婚式を挙げたのでございます。この時イワカは、男盛りの二十二でございました。イワカにとって……というよりはむしろ家族全体にとって、スチーネフが噓になつてしまったということは、全く問題にならないくらい些細なことだったのでございます。なぜなら、お互の思っていることは、すぐに理解することができましたから二人は誰にもじやまされることなく甘い、楽しい生活を送っていたのでございま

日落ち着かない日を送っていたのでございますが、ある日何気なく対岸を見たのでございます。そして「その男」、すなわちイワカを発見して、飛び上がらんばかりに喜んだのでございますが相手のイワカは彼女の心も知らないで、カヌーづくりに夢中になつていて、彼女の愛情をこめた精一杯のウイंकにも全く気付かなかったのでございます。タラナキはやきもきして、一日千秋の思いで待ち続けたのでございます。しかし、幸福でございました。

ある朝目覚めて 私は見つけた恋人のカヌーを……
躍動する筋肉を…… たくましい胸を……
私の胸は、激しく騒いだ にえたぎる湯のように
私は彼を手招いた、だが……だが？
そう、彼には見えないかもしれない
だが、彼はやってきた 私を抱くために……
口づけをするために……

離さない、たとえ死んでも離しはしない、誰が離すものか！

死んでも 彼を離しはしない

私の恋人よ、どこにも行かないで！

私のそばにいておくれ 私の命よ！

いつまでも、いつまでも 私を抱きしめて……

父子のカヌーは最狭部を渡ろうとしたにもかかわらず、広いタスマン湾を横ぎり、タラナキ山のふもとと海岸に漂着したのでございます。上陸した二人は不安げに歩き始めたのでございますが、数歩

す。そして、イワカが二十四のとき、かわいらしい女の子が生まれたのでございます。彼女はビョーレと名付けられ風のように野山を飛びまわり、蝶や小鳥たちと遊び戯れられていたのでございます。彼女には三つの——一つには年をとらないということ、二つには大きなならないということ、そして三つには自由に姿を消せるという不思議な力を持っていたのでございます。ビョーレは目の中に入れても痛くないほど可愛らしいのでございます。(爺さんはこう言う)と、急にあたりをキョロキョロ見まわしたのじやよ。しかし、ビョーレのいないのが分かると、悲しそうに黙りこくってしまったのじやよ。しばらくして気をとり直すとほつりほつり話し始めたのじや。やがて、シマクタがシエナミオの隣に埋葬されたのでございます。それから二十年ばかりたつて、イワカが……。あとを追うようにしてスチーネフことタラナキが……。これで、タラナキは心身ともに死んでしまったのでございます。しかし、残されたビョーレは、いつまでも変らず、遊び続けたのでございます。何十年？何百年？ 時が過ぎ去り、再び人間、すなわち我々モリオリがやってきたのでございます。人間を恋しがっていたビョーレは、すぐ我々と友達になったのでございます。そして、一番仲の良かったこの爺奴に話してくれたのでございます。(爺さんは、再びあたりを見まわしていたのじやが、急に立ちあがると——ビョーレや、待っておくれ。行かないでおくれ。——と叫びながら、よろよろ走って行ってしまったのじや。爺さんか。どこへ行ってしまったのかノ。その後誰も見た者はいないのじや……これでおしまいじや。サア、元気に遊んでおいで。)

※朱を守りて免を待つ——融通がきかないこと。古い習慣を守って時勢に應ずることができないこと。

※糟糠の妻——苦勞をともにした妻

※漁父之利——両者が夢中になっている間に、第三者が利益を独占すること、

※天網恢恢疎にして漏さず——天は決して悪人を見さない。

x x x x x

『書き終つて』

どうやらこうやらこの小説らしきものを書き終えることができ、ホッとした。時間的なロスは受験期を間近に控えている私にとつてはあまりにも大きいものであるが、それにもまして大きいのは忘却していた漢字、熟語の多さを思い知らされたこと。そしてそれら把握したこと、考えたことを短かくまとめる要領を身につけた(う)こと、などである。これを書いている最中から、「この作品は、高校生を対象とするには御伽話的で幼稚であり、童話とするには内容的に不向きな箇所がかなりあるが、もしどちらかに書き改めて、放送劇が何かにしたら面白いじゃないかな。」などと思つてゐるのだが、……どんなものだろうか。

である。と言つても無闇に批難めいたり、輕蔑したりすることは勿論のことしない。三之助こそ氣兼ね無用の悠長な世界を求めて、此の社会へ足をつつこんだからである。

これ迄に三之助の知り得た乞食社会には、全く相反する二つの要素が存在した。一つは、勿論三之助の求めて来た放逸な利那、利那の生活である。——乞食社会の常識では、此れは頹廢的なものへ通ずるのであるが。そして他の一つは人間が二人以上共同生活する時に生じる嫉妬と杞憂に満ちた生存競争である。——この災厄はどんな社会でも殘忍な形相となる。

乞食とは言つても食わねば生きて行けない以上後者の性格を帯びざるを得ないこと——多分この社会が最も顯著である——は三之助にも既知である。しかし少なくとも並の人間よりは前者的性格を有すると思つたからこそ、こうして三之助は「その日暮らし」の乞食稼業を続けているのである。

三之助の娑婆はもっぱら御徒町界限である。此の界限は、巾一間の道路へ朽ち果てて今にも落ちそうな軒が競つて突き出されていて、路地はこと更狭く感ぜられる。「ギッシリ」つたるた雜貨と卷き上がる塵介はまさに五味呈し人語の騒然たる「ザワメキ」も加わつていやが上にもそこを通る人に不潔感と苛立たしさを与えるのがここの雰囲気である。こんな人間臭い——俗っぽい——「芳香」をかきながら三之助はセカセカとした「下界」を尻目にこの狭苦しい横丁を雄々と歩くことがこの上もなく悦に入つていた。と言つてもその人波を輕蔑を以て見下すわけではない。むしろ芸術家としてそれ



一人の乞食

三年 河田 正人

三之助と言へば乞食仲間でも珍奇な変り種である。それだけに、三之助は常に或る茫漠たる自尊心を持つていた。三之助にとって此の自尊心は生活そのものをも意味していた。従つて自尊心の毀損に策しても、三之助には「垢の他人」との付合いには余り乗り気がなかった。三之助にこうした余裕が残されているのは、三之助に自分さえ食つて行けばいいといった氣楽な安堵感があるからである。元來、三之助は乞食になるべくして乞食になった訳ではない。いわば「志願乞食」という恵まれた肩書きの持主である。結局そんなところからも、三之助には裸乞食達と敷居を共にすることができないの

を味わい楽しんでいと表現した方がふさわしいかもしれない。

今日は暮れも最後の日である。三之助は例に違わず、今日もあの狭い路地で乞食として、当然ありつくべき糧を得る為に、上野駅から都電沿いに歩いてゐた。誰もが何か忙しさを感ずる大晦日を、一抹の焦りもなくむしろそれを楽しむかのように歩く三之助に対し、すれ違う人影は異端者としての嫌悪を感じとつていた。

冬の日はずっとふりと暮れ、寒空には冬の星座がくつきりと輪部を輝かしている。そして星の冷光は自然の偉大と人間の狹隘を漂よわせていた。街路には人影もなく、時にまタイヤの吸い着く様な音が冷たい舗道に響いた。

三之助は車坂を一気に下り、三丁目の十字路を右へ曲つた。そこから広小路に向つては未だ大晦日の忙しさが残つていた。三之助は一瞬それを確認すると俄に心の儘りを憶えた。けれども三之助を待つてゐる人など、そこにゐる訳はない。むしろ——來やがたら水をぶっかけてやる——と思つてゐる人のいる確率の方が高いと三之助自身さえも思つてゐた。

三之助にとつて下げすみの視線を投げつけられることは全く困惑の対称とならなかつた。むしろ都合が良かったのでさえある。と言ふのはそれだけ三之助には他人の醜態を客観的に見る機会が与えられることになりその当然の結果として三之助は乞食稼業に対しますます誇りを持つようになるからである。そんな訳でかえつて涙もろい同情の方が三之助にとつては厄介だった。それは三之助の乞食としての自信を失わせるばかりでなく善良な相手の感情まで痛める結

果になるからである。

まはゆい程のネオンに視界を錯乱されながらも三之助は吸いつくような足どりでガードの前まで来た。そのガードの左側一帯が三之助の娑婆、すなわち御徒町の却売街である。憎さを込めた三之助の目にはいつも人波が写った。すぐに、しかしすぐにいつもと違った何かを三之助は感じた。三之助は一時の躊躇を余儀なくされた。三百六十五日の残り数時間までも「アクセク」と働く人達、その人達の労働感が怠情に浸った三之助を叱咤したからである。三之助は労働による優越感というものをこれまで全く味わったことがなかった。三之助の知っている労働とは金を稼ぐことに他ならなかったのである。それだけに、今日の人波に漂う忙しさの中の充実感三之助の頑な心を啞然とさせた訳である。

それを認めながらも直きに、普段の横柄な表情が三之助に甦えて来た。そして例のごとく例のようにして、三之助は雄々として、その横丁へ入っていった。

波間に漂うクラゲは全く飽きること知らない。三之助は一人干渉的な態度で横丁を幾度か往復した。忙しい人波を見ては乞食の自分を喜び、ついでに晩飯までねらっている三之助の足は容易には止まりそうもなかった。

今日の三之助はいつもより幾分か慎重に人波の間から店先へ視線送っていた。というのは明日からの三日間、三之助にはあらゆる意味の禁断症状が待っていたからである。これは三之助の「乞食稼業」にとって大きな試練であった。この三日間というものの、目前の



地面にまで染透っている。更にミカンの上には崩れて湿気を帯びたビスケットの粉がかぶざされていた。じつと睨んだ視線を辿るようにして、三之助は意地汚しそれに手をつこんだ。大方のビスケットも密柑の汁でグニャリとして、そぼろのようになっていた。こぼれながら三之助は密柑をつかもうとした。鋭くのびて垢のつまった自分の爪にビスケットの粉が痛い程つまるのを三之助は感じた。片腕を膝近くまでつこんだ三之助はやつとのことで二つ程つまみ出すことができた。しかし努力の割にはミカンは美味しくなかった。むしろ三之助のすきつ腹の胃液分泌を刺激したようなもので、かえって空腹感が三之助に迫ってきた。三之助は報いられない努力に打ちのめされながら、油気のない爪を噛んでつぶやいた。――爪の垢の方がまだ……。腹の底から力の抜けていった三之助は、いつの間にか元のガードの所へ押し戻されていた。もう「流し」をする気力の無い三之助は終にベッタリとガードの下へ坐り込んでしまった。時たま、上を通る山手線が三之助の体中をゆさ振った。その度に三之助の自尊心は崩れていった。残された気力で三之助は必死に自尊心の回復を試みた。しかしいくら頑張っても現実の飢えと寒さは克服できなかった。やっぱり乞食は乞食である。今迄頭の中こね回っていたことが急に甘い一時の陶酔であったように思われて来た。

でも、三之助にはもう、それを考えることさえできなかった。三之助にはかつてこんな苦しい試練に二度ばかり出合ったことがある。そして今思っているようなことも幾度か考えた。しかし三之助は常にその矛盾の苦しみを三之助の最も嫌う「金」で切り抜けて

人波が各々愉快に楽しく過すことは自明であった。しかし今、何も得なければ三之助にとって自明なことは「寒さ」と「飢え」だった。三之助は今ここで三分の糧をしたためなければならなかった。いつもはたやすく恵んでくれるお得意も今日は三之助に糧を恵むには余りにも多忙であった。それに今日はそれをたのむ機会さえ見つけられないように三之助には思えた。

こうして人波のまった中三之助は全く無視されていることに気づき始めた。それでも尚、三之助は四周の状況を芸術家として見つめようとした。しかし時が経つにつれて一向に糧にありつけない自分を認めるとさすがの三之助も焦り始め、つまっては終に空腹を感じるまでに致った。三之助は「ギョロツ」とした細長い目をむき出して最後の「流し」を決断した。三之助は、自分の最も嫌う三之助にならおうとした。

三之助は今朝から何も腹につめこんでいなかった。山本町のビタミン供給源―青果市場―からも今日に限って何もしたためてはいなかった。結び果てたズックからは泥が固まってむしろ茶色っぽくなった足指が二本もはみ出していた。三之助はそこから直接に厳冬のこおりつく様な冷気を感じた。それでも横丁の入口から三間程のところまで、三之助の重い足はやつとのことで止まることができた。江戸時代の長屋の壁をぶちぬいて改造したような、しかし銀座あたりの店よりはよっぽど華美で外国品のつまった店と店、その境の三尺程のドブネズミの死骸のころがっていきそうな陰気臭い路地に三之助は密柑の箱を見つけたのである。腐った密柑の汁はボール紙を浸して



いた。それは麻薬を最も憎む麻薬患者が麻薬を打たねばならないようなものだった。そして自分のあらゆる恥を全て自分なりに上品に解釈してきたのである。又、当時志願乞食の三之助には金目のものが残っていた。しかし、今となっては何一つ残っていないやしかった。終に三之助は考えた。

――自分の乞食としての変り種は自分がみすばらしい乞食であるということを認めたくないが為に考えた自分の逃げ道かもしれない

横丁では相も変らず人波がごったがえしている。いつもは客観的にむしろ吟味するように聞くそのザワメキも、今の三之助には腹立たしいもの以外の何物でもなかった。

厳冬の針をさすような寒さに、自分一人が襲われたように三之助は朦朧とした意識の中で感じた。

……………

チャリン

その時十円銅貨が一枚、凍りついた舗道に鋭い音を響かせて、三之助の前のアスファルトをころがった。ビクッ！

心臓をつき刺された様に三之助は反射的に頭をもたげた。見るからの髭ぶらの酔漢がフラフラとした足どりで三之助の前を通りすぎていった。まるで太りきった体の押し分ける冷気にはホンノリとしたアルコールの芳香がまじっていた。

三之助は見つめた。ジョツと一枚の銅貨を見つめた。

時折、低いガードの天井からゴウゴウたる山手の音が三之助のしかなかった。

三之助はどこをどう来たのか憶えてない。なにしろ目の前にはまっ黒の不忍池が広がっていた。三之助は物怪にひかれる様にして池の端をゆっくりとしかも不確な足どりで歩いていった。

酔漢にまで銅貨を投げつけられた三之助——これは、まだむしろよかった——そして酔漢にまで一言も謀らせなかった三之助、三之助はもう人から嫌味をさえずられなくなっていたのである。終にあらゆる人間から同情しか与えられなくなってしまった三之助には昨日の三之助が羨ましかった。人から軽蔑される自分が。立ち止まって三之助はジッと池の沖の方を見つめた。そして物思いに沈んだ。……

ゴウオーン……グオーン

三之助は茫漠たる世界から意に目覚めた。叙夜の鐘である。叙夜の鐘は冷たい星空と大地との間を静かに、しかし力強く流れて行った。

すると、三之助は想い出したように形だけの古オーバーのポケットからカサカサにヒビの入った右手を持ち出した。そしてゆっくりと拳を開いた。

十円銅貨が一枚びったりと手の平にくっついていて、三之助は意味深かげに銅貨を見下してジッと目をつぶった。
ゴウオーン……グオーン……鐘は鳴りつづけた。



で舞っていた。向うの方に山小屋らしい家がぼつんと建っていた。

その窓から暖かそうな明りが漏れていた。小屋は、大分古いらしく所々木が腐り落ちていて、木辺が割れて中の木膚が見えていた。時々木の窓が風に吹かれて「ギーバタン」「ギーバタン」と鳴っていた。と、その時、一人の男が右足を心持ち引きずる様にして、その小屋に近付いた。男は十七・八の背の高い男で、学生と言う感じだった。ダスターコートと襟を立て、寒そうにしてドアを叩いた。

「トントン」「トントン」

しかし、風の音に吹き消されて聞えないのか、中からは返事はなかった。「聞かないのかな」と男は思い、荒れた唇をなめながら、今度はさっきより強くドアを叩いた。「ドンドン・ドンドン」

今度は中から返事がして、ドアが開いた。中からやはり彼と同じ位の年をした色の白い美しい女が、不審そうな顔を出して言った。

「一体どうなさったのですか？」

こんな山の中に夜遅く。」

男は風に吹かれてぼさぼさになった髪を、手でかき上げながら

「実はこの山の中で道に迷ってしまい、途方に暮れていたからこの小屋を見つけたんです。一晩で結構ですから泊めて下さい。お願いします。」と頭を下げて言った。風は容赦なく小屋の中に入り込んだ。彼女は気の毒そうな顔をして、「あらそうでしたの。ええ、いいですとも、外は寒いですから、さ早く中へお入りなさい。」と言った。男は中へ入るとすぐドアを閉めた。「すみません。助かります。本当にどうも有難うございます。」

と男は言いながら、ドアの所に立っていた。暖炉には、暖かそうな

四十九ノ五十ノ五十一ノ……三之助はとじたまぶたを睨んで数えた……
九十ノ……九十八ノ九十九ノ……

三之助は力一杯池に向って投げた。十円銅貨を。グオーンノ百番の音と共に銅貨は池の暗黒の中へ吸い込まれていった。……

其の日以来、三之助は上野にも御徒町にも現われなかった。どこでどうなったのか誰も知らない。

ただ知られているのはこんな乞食がいたということだけである。

「雪は知っていた」

二年 板倉俊彦

ある寒い冬の夜の事だった。ここは町から十キロほど入った山の奥である。ここから一キロ程離れた所には、炭焼き小屋がいくつも固まってあったが、ここら辺はほとんど、人家らしい物はなかった。空はどんより曇っていたが、つい先っきまではほんの少し、星が出ていた。時々その星が、「チカッ」「チカッ」と光るのが微かに見えた。しかし今はもう、空は真黒なベールを被っていた。その空から冷たい風がビュービューと辺りを吹き回っていた。時々風と一語に何か、白い物が空から落ちて来た。ほとんど葉が落ちてしまっている木が、まるで人間か何かの様にたくさん立つ立っていた。その木にカサカサと音をたてながら木の葉がぶつかったり絡みついたりし



火が静かに燃えていた。

「外は寒かったでしょう。さ早く暖炉にお寄りなさい。今私が何か暖い物を作って来て上げますから。」とにっこり笑うと奥の方へ入って行った。その笑い顔がとても魅力的だった。男はコートを脱いで椅子に掛けると、それに腰掛けて暖炉に体を近付けた。冷えきった体がだんだんと暖くなって行くのが感じられた。と、奥の方から「寒かったらそこに薪がありますから、適当に加えて下さい。」と声がした。彼はそこに束ねてあった薪を三本程取ると暖炉の中に入れた。薪はパチパチ音を立てながら燃え上った。彼はそれに手を近付けたが、辺りを見回した。部屋の中には、ほとんど家財道具らしい物は何もなかった。ただ、隅に古びた木製のベットが一つと窓のそばの柱には、旧式の電話が付いてあるだけだった。やがて、彼女は暖かそうなコーヒーとおいしそうなサンドウィッチを持ってやって来た。「これ、私の作ったコーヒーとサンドウィッチですけど、どうぞ召し上って下さい。」

と言って彼に差し出した。コーヒーカップからは暖かそうな湯気が立っていた。彼は「本当に御心配かけてすみません。それではご馳走になるかな。」と彼は言いながらコーヒーを一口飲んだ。彼の舌は、寒さのためにしびれていて味はよくわからなかったが、とてももうまい様な気がした。

「これはうまい。君はコーヒーを入れるのが上手ですね。」

と言った。彼女は少しはすがしそうな顔をした。でも嬉しそうに下を向きながら言った。

「どうも有難う。お気に召してよかったわ。」

「ずい分純情な人だな。」と彼は心の中で思った。いつしか外では、先っきまでの強風はやんでいて、雪が悪魔の様に恐ろしく、また重々しく、天使の様にやさしく、白く、美しく、黙って静かに降っていた。彼女は顔を上げるとげげんな顔をして聞いた。

「一体あなたはどうしたのですか？夜にこんな山奥に一人で？」

彼はコップに残っているコーヒをぐっと一息に飲んで、目を窓の外に遠くへ移しながら言った。

「実は僕はこの山の向うの町の高校生ですが、今日は日曜日のので、友達と五人で炭焼小屋を見学しに来たんです。そして五人で一緒に見学しに行っても仕様がないう訳で別々に行動する事になったんです。ところが四時頃だったかな。」

と彼は腕時計を見ながら言った。「それからどうしたのですか。」と彼女は興味深そうに聞いた。彼はサンドウィッチを食べながら話を続けた。

「ええ、その時突然霧がかかり始めて来たんです。これはまずいと思って、そうだな、どの位歩き回っていたかな、そのうち霧が晴れて来て辺りが見えて来ると、全然見た事のない所へ来てしまっていたんです。辺りはだんだんと暗くなり始めて来ているので何度か木の幹にけつまずきましたよ。」

と彼は右足を撫でた。

「そうしてだんだん歩いて行く内に辺りは真暗になってしまおうし、冷たい風が吹き始めて本当に心細くなって、一時はこの山の中で凍え死ぬんじゃないかとさえ思ったけど、そのうちこの小屋の明りが見えた、とまあこう言う訳ですよ。いやあ、この小屋の明りを見

けた時は本当に嬉しかったですよ。」と言って、彼は残った一枚のサンドウィッチをほおばった。

「まあそうでしたの。それは大変でしたわね。」

と彼女もほっとした様に言った。と、その時電話のベルがリンリンと鳴った。彼は自分が出ると言って、椅子から立ち上った。

彼は窓のそばに行き、ふと外を見た。外は一面の銀世界だった。背の高い彼は、自分の顔の前にある受話器をおもむろに取った。

「もしもし、そちら山小屋ですか。」

と聞き取りにくい男の声がした。「ええそうですけど、何か用ですか。」

「実は今日昼頃、町の病院から精神病患者が一人逃げだしたので、それがどうやら山の方へ向ったらしいのです。その患者は病院から盗んだメスを持って居ますから充分注意して下さい。」

「ええ！そ、それは本当ですか？それは大変だ。」

彼は一瞬顔色を変えてそう言った。

「所で、その患者はどういう人なのですか？」

彼は興奮して聞いた。

「その患者と言うのは……ガーワー・ブーバー・ワーガー」

「もしもし、電話が聞きとりにくいんですけれど、もしもし。」彼はせき込んで言った。

「ブーバー・ガーワー。それでは、充分気をつけて下ささい、ガチャン。」

「ああもしもし、あのー何んだ切れてまったのか」と彼は残念そうに静かに受話器を置いた。彼の顔は、幾分青ざめていた。彼女は心

配そうに聞いた。

「一体どうしましたの？」

「実は今日、町の病院から精神病患者が一人逃げだして、この山に逃げ込んだらしいと言うのです。それがメスを持っているんだって。」

「えっまあ!!ま、まさかあなたが……、」

と彼女は驚いて彼の顔を見つめながら一歩後ずさりした。彼は笑いながら

「いやー、とんでもない。僕は違いますよ。第一考えてもごらんなさい。もし僕がそうだとしたら、君に今の電話の内容を話す訳がないだらう。」と彼は言って「アッハハハ」と笑った。

彼女は幾分和らいだ顔をして言った。

「それもそうね、ご免なさい。つい疑ったりして。でも、あんまり恐かったから。」

と彼は頭を下げた。

「いや構わないですよ。だれだってこう言う場合にはそう思うかも知れませんか。」

と言った。

「でもここにやるといけないから一応ドアの鍵はかけておいた方がいいですよ。」

と彼はあらたまって言った。

「えっそうしますわ。」

と彼女は言って心持恐ろしげな表情をしてドアの所へ行って、しっかりと鍵をかけた。

「これならもう大丈夫ですよ。」と彼女に顔を向けて

「ところで君はどうしてこんな所に一人で住んでいるんですか？」

彼女はちょっと当惑している様だった。

「実は私は毎年この時期になるとおじいちゃんと一緒にこの小屋に来て、近くに居る炭焼のおじいさん達にお茶を出したり、時には食事を作ったりしてやるのです。いつもわたしだけ先に来て、この小屋の掃除をしておじいちゃんが後から来るのを待っているんです。」と彼は言った。

彼は「道理で家財道具がないんだな」と思った。そして言った、

「でもこんな所で一人でいるなんて寂しくありませんか？」

「えっ最初のうちは恐いとか、寂しいとか思いましたけど、今はもう慣れてしまいましたわ。それに明日にでもやさしいおじいちゃん来るんですよ。」

と彼女はおじいさんを待っている様な目つきをして言った。

「君ってずい分甘えん坊なんだなあ」と彼は笑いながら言った。

「あらいやだ、そんな事ないわ。」ときまわり悪そうに言って彼女も笑い出した。二人とも一緒に言って「アッハハハ」と笑った。

「おお、いたい!!」突然彼は言った。

「いやどうも笑った拍子に先っきけつまずいて転んだ時にできた傷が痛みだしてしまった。」

と彼は言いながら顔をしかめた。彼女は心配そうに彼の顔を見つながら

傷口が熱伝がむといけませんわ熱む。私が消毒して上げますわ」と奥の方へ行って、すぐ小さな箱を持ってやって来た。

「どれ、ちょっと見せて御覧なさい。」

と彼女は言つて彼のズボンを上に引き上げようとした。

「いやいいんですよ。」

彼は本心では、してもらいたかったがすぐ受け入れ様とはしないで、ちょっと照れくさそうにしながら言つた。

「でもいけませわ。別に照れなくてもいいのよ。」と言つて彼女はズボンを引き上げた。

彼の足には幾つかの小さな傷があった。皆血が赤く固つて、いたいたしげだった。彼女は消毒液を取り出すと彼の足に塗つた。ちょっとしみていたかった。

「少しはしみるかも知れませんが、我慢して。」

と彼女は言つて今度は赤チンを塗り始めた。彼はそうするのをじつと見つめていた。いつしか昔、母にこんな事をしてもらつた覚えがあると思つた。かがみ込んでゐる彼女の後姿は美しかった。

「君って、ずい分やさしいんだね。」

と彼は力をこめて言つた。彼女ははずかしそうに奥の方へ走つて行つた。中々こつちへ来ないので、彼は「どうしたのかな？」と思つて行つて見ると、彼女は、しくしく泣いていた。

「一体どうしたの」彼はそう言つて彼女の肩に手を掛けた。肩がびくびく震えていた。

「だつてわたし今まで、あんな事言われた事ないんですよ。」

と言つて彼女は彼の胸の中に泣きくずれた。彼は彼女の髪の毛をそつと撫でながら、やさしく抱きしめた。二人はしばらくそうしてゐてそこに立っていた。やがて彼女は急にきまり悪そうに彼の胸から

離れた。

「ご免なさい。泣いたりなんかして。でも、自然に涙が出て来てしまつたの。」

彼女は泣き濡れた瞳を外の方に向けながら言つた。

「それじゃこつちを向いてご覧。涙を拭いて上げるから。」

と彼は言つて、ハンケチを取り出すと、彼女のほほに光っている二本の線をやさしく拭いてやつた。彼女は目をつむりながら、彼のするがままになつてゐた。その顔はあまりにも美しく可愛らしく、あどけなかつた。彼は思わず力強く抱きしめたい衝動にかられた。が、そうする勇氣はなかつた。

「さあ拭いてやつたよ。」

と彼が言ふと彼女は「どうも有難う」と言つてはるかそうに目をそらした。

すると、その時である。突然ドアを激しく叩く音がした。二人は一瞬緊張して顔を見合わせた。

「まさか逃げだした患者じゃないでしょうね！」

彼女は恐ろしうに彼の腕を握つて言つた。彼は黙つたまま、じつと外に聞き耳を立ててゐた。するとまたドアが激しく鳴つた。

「ドンドン、ドンドン、今晩わ。ドン、ドン、ドン」

と低い男の音がした。彼は不安そうな面持ちをして彼女を見た。彼女は恐ろしうにぶるぶる震えながら、彼の腕を強くつかんでゐた。

「今晩わ。警察の者ですが開けて下さい。ドンドン」

とまた外で声がした。

「ドンドンドン。今晩わ。」

また外で声がした。二人は暖炉のそばで、しばらく無言のままじつとしてゐた。どの位経つたであろうか、辺りは再び元の静けさを取り戻した。

「やつとどこかへ行つたらしいね。」

と彼はほつとした様に彼女の手を離すと、椅子から立ち上つて外を見た。雪は、悪魔の様に恐ろしくまた重々しく、天使の様にやさしく、美しく、白く、無言のまま静かに降り続いてゐた。

「もうだれもないよ。」

と彼は言つて彼女を見た。彼女はよほど恐かつたらしく、今は本当に安心した様子で、じつと暖炉の火を見つめてゐた。

「いや、しかし驚いたな。君が止めてくれなきゃ、もう少しの所でドアを開ける所だったよ。そうしたらどうなつていたか判らないね。」

と彼は先っきの事を思い出して、窓の曇りを手で拭きながら言つた。そして

「本当に止めてくれて、どうも有難う。」

と言つて窓から離れると、彼女の横に座つた。

「本当に恐かつたわ。一時はどうなる事かと思つたわ。でも開けないで本当によかつたわ。」

と彼女は思い出してぞつとしてゐる様子で小さな声で言つた。その声が何かを含んでいる様な感じがした。

「でも、もしかしたらまた引き返して来るかもしれないから、氣をつけなくちゃ。」

と彼女は言った。

「うん。でも今度は誰が来ても絶対開けないよ。」

と彼女を安心させる風に彼は言った。

「それじゃ、絶対開けないでね。」彼女は念を押す様にして彼の方を見た。

「さあそろそろ寝なきゃ。ああ暖炉の火が消えそう。薪を加えなくちゃ。」

と彼は言いつて辺りを見回した。だがもう薪はなかった。

「薪はどこにあるんだい。」

と彼は聞いた。

「あつけない!!薪は外よ。」

と彼女は大きな声で叫んだ。

「それじゃ取って来なくちゃ。」

と彼は外へ出ようとした。すると「いけないわ。先つき約束したでしよう。もうこの戸を開けないで。」

と彼女はドアの前に立ちふさがって言った。

「でも、そんな事言つたつてこのままだったら二人とも寒さで凍え死んでしまうよ。大丈夫だよ、もう誰もいないから。」

と彼は窓から外を見回しながら言った。しかし彼女はドアの前を動かさなかった。彼は困った様にして「フーン」とうなった。そして、あっ!そう。それじゃ僕が外へ出ると同時に、君がす早くドアを締めて鍵をかけてしまえばいいよ。ねえ。」

と彼は真面目な顔つきをして言った。

「でもそうしたら私は大丈夫でもあなたが……」

うに聞いた。

「当り前じゃないか、元来ちゃんと僕が君の目の前に居るじゃないか。アッハハハハ」と彼は笑つて言った。「ああそうだね。ハハハハハ」と彼女も笑い出した。二人は一緒に笑つた。しかし彼は、先つきの「ガサツ」と言う物音が何んだらうかと少し気になった。やつと暖炉の薪が燃えて来た。「夜も更けて来た様だから、そろそろ寝よう。僕はこの椅子で寝るから」

彼は言うのとつかつとそれに腰を降ろした。すると

「私もこの椅子で寝るわ。向うのベッドで寝るのは何だか怖いわ。」

と彼女は言つて、彼の隣の椅子に座った。彼はちよつとあわてて椅子から立ち上つて二つの椅子の間隔をあけた。暖炉の火がバチバチ音をたてて燃えていた。「それじゃおやすみ」「おやすみなさい」彼は電気を消した。暖炉の火のおかげで電気を消しても辺りは明るかった。辺りは物音は全然しなかった。ただ、薪が「バチバチ」と音を出していただけだった。彼はやがて深い眠りに陥つていった。しかし彼は一人で広大な砂漠の真中に、肩から水筒をかけてぼつんと立たずんでいた。彼は回りを見回した。しかし、そこにはどこまでも茶色の砂地とどこまでも高くまた真青な空間しかなかった。その空間には赤褐色をした光球が銀白色の煙を出して燃えていた。とても暑かった。足元が「ちりちり」と音をたてている。顔・胸・背中・腹・手足総て汗が、なめくじの様に、どこと構わず這いずり回つていた。彼は手で首の汗を拭いながら歩き出した。どこまでもどこまでも歩き続けた。生きるためには歩かねばならなかった。しか

と彼女は心配そうに言った。

「いや僕は絶対大丈夫だよ。」

と彼は言つて彼女の肩を叩くと、素早く外へ出た。彼女はすぐにドアを閉じた。何事も起らなかった。しかし彼はそうは言つたものの、やはり恐かった。辺りを見回すと先つき来た男の物らしい足跡が点々と向うの方まで続いてあった。

「やつぱり行つてしまつたんだな」と彼は思い、膝まで積つた雪をかきわけて、薪の置いてある所へ行つた。一束を手にかかえてか引き返そうとした時、後で「ガサガサツ」と言う物音がした。彼はぎくりとした。背中に冷水をかけられた様にぞつとして、そおつと後を振り返つた。しかし、そこには人影らしい者は何もなかった。ただたくさんの木が黙つてつ立つて立っているだけだった。「何んだ。誰もいないじゃないか。気のせいかな。」

彼はほつとした様に足を進めて、ドアに近付いた。「おい君開けてくれ」少し間をおいてドアが開いた。彼女が心配そうな顔を立て立っていた。「さあ早く中へ入つて。」と言つてボタンとドアを締めた。「ああ寒かった。」と彼は服についた雪を払いながら言つて、薪を暖炉に投げ入れた。しかし湿っているせいか、薪はすぐには燃え出さなかった。

「寒かつたでしよう。さつきのコーヒの残りがあから召し上つて。」

と彼女はコップを差し出した。彼は一気に飲んで「ああおいしい」と言つてコップを床におくと手で薪をつついた。

「ずい分時間がかかつたわね。誰も居なかつた?」と彼女は不審そ

し幾ら進んでも進んでも、彼の回りには茶色と青色しかなかった。彼は全くの孤独だった。しかし彼は脇見もくれずに、ただ歩き続けた。灼熱の太陽から、ざらざらした光線が降り注いでいた。その光線が何もかも焼き尽すかの様に思われた。彼は歩いた歩き続けた。彼の頭の中にはただ歩く事しかなかった。やがて、彼は立ち止ると狂つた様に肩から水筒を取りはずして水をガブガブ飲んだ。ザア!と水がこぼれ落ちた。しかし、「ポチュ」と音がして水蒸気となつて消えてしまった。やがて、彼はまた歩き出した。足は棒の様になり、足の裏は砂に焼かれもう皮膚の感触はしなかった。だからいくら歩いても彼は平気だった。どの位歩いただらうか、何時間、何日、いや何年か、彼には判らなかつた。それほど長い時間だった。ふと遙か向うの茶色と青色の境目に黒い点がぼつんと見えて来た。彼は狂つた様に、それに向つて歩速を早めた。やがて、黒い点の一つの黒い固まりとなり、また一つの型あるものとなつて、大きくなつて来た。やがて、一つの街らしい物が彼の目前へ近付いて来た。彼は、我を忘れて駆け出した。そして古びた街に着いた。れんが造りの家が二十軒程固まつてあった。どれもこれも皆、レンガは崩れ落ち、壁も土が落ちていた。物音は何一つしなかった。しかし彼は「きつと誰かが居るにちがいない」と確信していた。と言うより確信せずにはいられなかった。しかし、幾ら歩き回つても辺りはただ静まりかえり、人の居る気配は全然なかった。時々、看板が風に吹かれて「ガンガン」と鳴る音が辺りの静けさを破つた。やがて、彼は一軒の家の中へ入つて行つた。中には、ただたくさんのレンガや石ころが散らばつてころがっているだけだった。彼はがっかりして、そ

の場にへなへと座り込んでしまった。のどの渇きを覚えたので水筒の水を一気に飲みほした。「他を探して見るか。」と思い、立ち上った時だった。突然、奥の部屋から人の笑い声がして来た。彼は飛び上らなばかりに喜んで、その部屋へ走って行き、中を覗き込んだ。すると、男が三人後向きになって何かを話しながら笑っていた。彼は「あのー」と言いながらその部屋に足を踏み入れた。とたんに笑い声がビタリと止った。そして一勢にこちらを向いた。彼は「ギョッ」としてその場に立ちすくんだ。どうだろう、皆同じ顔、それが彼の顔とそっくりなのである。彼は「ヒュー」と低い声を出すと、持っていた水筒をそれらに投げつけた。するとサーッと音と共に砂が崩れ落ち、どす赤い血がどつとその中から流れ出た。彼は「ウワーッ」と言う叫び声と共に外に飛び出した。外は相変らずしーんと静まり返り、太陽の無言の光がさんさんと降り注いでいた。ただ彼の叫び声が辺りに木霊していた。彼は、もう何が何んだか訳が判らなくなり、しばらくじっと頭をかかえてその場に立たずんでいた。が、またとほとほと歩き出した。すると向こうの方から、今度は「キンコンカンコン」「キンコンカンコン」と言う鐘の音がして来た。彼はその方を見ると、教会らしい建物からそれは聞えて来ていた。彼の足は無意識のうちにその方向に向いていた。やがて教会の前まで来ると、独りでに鐘の音は止んだ。と、その時、その赤さがでまだらの様になった鐘の中から、一匹のハトが「バタバタ」と勢よく飛び立った。それは街の上を何回も旋回していた。彼はじっとそれを目で追っていた。やがてハトは向こうの方に向きを変えて飛んで行った。彼は「何故だかこのハトについて行けば助



と鳴っていた。彼は椅子から転げ落ちる様にして後ずさりした。じりじりと無言のまま彼女は近付いた。

「君、やめてくれ。助けてくれ……………」

彼は床に置いてあった薪の束にけつまずいてそこに倒れた。その拍子に右足をしたたか打ってしまった。前の傷がずきずきとうずき始めた。彼はついに壁に突き当たってしまった。もうこれ以上退る事は出来ない。彼の顔は恐怖にひきつっていた。女はメスをしっかりと握りしめると、彼の目の前にぐつと近付いた。

「おいやめろ!! ウワーッ!! あーッ!!……………」

外では雪が、悪魔の様に恐ろしく、また重々しく、天使の様にやさしく、美しく、無言のまま、静かに降っていた。



抜 殻

三年 青 木 明 節

何故、こんなに淋しいのだろうか。 分からない。

かるのではないか」と思いその後を追って一目散に駆け出した。やがて街を出ると、また茶色と青色の世界に出た。もう、彼の膝はがくがくなり始め、足の筋肉と体中の筋肉はぶるぶるとけいれんし始めている。しかし、彼はハトを見失うまいと、一生懸命走り続けた。頭はガンガン鳴り始め、のどがひりひり痛く、目の前がぼーっとかすみ出して、ついに何も見えなくなりその場に倒れ伏してしまつた。彼ははつと目をさました。目の前には、もうすでに火の消えている暖炉があつた。

「何だ夢か。フーッ」と大きく深呼吸をした。「しかしいやな夢を見た物だ」と身震いをした。この寒いのに彼は体中に汗をびっしょりとかいていた。そして顔の汗を手で撫でながら、ふと横を見た。「アレッ」と彼は声を上げた。そこにはいるべきはずの彼女の姿はなかった。「変だな」と思い顔を反対側に向けた。すると雪明りにぼんやりと彼女らしい人影が立っていた。

「何だ君か。一体どうしたんだいそんな所で」

彼は心配そうに尋ねた。しかし返事はなかった。

「おい君、本当にどうしたんだい。『ゲッ!!』き、き、君はまさか……………」

彼は恐怖の声を上げた。彼の目に映ったのは、彼女が鈍く光るメスを、手に持って、そこに立っているのである。いつしか、彼女の美しくやさしい顔も、恐ろしくゆがんでいた。そして不気味な笑いを口元に浮べていた。じりりと彼女は近付いた。

「き、君だったのか精神病患者は!!」

彼の顔は蒼白になり、顔の筋肉がけいれんして、歯が「ガチガチ」



何故、こんなに怖しいのだろうか。 分からない。

何故、こんなに悲しいのだろうか。 僕にはそれが分からない。

「僕は今日迄こんなことを何回となく云ってきたことだろうV……………」僕はこの世に十八年間生きてきた。あんなかつこうで生きている大人達が分からない。話しといえは、下らない噂さと、結局は自分を卑しめるだけの愚痴ばかりの人達、あれで人間なのだろうか。僕には耐えられない。

生まれ、働き、妻を娶り、子を持ち、孫を持ちそして死んでいく男達。僕には分からない。それで幸福そうな顔をしている。幸福なのだろうか。幸福とはそんなものだろうか。僕には総てが分からないのだ。あの男達、女達、ええ、一体なんの為に、コセコセと卑屈にはいつくばって生きているのだ。僕には皆自分からしないのだ。嗚呼。僕には総てが分からないのだ。分っているのは、この世の中は、淋しくて、怖しくて、悲しいという事実だけだ。

「曇天」

曇天の日

寺の鐘の音を聞く

灰色の雲

鈍い鐘の音

すべて統一されている。

“塊”

どす黒い塊

冬の日 雨の中の電車

ベツトリと濡れて

重く走る

どす黒い塊

×

×

×

×

僕にはもう耐えられないのです。今迄に何回こう絶叫したかったでしょう。しかし、耐えてきました。しかしもう我慢できません。あなたは何です。何故です。僕はあなたがもう少し人間的であって欲しいのです。僕のあなたによる害というものは数えきれません。なによりもその精神面に対するものは僕を発狂寸前迄に追いやりました。しかもあなたは、僕がなにがおこっても平気な風であるという事を云いました。あなたの目は節穴です。僕の悩みがあなたに分かるか。分かるもんな、浅薄な君に。だから僕は狂いました。話す相手もなく日記をつけ、一日十頁、二十頁、もつけました。君にその苦しさがわかるか、そりゃ君にも悩みはあるだろう。僕はそれを考えるべく君にふれないようにしました。互いにもう大人なのですから、しかし、君のその態度、考え、すべてに僕は耐えられんです。自分のことしか考えないエゴイスト、自分さえよければよいというエゴ、そして自分で「僕は案外のベシミストでね」などといっている無神経。人の幸福というものを考えたことがあるのか、他



僕は今自分を破壊しようとしている。

これが君に分かるか、

この気持が君に分かるか

肉体も精神も

今限界にきていることも分かっているのだ

僕には。

人間は孤独だ

これが自分にハッキリわかった時から

自分は駄目になった。

×

×

×

×

僕は嘘は大嫌いだ。嘘つきな人間はもう話しにならん。嫌悪、軽蔑、そんな感情を通りこした向うの世界にある。何故「嘘」をつくのだろう。それが自分に利害関係があるのなら、或る程度の当然（？）とうなづけるのだが、全然利害等に関係ないのに嘘を云う。どこが楽しいのだろう。そういう奴等の嘘ときたらもう芸術（？）の部類に入る程巧みなのだ。全く完全にころりとやられてしまう。前々からこいつは嘘つきなのだと分かっているが、それはこっちがうかつなのではなくて、相手のその技術（？）があまりにうますぎるのだ。そういう嘘について、楽しんでるのだろう。もちろん相手の感情など何の気にもせず。そんな楽しみ程、貧しくて、卑屈で汚らわしいものは、この世界に又と無いのに。又、そんな人間程いいやらしい人間は又と無いのに。——特ニ、コノ文ニ限り、M君

人の幸福を妨害ばかりして、君はさっきも僕に「おまえがいちいちそんなことを気にするがらか」と僕に云いました。昨日、一人で泣きました。涙が自然に流れてきました。君の云ったことが、君の行動が悲しいのではない。こんな奴が居るんだと思うと、この僕は不幸だと悲しくなりました。そして眠れなかった。勉強などなおさらできやしなかった。これが「氣にしない男」ですか。いろいろの悩みを話す人もなく（しかし、これは人間に生まれて当然なことだと、今では知った）小説を書いたり、詩を書いたり、なによりも毎日云いたい事を考え事を日記につけた。それも膨大な数です。これが「氣にしない男」ですか。僕は生れつき傷つきやすい。自惚れなどではない。かえって恥ずべき事だと思っている。僕はいつもこうして書くことによって、それを解消してきたのだ。君に僕の色々な悩みを分かってくれとは云わない。僕の事を理解してくれとはいわない。どうせ分かっちゃしないんだから、誰にも、しかし、これ以上僕に重荷を背おわせなくてくれ。頼む。もう少し人間らしくしてくれ。頼む。僕が君にこんなことを言う心を少しでも分かってくれ。自分の好きなことはもちろんしてくれ。しかし他人の迷惑になることは少しでもしてくれ。僕は君を憎悪し、軽蔑する。少しは自分を顧みてくれ。僕がどんなに苦しんでいるのか分かります。小さいのに、小さなことをクチクチ云う。弱い者いじめをする卑怯者。

×

×

×

×

トK君ノ両君に捧ゲタイ——



×

×

×

×

「今晚」

八月十五日の夜に

空は満月がある

あの月に

人の手はすでに達した

しかし

人間同志の間には

何時

手がつなげるのであろうか

×

×

×

×

・「幻想」

遠い広野を一人行く、僕

いつのまにか涙もかれ

足は重く砂にくいこむ

月は中天に丸く輝き

ライオンは空間にほえる

遠い広野を、僕は一人行く

△詩は産むものではなく、産まれるものであるVということを知っているかい。

無の空間

真暗な立方のその中に

僕の叫びが呻きが

吸いとられていく

誰にも

何処にも

漏れない内に！

あゝ、僕は苦しいのだ
窒息だ。

やはり人には愛が必要なのだ。愛情が必要なのだ。でなければ駄目だ。心の底から暖めてくれる愛の灯が必要なのだ。昔の中国の

人はその環境にも甘えてはならない。

最後に僕はこう云いたい、というのは他でもない。三年間の間に少なからず僕に接した友々よ。きつと僕をこう思ったに違いない。

そう僕は確信する。"アイツハ全ク幸福ナ奴ダナ。イツモ、ニヤニヤニコニコシテ、云イタイ事ハデカイ声ヲハリアゲテ云イホウダイ、ガタガタガタガタ大キナ声ヲアゲテ騒ギ、アケツビロゲテ笑ウ。アンナ奴ニハ悩ミナンカ、ナンニモ無インダロウナ。俺ミタイ、全ク幸福ナ奴ダナ、フン。とざつとこうである。嗚呼、なんという愚かな人々よ。自分の内面を顧りみたこともなく、自分を振り返って反省したこともない友々よ。全ク幸せな奴等。それ故に不幸な奴等。君達はこのでんで馬鹿にしていた僕のことさえ分かりはしなかった。これっぽっちも、アハハハハ、笑わせやがる。僕はそういう友と三年間、馬鹿な内容も思想もない話をし、大声をあげて笑ってきた。その心の底では君達を憎悪し、軽蔑し、嫌悪していたのだ。誰一人としてそうでない者はいなかった。愚かもの、僕がそう思っていることをなにも感じもせず、あいかわらず三年間くだらないことを喋ってきた者達。僕の所詮"お道化"を分からなかった人達。僕は今、ここに声を大にして云う。"不幸な軽蔑すべき愚か者達よ"と。

これらの言葉は誰かにとって、僕の裏切りになるかもしれない。しかし、それでいいのだ。人間は何時かきつと裏切られるのだから。人間に……。

聖人といわれる人や、日本の尊敬すべき人の中にも、隠遁生活者と云われる人が居た。俗界を離れ、一人閑居し、孤独を味わい、孤高の精神を持って……と云われている人々が、しかし今の僕には、それらの人々を聖人、尊敬すべき人々とは呼べない。俗界(と云って、かならずしも軽蔑すべき世界ではないのだ)にあって、愛情のこもった生活をおくってこそ、それでこそ初めてそこに尊敬すべき聖人と云われる人が生まれのだ、とそう思うのだが。もつとも孤独の生活においてメソメソとしたセンチメンタリズムに落ちいらず、その孤独に徹して、自分も身の悪と戦い、自分自身を追求するということもある。がしかし、それとても"愛"にはおよそ縁が遠いように思える。しかし太宰曰く"家庭の幸福は諸悪の元"。もつとも先に述べた愛とは家庭による……とかぎったわけではもちろんないが。

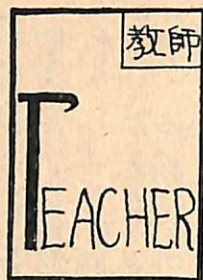
人は自分に甘えてはいけない。何に甘えて悪いと云って、自分に甘えることくらい悪い事は他には無い。他人に甘えるのは、愛敬があつて、しかもチャント限界があるから良い。しかし、人は自分自身に甘えてはいけない。何が悪いと云って、自分自身に甘えることくらい悪い事は無い。それには愛敬もないし限界もない。最後はそれに溺れて死ぬのである。人は自分に甘えてはならない。もつともつと自分に厳しくあらねばならない。人よ！自分自身に厳しくあれ

いざ行かん

まだ見ぬ山を見に行かむ

この淋しさに君は耐ふるや

牧水



卒業生に送る

教諭 大島 信 六

ここに螢雪三年を送り目出たく御卒業お目出度う。月日の立つのは早いもので三年前の四月松原高校に入学され縁あつて皆さんと共に勉強に運動にクラス主任として楽しく過ごして来ました。一年の入学の折は希望に満ちて何もかもが新しい出発でした。想い出せば一碧湖の遠足に初まり二年生秋の修学旅行の数々校内校外を問はず皆さんの周辺は皆成長への勉学と経験を積んで来ました。高校生としての一般的教養は一応修得の段階に入ったわけです。これを基礎

にして或者は大学に或者は就職に各々その人の適した方向に今や進まんとして新しい夢を又新しい希望をもって果立つ時が参りました。学校の温室から試験の多い場に出発です。どんな困難に直面しても高校時代に鍛えた心身を十二分に生かして乗り切ってください。考え方によっては三年間の高校生活が短く感じた人も又長く感じた人もあるように幸福への道又苦難への道も皆自分自身が作りだす物で自分に最適な方向に直進する事が一番大切だと思います。それには、先づ健康第一でなくてはなりません。卒業後は何かと環境が変りますので十分に注意してそれぞれの目的達成に直進して下さい。最後に皆さんの御多幸と御健康をお祈り致しまして送別の言葉とします。



「らしさ」ということを

教諭 大和久 鈴江

乙女ども乙女さびすもから玉を

たもとにまきて乙女さびすも

の古歌にみられる「乙女さびす」の「さび」は「さぶ」の連用形である。「さぶ」は辞典をひくと「接尾語で、動作の移り進んで適応するさまをあらわす語」とある。

接尾語が活用して連用形「さび」の形をとるということはしばらくおき、(名詞でも雨が雨傘とか、酒が酒屋と語尾変化するので、接尾語の活用も許されてよいと思うが)「動作の移り進んで適応するさま」とは端的にいえば「らしくする」ということである。今、盛んに叫ばれている人づくりとは、とりもおさず人らしき人をつくるということにはかならない。そういえば私たちは学生時代に先生方から「らしくせよ」とくりかえしいきかされたことを思い出す。「学生は学生らしく」というのが当時の学生に与えられたキヤッチフレーズであった。事実この言葉を守ることによって私たちの生活態度の指針は全くくるわなかったようである。趣味も娯楽も服装も髪型もこの言葉を念頭におけば学生としての軌道はずさなですんだし、他人も信用してくれたようだった。

である。もちろんこういう前に自分自身が教師らしくあらねばならぬことはいまでもないことであるが……。要するに「らしさ」「らしくあれ」ということは、生徒にも先生にも、否すべての人に与えられた課題なのである。

「ある祝宴に列して」

教諭 大石 清司

今、本校に例をとってみても、現在の学生は、学習については勿論のこと、服装の点に至るまで細かく規定されて相当制約を受けているが、これに対して心の中に「もう少し自由にしてもらいたい」という一抹の不平をもっている生徒諸君も少なくないであろう。しかしそんな不平をもっている者があつたら、その人は一応自分自身に「らしき生徒」であるかどうかを反省してもらえないだろうか。必ずその人のどこかにらしからざる点があることに彼自身気づくにちがいはあるまい。つまり学校のあらゆる規則も、先生方の心配も(たとえそれが杞憂にすぎなくとも)すべてこのらしからざる点を除いてらしき生徒に育てたい為の非願にほかならないのである。

試みに生徒諸君は街にあふれる学生さんたちの態度や服装を一見せられたい。午前中から喫茶店に出入する者、マージャンクラブに入り浸る者、女子学生のパーマや派手なブラウス等々、学生らしからざる学生がいかに多いことか。きちんと身につけられた制服の下の真白なワイシャツや、さっぱりと学生らしくとのえらえた女子学生の髪型がどんなに接する者に清潔感や好感を与えるかは、前者と比較することによってより明白に生徒諸君の胸にきざまれたことであろう。

漱石が作品「坊ちゃん」の中で主人公の坊ちゃんにいわしめたこととは「男は白いハンカチを使うものだ」は男子らしさをあらわし得て至言である。吉野滝の宮で袂をひるがえして舞い、「乙女さびすも」と当時の大宮人を恍惚たらしめた乙女姿はどんなに可憐な乙女らしさがあつたであろう。

生徒諸子よ、どうか学生らしくあれ!! 私はいくら返しこう祈るの

私はこの間、知人の結婚の祝宴に列席した。「何か一言でいいから祝詞を述べてほしい」。などと依頼されていたので、数日間人知れず心を悩ましていた。当日の朝は顔を洗う時に早くも胸がドキドキ鳴った。本気にはしないかも知れないが事実である。なにしろ五十人も他人が集る中で、厳粛な祝宴でその場に最もふさわしいことを言わねばならないということは、非力な私にとって相当の負担である。とつおいつ思案して前日の晩床に就く前に「一言うべきことがまとまつた。しかし、骨子だけで流暢な挨拶ができるものではない。それで洗顔に際して私の心臓が主人公の面目を大いに心配したというわけなのである。

さて、祝宴に臨んで、私はどうやら予定通りの祝詞を滞りなく述べる事ができたが、これには私の順番が後の方で、その間にシャンパンやらブドウ酒やら若鶏やらがずいぶん私の腹の底に納められたことが作用しているようである。このときに、私がいちばん述べたく思い、しかしそれは私の列席を思に着せるようにもなりかねない

編集後記

からと思つて止めたことがあるので、それをひとつここに記してみよう。それは「積み重ねられたものの持つ力」ということでもあろうか。

これほどまでに私は苦心して祝詞を述べ、そして晴れの盛儀の記念のための撮影に努力したのであるが、元来不精者の私にいったい何がそれほどまでの奮闘を強いたのであろうか。それを私は式場に向う地下鉄の車内でも思つたのであったが、私はその為に列席した新婦のT子さんとはいはば間接の知人でしかないのである。つまり私の妻の方が直接親しかつたのである。私は妻を通しての知り合いでそれもまだ三年ほどに過ぎない。そして年少でもあり関係も薄いT子さんから別にこれという恩誼も受けてはいないのである。結局のところ、それはT子さんという人がこの三年間妻のみでなく私にも親しく交際し、そうしてその間T子さんの人柄がただの一度も悪い感じを感じさせたことがなかった。

ということが一つの原因であつたのである。とりとめもない親交、T子さんの人柄がいかに温順で静穏であつたにせよ、私との三年間、そして妻との四年間という月日が無かつたなら、私は彼女の為に万障繰り合せてまで出席はしなかつたであらう。「ローマは一日にして成らず」とか、「因果応報」とかの先賢の言葉がやはり揺ぎない経験の深さを蔵していることを、私は最近の経験からも思い知らされたのである。

今年の「る・くーる」如何でしかたか。委員会としては精一杯の努力をしました。しかし各所に御不満な点がある事と思いますが、お許し下さい。「る・くーる」を発刊して以来、ほとんど毎年の責任者が原稿の足りないことで、頭を痛められた様ですが、今年はそれに反して、応募原稿が一八〇頁分も集り、委員一同嬉しい事で頭を痛めました。原稿を選択すると言う事は、本を作る上で最も基本となるものですが、「る・くーる」も十一年目にしてその段階に入つたようです。今年の「る・くーる」を作製するに当って、委員会では、生徒会誌の解釈の仕方に関して、生徒会誌と言う以上生徒会及び各委員会の年間活動の記事を主体とすべきであるという説と「る・くーる」の持つ意味、すなわち「心」であるから文芸誌としての道を進むべき、と二通りの意見が対立しました。しかし結果は、原稿が大へん多く集まつた為に、年間活動、クラブ紹介は全面カットとなり、文芸一本の姿となつた次第です。この仕事に携つて五ヶ月。その間精神的に最も疲れた事を一つ上げますと、八〇頁分の原稿を落さなければならなかつた事です。この原稿の中には委員会に依頼した物や、四十頁にも及ぶ一年生の大作などが有りました。最後に、応募及び校正などの各方面に御協力下さつた方に、委員一同深く感謝致します。

(T記)

“る・くーる”

第11号

昭和三十八年三月十日印刷
昭和三十八年三月十七日発行

編集所 東京都世田ヶ谷区上北沢一ノ四二九

発行所 東京都世田ヶ谷区上北沢一ノ四二九
都立松原高等学校文化委員会

印刷所 東京都渋谷区幡ヶ谷二ノ二二一
都立松原高等学校生徒会

印刷所 東京都渋谷区幡ヶ谷二ノ二二一
竹内美術印刷株式会社

TEL(31)九四九四番

